宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第169集

尾立（おだて）第２遺跡

Odate 2 Site

東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書57

２００８

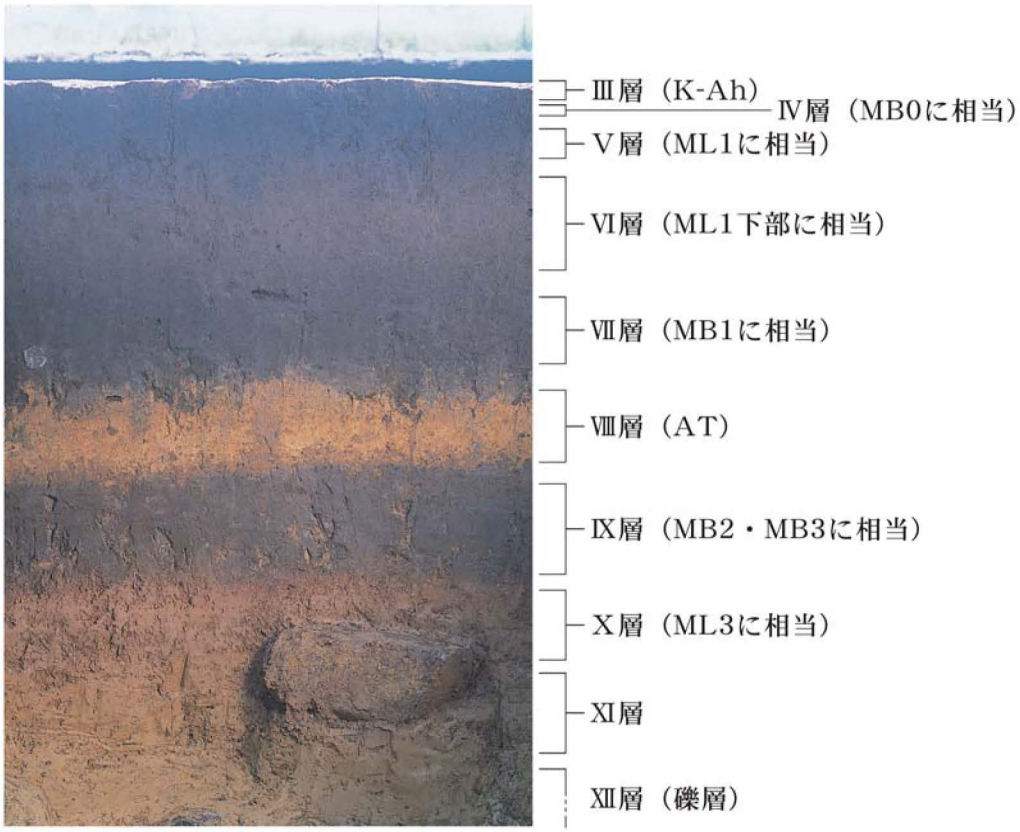
宮崎県埋蔵文化財センター

尾立第２遺跡より尾鈴連山をのぞむ

巻頭図版2

Ⅸ層Ｂ９Gr出土　石器製作ブロック出土遺物

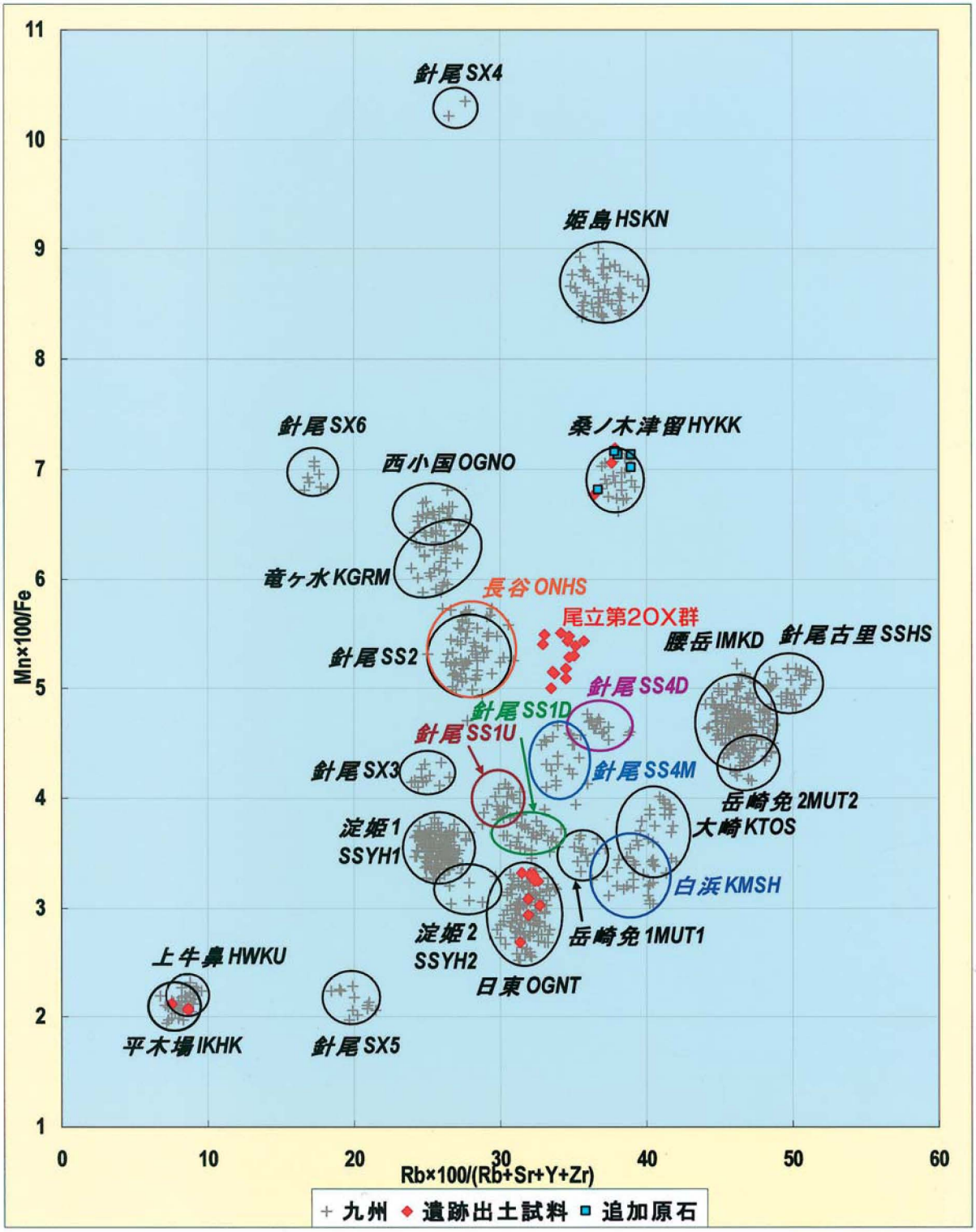
礫群と集石遺構



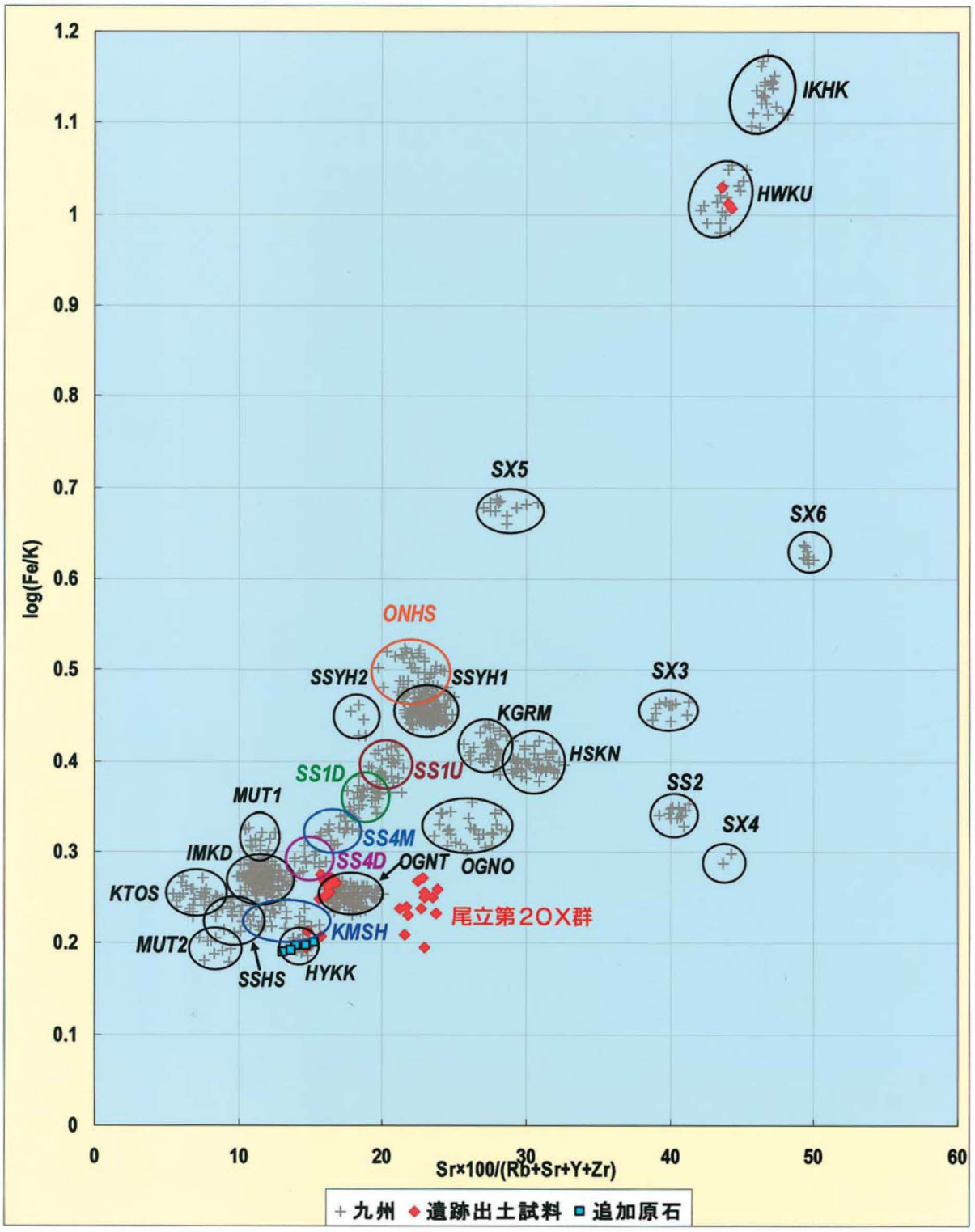
K３グリッド壁面土層堆積状況

尖底の貝殻文系土器（掲載番号578）

不明遺構（SZ1）出土の弥生土器

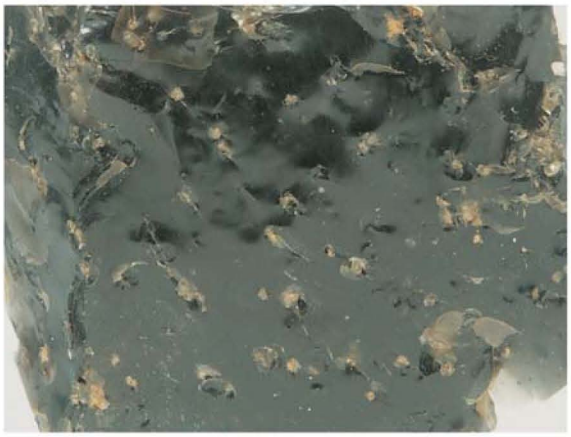


尾立第２遺跡出土黒曜石産地判別図１



尾立第２遺跡出土黒曜石産地判別図２

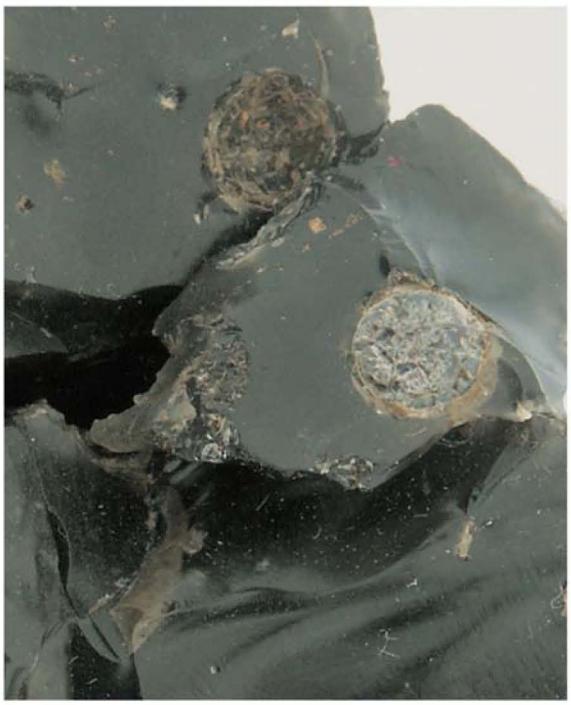
巻頭図版8



黒曜石③類（日東系）

黒曜石①類（桑ノ木津留系）

黒曜石②・⑤類（尾立第２OX群）



黒曜石④類（上牛鼻系）

序

宮崎県教育委員会では、平成11年度から東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した尾立第２遺跡は、平成17年から平成18年にかけて発掘調査が行われ、後期旧石器時代の石器群や礫群、縄文時代早期の土器や石鏃、集石遺構等が確認されました。また、弥生時代や近世の遺構・遺物も確認され、当地域が長い期間利用されていたことが発掘調査により明らかになりました。

ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、ならびに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚く御礼申し上げます。

平成20年２月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　清　野　　勉

例　　言

1　本書は平成17年度に実施した、東九州自動車道（都農～西都間）建設に伴う尾立第２遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は日本道路公団から委託を受け宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお、日本道路公団は平成17年10月１日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書では日本道路公団として記載する。

3　本遺跡は、調査時は町道を挟み「朝倉遺跡」と「尾立第２遺跡」と呼称していたが、「朝倉」という地名はこの地域にみられず、字名も湯牟田、俵石、竜ヶ平である。遺跡の所在は『都農町遺跡詳細分布調査報告書』によると遺跡番号1010・1011「尾立遺跡」の範囲内となっており、今回の報告に際し遺跡名を「尾立第２遺跡」に変更する。なお、文書・記録類はすべて「朝倉遺跡」となっている。

4　現地での実測図等の記録は安藤利光、山田洋一郎、岸田裕一、福田光宏、石津晴菜を中心に行った。

5　現地での写真撮影は岸田が行った。また、遺物写真は牛島茂氏（奈良文化財研究所）、竹田亨志、今塩屋毅行の協力・助言を得て岸田が行った。

6　尾立第２遺跡では空中写真撮影を(有)スカイサーベイ九州に、測量杭設置を(株)新藤測量設計事務所に、自然科学分析を(株)古環境研究所に委託して行った。なお、第Ⅴ章に掲載した自然科学分析の成果は、成果報告に若干体裁を替えて掲載した。

7　遺構・遺物の実測図作成は、整理作業員の補助を得て岸田が行った。また、石器実測図及びトレースの一部は、(株)九州文化財研究所に委託した。

8　本書に利用した周辺遺跡分布図は国土地理院発行の１／50,000図（都農）を利用した。また、遺跡周辺地形図は土地分類基本調査図(都農)を、遺跡周辺地形図等は日本道路公団宮崎工事事務所提供の１／2,000図を基に作成した。

9　土層断面、遺構埋土の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局／監修の『新版標準土色帖』に拠った。

10　本書で用いた標高は海抜絶対高である。また方位は座標北(G.N.)を基本とするが、遺構実測図などの一部に磁北(M.N.)を用いた。

11　本書で用いた遺構・火山灰の略号は、次のとおりである。

SC：土坑　SI：礫群・集石遺構　SX：石組遺構　SZ：不明遺構

K-Ah：鬼界アカホヤ火山灰　Kr-Kb：霧島小林軽石　AT：姶良Tn火山灰

12　遺物実測図の縮尺は、石器１／２（Ⅳ章第７節のみ２／３で等一）、縄文土器１／３、弥生土器１／４と統一した。

また、遺構実測図においても礫群・集石遺構、土坑、不明遺構を１／30、石組遺構を１／40としている。

13　本書の執筆・編集は岸田が行った。

14　出土遺物および諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　立地と環境

第１節　地理的環境 …… 3

第２節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の経過と方針

第１節　確認調査の概要 …… 9

第２節　発掘調査の経過 ……12

第３節　整理作業の経過 ……13

第４節　普及活動 ……13

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　基本層序 ……14

第２節　遺物包含層の認識 ……19

第３節　石材の分類基準 ……20

第４節　後期旧石器時代Ⅰ期 ……21

第５節　後期旧石器時代Ⅱ期 ……21

第６節　後期旧石器時代Ⅲ期 ……37

第７節　後期旧石器時代Ⅳ期 ……76

第８節　縄文時代早期の遺構と遺物 ……87

第９節　弥生時代の遺構と遺物 ……111

第10節　その他の遺構と遺物 ……117

第Ⅴ章　自然科学分析の成果

第１節　土層とテフラ ……119

第２節　放射性炭素年代測定 ……124

第３節　蛍光Ｘ線分析（黒曜石産地推定） ……126

第４節　種実同定 ……128

第Ⅵ章　まとめ

第１節　後期旧石器時代 ……129

第２節　縄文時代早期 ……133

挿図目次

第１図 尾立第２遺跡および東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡の位置図 … 2

第２図 林用軌道路線図 …… 5

第３図 周辺遺跡分布図 …… 6

第４図 周辺遺跡地形断面図 …… 6

第５図 周辺遺跡地形分類図 …… 8

第６図 確認調査出土遺物実測図 …… 9

第７図 遺跡周辺地形図 ……10

第８図 グリッド配置図 ……10

第９図 確認トレンチ配置図 ……11

第10図 尾立第２遺跡基本土層図 ……14

第11図 層位別遺物出土状況 ……15

第12図 Ⅳ層・Ⅴ層遺物出土状況 ……16

第13図 Ⅵ層・Ⅸ層遺物出土状況 ……17

第14図 土層堆積状況 ……18

第15図 後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図 ……23

第16図 後期旧石器時代Ⅱ期石器分布図 ……25

第17図 ブロックＡ石器分布図 ……26

第18図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（１） ……26

第19図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（２） ……27

第20図 ブロックＢ石器分布図（器種） ……28

第21図 ブロックＢ石器分布図（石材） ……29

第22図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（３） ……30

第23図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（４） ……31

第24図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（５） ……32

第25図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（６） ……33

第26図 後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（７） ……34

第27図 Ⅱ期礫群実測図 ……34

第28図 後期旧石器時代Ⅲ期石器分布図 ……40

第29図 Ⅲ期石器接合状況 ……41

第30図 Ⅲ期礫群実測図 ……42

第31図 ブロックＤ石器分布図（器種） ……46

第32図 ブロックＤ石器分布図（石材） ……47

第33図 ブロックＥ石器分布図（器種） ……48

第34図 ブロックＥ石器分布図（石材） ……49

第35図 ブロックＦ石器分布図（器種） ……50

第36図 ブロックＦ石器分布図（石材） ……51

第37図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（１） ……52

第38図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（２） ……53

第39図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（3） ……54
第40図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（4） ……55
第41図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（5） ……56
第42図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（6） ……57
第43図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（7） ……58
第44図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（8） ……59
第45図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（9） ……60
第46図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（10） ……61
第47図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（11） ……62
第48図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（12） ……63
第49図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（13） ……64
第50図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（14） ……65
第51図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（15） ……66
第52図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（16）
及び日東産黒曜石分布図 ……67
第53図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（17） ……68
第54図 後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（18） ……69
第55図 細石刃打面幅・厚相関図 ……76
第56図 後期旧石器時代Ⅳ期石器分布図 ……77
第57図 後期旧石器時代Ⅳ期石器実測図（1） ……78
第58図 後期旧石器時代Ⅳ期石器実測図（2） ……79
第59図 後期旧石器時代Ⅳ期石器実測図（3） ……80
第60図 後期旧石器時代Ⅳ期石器実測図（4） ……81
第61図 後期旧石器時代Ⅳ期石器実測図（5） ……82
第62図 縄文時代早期遺構分布図 ……89
第63図 集石遺構実測図（1） ……90
第64図 集石遺構実測図（2） ……91
第65図 集石遺構実測図（3） ……92
第66図 集石遺構実測図（4） ……93
第67図 集石遺構実測図（5） ……94
第68図 集石遺構実測図（6） ……95
第69図 土坑実測図 ……96
第70図 縄文時代早期土器実測図（1） ……98
第71図 縄文時代早期土器実測図（2） ……99
第72図 縄文時代早期石器実測図（1） …… 100
第73図 玉髄製石器分布図 …… 100
第74図 縄文時代早期石器実測図（2） …… 101
第75図 チャート製石器分布図 …… 101
第76図 縄文時代早期石器実測図（3） …… 102
第77図 その他の石器分布図 …… 102
第78図 縄文時代早期土器・石器分布図 …… 103
第79図 縄文時代早期石器実測図（4） …… 104
第80図 縄文時代早期石器実測図（5） …… 105
第81図 縄文時代早期石器実測図（6） …… 106
第82図 玦状耳飾実測図 …… 107
第83図 SZ1実測図 …… 112
第84図 SZ1出土弥生土器実測図（1） …… 112
第85図 SZ1出土弥生土器実測図（2） …… 113
第86図 SZ1'土層断面図 …… 115
第87図 釘・徳利実測図 …… 117
第88図 SX1実測図 …… 118
第89図 弥生時代以降遺構分布図 …… 118
第90図 K３グリッド土層柱状図 …… 123
第91図 K３グリッド下部の火山ガラス比ダイヤグラム
…… 123
第92図 試料５ 暦年代較正曲線図 …… 125
第93図 桑ノ木津留産黒曜石産土地と消費遺跡 … 131
第94図 分析試料追加原石採取地 …… 132

表　目　次

第１表 周辺遺跡地名表 …… 7
第２表 石器石材分類表 ……20
第３表 Ⅱ期接合資料剥離工程表 ……24
第４表 Ⅰ期・Ⅱ期石器観察表 ……35
第５表 Ⅲ期礫群観察表 ……42
第６表 グリッド別器種分類表 ……43
第７表 Ⅲ期石器観察表 ……70
第８表 Ⅲ期接合資料剥離工程表 ……75
第９表 Ⅳ期石器観察表 ……84
第10表 Ⅳ期接合資料剥離工程表 ……86
第11表 集石遺構観察表 ……88
第12表 土坑観察表 ……96
第13表 縄文土器観察表 …… 108
第14表 縄文時代石器観察表 …… 109
第15表 弥生土器観察表 …… 116
第16表 火山ガラス比分析結果表 …… 122
第17表 重鉱物組成分析結果表 …… 122
第18表 屈折率測定結果表 …… 122
第19表 試料と方法 …… 124
第20表 測定結果表 …… 124
第21表 尾立第２遺跡出土黒曜石の産地推定結果
…… 127

図 版 目 次

巻頭図版

巻頭図版１　尾立第２遺跡より尾鈴連山をのぞむ

巻頭図版２　Ⅸ層B9Gr出土　石器製作ブロック出土遺物

巻頭図版３　礫群と集石遺構

　　K3Gr壁面土層堆積状況

巻頭図版４　尖底の貝殻文系土器（掲載番号578）

巻頭図版５　不明遺構（SZ1）出土の弥生土器

巻頭図版６　尾立第２遺跡出土黒曜石産地判別図（１）

巻頭図版７　尾立第２遺跡出土黒曜石産地判別図（２）

巻頭図版８　旧石器時代の使用石材：黒曜石①類

　　旧石器時代の使用石材：黒曜石③類

　　旧石器時代の使用石材：黒曜石②・⑤類

　　旧石器時代の使用石材：黒曜石④類

巻中写真図版

写真１　尾立第２遺跡とトロッコ道 …… 5

写真２　旧祠堂跡 …… 5

写真３　整理作業：石器実測風景 …… 13

写真４　整理作業：礫接合風景 …… 13

写真５　都農町遺跡報告会展示風景 …… 13

写真６　SZ1検出状況（南西より撮影） …… 114

写真７　SZ1’半截状況（Ｂ－Ｂ’） …… 114

写真８　種実写真 …… 128

巻末図版

図版１

1　遺跡遠景（北西より） …… 137

2　Ⅵ層検出状況 …… 137

図版２

3　Ⅷ層（AT面）検出状況 …… 138

4　Ⅷ層（AT）除去後の地形 …… 138

図版３

5　Ⅸ層出土　ブロックＡ検出状況 …… 139

6　土坑検出状況 …… 139

図版４

7　SI18検出状況 …… 140

8　ブロックＡとSI18 …… 140

9　SI30検出状況 …… 140

10　SI23検出状況 …… 140

11　SI27検出状況 …… 140

12　遺物出土状況（B9Gr・B10Gr） …… 140

13　SI44・45検出状況 …… 140

14　SI55・56検出状況 …… 140

図版５

15　K-Ah堆積状況 …… 141

16　調査Ｂ区　Ⅴ層遺物出土状況 …… 141

17　SI38検出状況 …… 141

18　SI38検出層 …… 141

19　SI41検出状況 …… 141

20　Ⅵ層石器出土状況 …… 141

21　SI33検出状況 …… 141

22　SI53検出状況 …… 141

図版６

23　SI34検出状況 …… 142

24　SI34配石検出状況 …… 142

25　SI1検出状況 …… 142

26　SI1半截状況 …… 142

27　SI3検出状況 …… 142

28　SC3検出状況 …… 142

29　SC3断ち割り状況 …… 142

30　SC7・8完掘状況 …… 142

図版 7
31 SZ1半截状況 …… 143
32 SZ1遺物出土状況 …… 143
33 弥生土器検出状況 …… 143
34 SZ1完掘状況 …… 143
35 SX1半截状況 …… 143
36 SX1完掘状況 …… 143
37 SX1石組除去状況 …… 143
38 SE1完掘状況 …… 143
図版 8
39 後期旧石器時代Ⅰ期の石器 …… 144
40 後期旧石器時代Ⅱ期の石器（1） …… 144
41 後期旧石器時代Ⅱ期の石器（2） …… 144
42 後期旧石器時代Ⅱ期の石器（3） …… 144
43 後期旧石器時代Ⅱ期の石器（4） …… 144
44 後期旧石器時代Ⅱ期の石器（5） …… 144
45 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（1） …… 144
46 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（2） …… 144
図版 9
47 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（3） …… 145
48 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（4） …… 145
49 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（5） …… 145
50 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（6） …… 145
51 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（7） …… 145
52 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（8） …… 145
53 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（9） …… 145
54 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（10） …… 145
図版10
55 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（11） …… 146
56 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（12） …… 146
57 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（13） …… 146
58 後期旧石器時代Ⅲ期の石器（14） …… 146
59 後期旧石器時代Ⅳ期の石器（1） …… 146
60 後期旧石器時代Ⅳ期の石器（2） …… 146
61 後期旧石器時代Ⅳ期の石器（3） …… 146
62 後期旧石器時代Ⅳ期の石器（4） …… 146
図版11
63 縄文時代早期の土器（1） …… 147
64 （裏） …… 147
65 縄文時代早期の土器（2） …… 147
66 （裏） …… 147
67 縄文時代早期の土器（3） …… 147
68 （裏） …… 147
69 縄文時代早期の土器（4） …… 147
図版12
70 縄文時代早期の石器（1） …… 148
71 縄文時代早期の石器（2） …… 148
72 縄文時代早期の石器（3） …… 148
73 縄文時代早期の石器（4） …… 148
74 縄文時代早期の石器（5） …… 148
75 縄文時代早期の石器（6） …… 148
76 縄文時代早期の石器（7） …… 148
図版13
77 SZ1出土弥生土器（1） …… 149
78 SZ1出土弥生土器（2） …… 149
79 SZ1出土弥生土器（3） …… 149
80 SZ1出土弥生土器（4） …… 149
81 SZ1出土弥生土器（5） …… 149
82 SZ1出土弥生土器（6） …… 149
83 SZ1出土弥生土器（7） …… 149
84 SZ1出土弥生土器（8・9） …… 149
85 SZ1出土弥生土器（10） …… 149
図版14
86 SZ1出土弥生土器（11） …… 150
87 SZ1出土弥生土器（12） …… 150
88 SZ1出土弥生土器（13） …… 150
89 SZ1出土弥生土器（14） …… 150
90 SZ1出土弥生土器（15） …… 150
91 SZ1出土弥生土器（16） …… 150
92 SZ1出土弥生土器（17） …… 150
93 SZ1出土弥生土器（18） …… 150

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年に基本計画がなされ、平成９年３月に門川～西都間が整備計画区間となった。このうち都農～西都間は同年12月に建設大臣（現国土交通大臣）から日本道路公団へ施行命令が出され、翌年の２月から事業に着手している。その間、県教育委員会では、平成６年度に延岡～西都間の決定路線上の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響を受ける部分については工事着手前に発掘調査を実施することとなった。

調査は平成11年度から日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターで行っている。なお、日本道路公団は分割民営化され、平成17年10月１日から西日本高速道路株式会社九州支社宮崎工事事務所・延岡工事事務所となった。

本遺跡は平成16年度に確認調査が実施され、後期旧石器時代および縄文時代の遺物が出土し、礫群や陥し穴らしき遺構が確認された。このため、遺構・遺物が分布すると想定される6,000㎡を対象に発掘調査が実施されることとなった。

第２節　調査の組織

尾立第２遺跡の発掘調査・整理報告は以下の組織で実施した。

調査主体

宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

（平成17年度）

所長	宮園　淳一
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課長	宮越　　尊
主幹兼総務係長	石川　恵史
調査第一課長	髙山　富雄
主幹兼調査第一係長	長津　宗重
主幹兼調査第二係長	菅付　和樹

調査担当

調査第一係

主　査	山田洋一郎
主　事	岸田　裕一
調査員	福田　光宏

調査第二係

調査員	石津　晴菜

整理担当

調査第一係　主　事　　岸田　裕一

（平成18年度）

所長	清野　　勉
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　　尊
主幹兼総務課総務担当リーダー	髙山　正信
調査第一課長	髙山　富雄
主幹兼調査第一担当リーダー	長津　宗重
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付　和樹

整理担当

調査第一担当　主　事	岸田　裕一

（平成19年度）

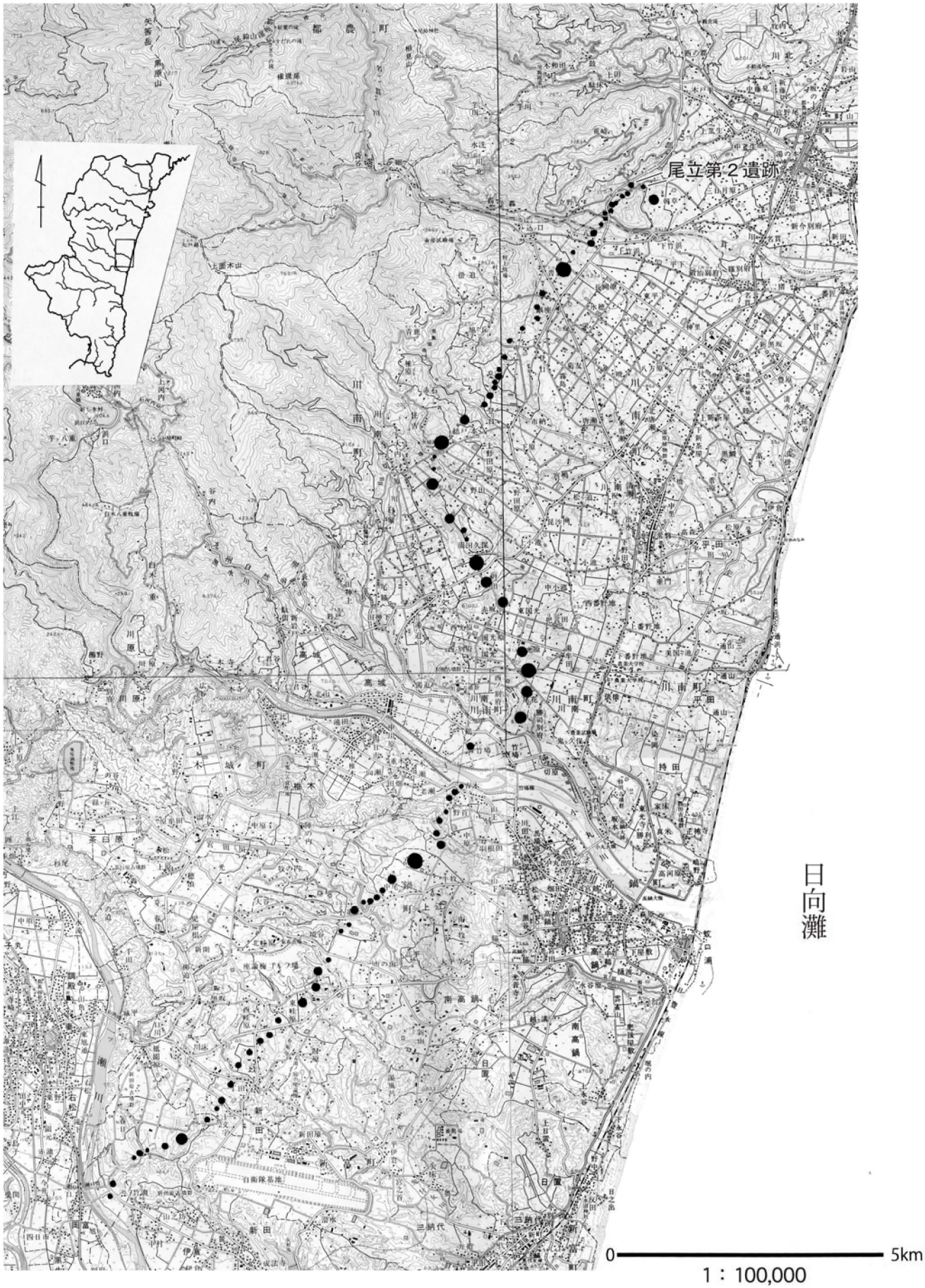
所長	清野　　勉
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　　尊
主幹兼総務担当リーダー	髙山　正信
調査第一課長	長津　宗重
副主幹兼調査第一担当リーダー	南中道　隆
主幹兼調査第二担当リーダー	菅付　和樹

整理担当

調査第一担当　主　事	岸田　裕一

調査指導（五十音順、敬称略・所属は平成17年当時）

泉　拓良（京都大学）、小畑弘己（熊本大学）、田崎博之（愛媛大学）、広瀬和雄（国立歴史民俗博物館）、本田道輝（鹿児島大学）、柳沢一男（宮崎大学）



第１図　尾立第２遺跡および東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡の位置図

第Ⅱ章　立地と環境

第１節　地理的環境

尾立第２遺跡は都農町大字川北字湯牟田に所在する。遺跡が立地する都農町は宮崎県中央部よりやや北側、宮崎平野の北端に位置する。

町の北西には九州脊梁山脈から続く山々が連なり、標高1405.2ｍの尾鈴山がそびえている。この尾鈴連山東麓から流れ出る名貫川や都農川・心見川等の、幾度もの海進や海退によって、新しい扇状地が次々とつくられている。そして古い扇状地が開析されることによって、数段の河岸段丘が形成され、現在の地形となっている。

これらの段丘は、中期更新世に形成された上・中位段丘面と、最終氷期に形成された低位段丘面とに大きく区分される。

遺跡は川南町との境をなす名貫川左岸の台地上、標高約82ｍに位置する。遺跡が立地する中位段丘面（朝草原面）は宮崎平野部で、旧石器時代の遺跡が多く確認される国光原面や唐瀬原面、新田原面と対比される。遺跡の西は開析谷となっており、遺跡を西側から眺望すると独立丘陵のような景観を呈している。遺跡からは尾立第３遺跡を遠望できる。

中位段丘面には起伏が少なく、その段丘崖付近に旧石器時代、縄文時代の遺跡が立地する。また、段丘下位の面からは尾鈴山酸性岩類を主とする拳大～径１ｍ大の礫が約10ｍの厚さで堆積している。

遺跡北西に控える尾鈴山は、県内出身の歌人若山牧水が故郷を懐かしみ「ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋もかすみのたなびきてをり」と詠んだように、地域の象徴であるとともに、本地域の地理・歴史を物語る上でも重要である。遺跡の立地する本町は、九州脊梁山脈から続く山々が尾鈴山でさらに高度を上げることで、寒風を遮り、さらに尾鈴山を越えた風がフェーン現象により、暖かい風となって吹き降りる。

発掘調査中も、尾鈴山の恩恵を受けた。尾鈴連山が雲に隠れはじめると雨が降り出す前兆であり、逆に曇っていても尾鈴山が雲に覆われず山の輪郭が見えている時には雨が降ることはほとんどなかった。

第２節　歴史的環境

尾立第２遺跡周辺は、多くの遺跡が周知されているが、発掘調査による遺跡の解明はほとんど行われていない。しかし、東九州自動車道建設に伴い、発掘調査が行われ、その成果は着実に増えつつある。

遺跡周辺には平成17年度東九州自動車道建設に伴う発掘調査の遺跡である、尾立第３遺跡、朝草原遺跡、立野第５遺跡、立野第２遺跡が立地する。上記の遺跡は直線距離で約１㎞の範囲内に立地し、徒歩にして尾立第３遺跡、朝草原遺跡が約５分、立野第５遺跡が約20分の位置に立地する（第３図）。

旧石器時代

旧石器時代の発掘調査は都農町では近年まで行われず、その存在は大野寅男氏採集資料「黒萩」出土の尖頭器[12]や、1987年の分布調査で又猪野原遺跡、京塚遺跡で採集された剥片のみであった。しかし、東九州自動車道建設に伴う発掘調査では本報告遺跡を始め尾立第３遺跡、朝草原遺跡、立野第５遺跡、立野第２遺跡で、それぞれＡＴ下位から上位にかけて旧石器時代の遺構・遺物が確認されている。特に立野第５遺跡ではＡＴ直下より環状ブロック群の可能性を示す遺物の出土が報告されている。

縄文時代

縄文時代になると、遺跡は標高20ｍ以上の高地に立地する傾向にある。開析谷によって形成された河川や、その支流に近い台地上に、遺跡が立地し、そのほとんどが早期に位置づけられる。縄文時代の集石遺構に用いられる礫は、ほぼ全てが尾鈴山酸性岩類で構成され、敲石や磨石などにも同石材の利用が確認されている。また、朝草原遺跡では草創期と考えられる尖底の無文土器が細石刃石器群と共に出土したと報告されている。後期の遺跡は、数少ないが新別府下原遺跡から貝殻条痕文土器や磨製石斧等が、新別府川原遺跡では竪穴住居跡が１軒検出されている。

弥生時代

発掘調査が行われた遺跡には、弥生中期から終末期に新別府下原遺跡、後期後半に境ヶ谷第一遺跡、後期に白水遺跡の集落跡がある。新別府下原遺跡では竪穴住居跡や周溝状遺構などの遺構と共に、多数の甕・壺が出土している。調査区外からも竪穴住居跡が試掘により確認されることから遺跡の範囲はさらに広がるものと考えられる。他に瀬戸内系の土器が出土した森遺跡でも住居跡が検出されている。また、名貫川対岸に位置する川南町所在の八幡第２遺跡では、後期の住居跡が調査されている。

これらの調査成果から、いくつかの集落遺跡が存在し、人の生活・活動などがわかるものの、集落規模は通時的に小規模である。

古墳時代

海岸部を中心に12基の県指定古墳がある。前方後円墳２基、円墳10基で、積石塚であることに特徴がある。内部主体や副葬品等は不明であるが、積石塚は県内では珍しく、都農町に集中して築造されている。海岸部以外では、新別府川原、木戸平、舟川中原に円墳が１基ずつ確認されている。

古代～近世

古代以降の遺跡は都農町では確認されていない。しかし、律令体制の時期、町内は大宰府と日向国府を結ぶ官道が通り、駅が設けられた要衝の地であった。都農に比定される「去飛」駅の存在が知られるが、詳細な位置は、未だ明らかになっていない。また、日向国は昔から馬の名産地として知られる。『延喜式』には馬牧の「都濃野」の記述があり、現在の都農を指している可能性もある。さらに、日向国の式内社の１つである都農神社は日向一ノ宮ともいわれ著名である。このように、都農町は日向国府の近くにあり、奈良～平安時代にかけ日向国の主要な役割を担った地域である。

中世から近世になると、町内には山丘頂部に平坦地がみとめられる城ン平や、空堀が確認される鍛冶屋敷で山城関連の遺跡が確認されている[13]。

近代以降（トロッコ列車の記憶）

都農町は山林がその面積の３分の２を占め、そのほとんどが国有林である。本町では林業が盛んで、当時の面影が至る所に残る。国有林の伐採が本格的にはじまったのは明治42（1909）年からで、当初木馬道が敷かれ、木材はトロッコ列車に乗せ出荷された。翌年には木軌道、大正４年には鉄軌道となって、同13年尾鈴山から都農駅までの全長50㎞が開通した。軌道は最高海抜800m、尾鈴山から大師山の北を抜け、本遺跡が挟む町道を抜け、都農駅まで続く。林用軌道を走るトロッコ列車は木材運搬だけではなく、病人の急送、日用品・食糧の買い出し、通学等の移動手段に利用され、住民の交通手段の１つとなっていた。昭和30年、トロッコより急勾配が登れる上、道路は軌道より作り易いことからトラックへと木材運搬が変わり、昭和33（1958）年に廃線となった。

本遺跡周辺を踏査したところトロッコ道の面影を残す祠堂の跡がみとめられた（写真１・２）。当時はここに林用軌道の交通安全を祈願する碑が建立されていたと地域の住民は記憶しているが、現在は近隣に移転されている。

文献

1　宮崎県埋蔵文化財センター『銀座第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第120集　2006
2　宮崎県埋蔵文化財センター『八幡第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第148集　2007
3　宮崎県埋蔵文化財センター『立野第５遺跡・立野第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第156集　2007
4　都農町『都農町史　通史編』1998
5　都農町教育委員会『新別府下原遺跡』都農町文化財調査報告書第３集　1990
6　宮崎県埋蔵文化財センター『朝草原遺跡・尾立第３遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター報告書第146集　2007
7　都農町教育委員会『森遺跡』都農町文化財調査概要報告書第５集　1993
8　都農町教育委員会『黒石遺跡』都農町文化財調査報告書第４集　1992
9　都農町教育委員会『都農町遺跡詳細分布調査報告書』1988
10　宮崎県教育委員会『東九州自動車道関連遺跡詳細分布調査報告書２』1995
11　宮崎県農政水産部農業振興課『土地分類基本調査都農』1984
12　茂山護・大野寅男「児湯郡下の旧石器」『宮崎考古』３号 1977
13　宮崎県教育委員会　南九州城郭談話会『宮崎県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ　詳細編』1999

作業員談話

K氏（男性59歳）：轟から運動会などの時は駅側に乗って行った。乗らないときは歩いて学校まで行っていた。枕木がじゃまで歩くのが大変だった。トロッコの線路はレールの幅が狭いから上を歩くのが大変だった（子供の遊び、バランスとり）。

K氏（男性59歳）：トロッコが通ると爽快でみていて楽しかった。祭りの次の日は早く帰らないといけないから朝早くトロッコで下った（学校に間に合わせる為）。貯木場側に学校があった。轟から14時頃に１台ずつトロッコを流していた。午前中は利用しないから個人が使っていた。九頭（くずえ）の上にもトロッコが通っていた。

K氏（男性59歳）：乗ったときの思い出として爽快。子供は思わずわーっと声を出す。寒さなんか感じない。ジェットコースターに乗っているようなもの。

H氏（女性60歳）：カンタロミミズがたくさんいた。トロッコの線路の上にたくさんいてそれをトロッコでひいてつぶすのがいやだった思い出がある。沢ガニ、猿が木から見ていて怖かった。

K氏（女性56歳）：小学校の終了時間と貯木場にトロッコが着く時間が同じ。材木が乗ったトロッコの後ろに乗っていた。男の人ばかり。

N氏（女性59歳）：トロッコに乗って遊ぶのは男の人ばかり。女でも男勝りの人は乗っていたと思う。尾鈴から材木を積んで一日一回貯木場まで運んでいた。日曜は休み。今は営林署と言うが昔は山師（やまし）といっていた。

K氏（60歳）：遊びで乗った。小学校のころ。自分の近所から材木場が近く、トロッコを借りて近所まで引っ張り、勾配の落ちる方に乗って遊んだ。ディーゼルが引っ張る帰りは箱ドロ（三角屋根）を引っ張っていた。父が酔っぱらった帰りに乗っていた。馬の爪に鉄を持ち込む店が三軒あった。前足も後ろ足にも鉄が打ち込んであった。溶かした鉄を直接馬の足に当て、釘を馬の足に打ち込んでいた。材木は２ｍくらい積んでいた。

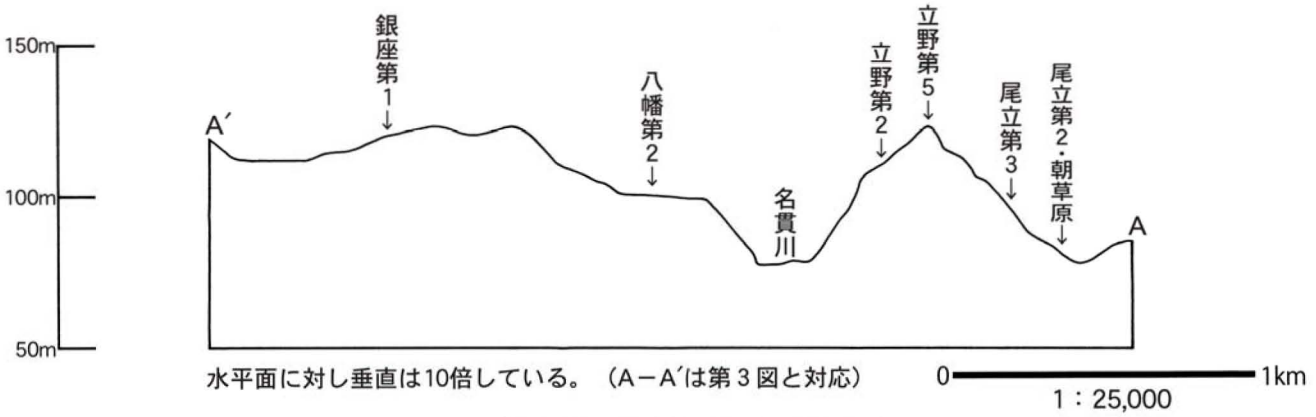
0 ―――― 5km
1：100,000

第２図　林用軌道路線図（大日本帝国陸地測量部　昭和15年発行を加工）

写真１　尾立第２遺跡とトロッコ道
（白線範囲がトロッコ軌道）

写真２　旧祠堂跡

第３図　周辺遺跡分布図



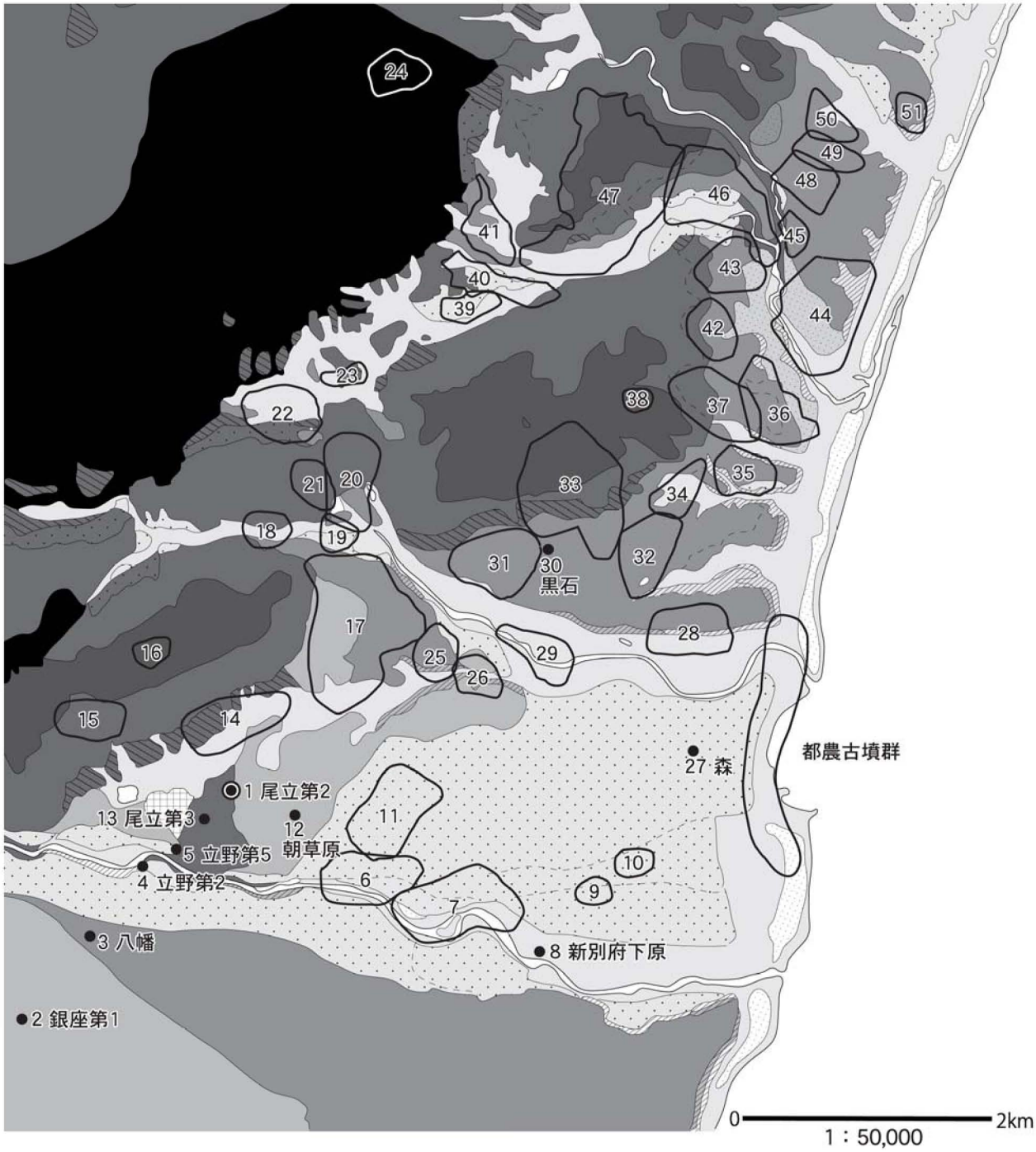
水平面に対し垂直は10倍している。（A－A′は第３図と対応）

第４図　周辺遺跡地形断面図

第１表　周辺遺跡地名表

遺跡No.	分布調査番号 報告書刊行は※	遺跡名	所在地	時期	文献
1	※	尾立第2遺跡	大字川北字湯牟田・俵石・	旧石器・縄文（早期）・弥生・近世	－
2	※	銀座第1遺跡	大字川南字前田・沓袋畑	旧石器・縄文（早期）・弥生・中世～近世	1
3	※	八幡第2遺跡	大字川南字八幡山	縄文（草創期）・弥生	2
4	※	立野第2遺跡	大字川北字竜ヶ平	旧石器・縄文（早期）	3
5	※	立野第5遺跡	大字川北字竜ヶ平	旧石器・縄文（草創期・早期）	3
6	1006	下原遺跡	大字川北字下原	縄文	9
7	※	新別府川原遺跡	大字川北	弥生・古墳	4
8	※	新別府下原遺跡	大字川北	縄文（後）・弥生・古墳	5
9	1003	新別府遺跡	大字川北字新別府		9
10	1004	新別府肥遺跡	大字川北字新別府肥		9
11	1015	榎木土手遺跡	大字川北字榎木土手	弥生・古墳	9
12	※	朝草原遺跡	大字川北字朝草原	旧石器・縄文（草創期・早期）	6
13	※	尾立第3遺跡	大字川北字尾立	旧石器・縄文（早期）	6
14	1012	俵石第2遺跡	大字川北字俵石	弥生・古墳	9
15	1017	苽生尾立第1遺跡	大字川北字苽生尾立		9
16	1018	苽生尾立遺跡	大字川北字苽生尾立		9
17	1019・1023・ 1024・1025	馬場口遺跡	大字川北字馬場口・鹿牟田・木戸平・ 上苽生・後牟田・湯牟田・中河原	縄文・弥生・古墳	9
18	2018	井手ヶ平遺跡	大字川北字井手ヶ平		9
19	2005	川神田遺跡	大字川北字川神田	縄文・弥生	9
20	2007	西ノ郡第2遺跡	大字川北字西ノ郡	古墳	9
21	2006	西ノ郡第1遺跡	大字川北字西ノ郡	縄文・弥生	9
22	2008	平山遺跡	大字川北字平山・大丸	縄文・弥生・古墳	9
23	－	下原遺跡	大字川北字下原・寺下・宮原	中世	10
24	3011	舟川尾立遺跡	大字川北字舟川尾立	弥生	9
25	1022	鹿牟田遺跡	大字川北字鹿牟田		9
26	1021	鍛冶屋敷遺跡	大字川北字鍛冶屋敷	弥生・古墳・中世（城跡）	9
27	※	森遺跡	大字川北字森		7
28	2001	中原遺跡	大字川北字中原		9
29	2002	師匠田遺跡	大字川北字師匠田	弥生	9
30	※	黒石遺跡	大字川北字黒石		8
31	2003	京塚遺跡	大字川北字京塚藤見尾ノ下	旧石器・縄文・弥生・古墳	9
32	※	境ヶ谷第1遺跡	大字川北字境ヶ谷	弥生・古墳	9
33	2009	白水遺跡	大字川北字白水・尾ノ下	弥生・古墳	9
34	2011	境ヶ谷第2遺跡	大字川北字境ヶ谷・白石	弥生・古墳	9
35	2012	久次牟田遺跡	大字川北字久次牟田	弥生・古墳	9
36	2019	上黒萩遺跡	大字川北字上黒萩	縄文・弥生・古墳	9
37	2013	白石第1遺跡	大字川北字白石	弥生・古墳	9
38	2014	白石第2遺跡	大字川北字白石		9
39	3002	内野遺跡	大字川北字内野々		9
40	3001	内野々遺跡	大字川北字内野・下原・内野後原・内野々	弥生	9
41	3008	舟川中原遺跡	大字川北字舟川中原	縄文	9
42	2015	旧牧跡第1遺跡	大字川北字旧牧跡	弥生	9
43	2016	旧牧跡第2遺跡	大字川北字旧牧跡・下中川原	古墳	9
44	3009	心見遺跡	大字川北字心見・上ノ原・堀ノ内		9
45	3005	心見往還上遺跡	大字川北字心身往還上		9
46	3004	又猪野原遺跡	大字川北字又猪野原・又猪野		12
47	3010	長野遺跡	大字川北字境谷・長野		9
48	3006	山末大原第1遺跡	大字川北字末大原	弥生・古墳	9
49	3007	山末大原第2遺跡	大字川北字末大原	弥生・古墳	9
50	3008	宮川遺跡	大字川北字宮川・寺迫	弥生・古墳	9
51	3015	寺迫下原遺跡	大字川北字寺迫下原	縄文・弥生・古墳	9

※遺跡No.は第3図・第5図の番号と一致。
文献No.はP.4の参考文献と一致。



花崗斑岩【新第三紀中新世】

Ⅷ層堆積物（尾鈴山酸性岩上の低起伏面）【洪積世】

Ⅶ面堆積物【洪積世】

溶結凝灰岩'（尾鈴山酸性岩類）【新第三紀中新世】

沖積錐・麓屑面および土砂流の堆積物【洪積世】

Ⅵ面堆積物【洪積世】

氾濫源及び谷底堆積物または沖積層【沖積世】

中位の河岸段丘～開析扇状地堆積物【洪積世】

底位河岸段丘堆積物【沖積世～洪積世】

浜堤堆積物【沖積世】

第５図　周辺遺跡地形分類図（表層地質図　国土調査昭和60年を加工）

第Ⅲ章　調査の経過と方針

第１節　確認調査の概要

確認調査は、朝倉遺跡と尾立第２遺跡、そして平成17年度に確認調査が行われていない範囲を、朝倉遺跡（二次確認調査）とし、以下の期間実施した。

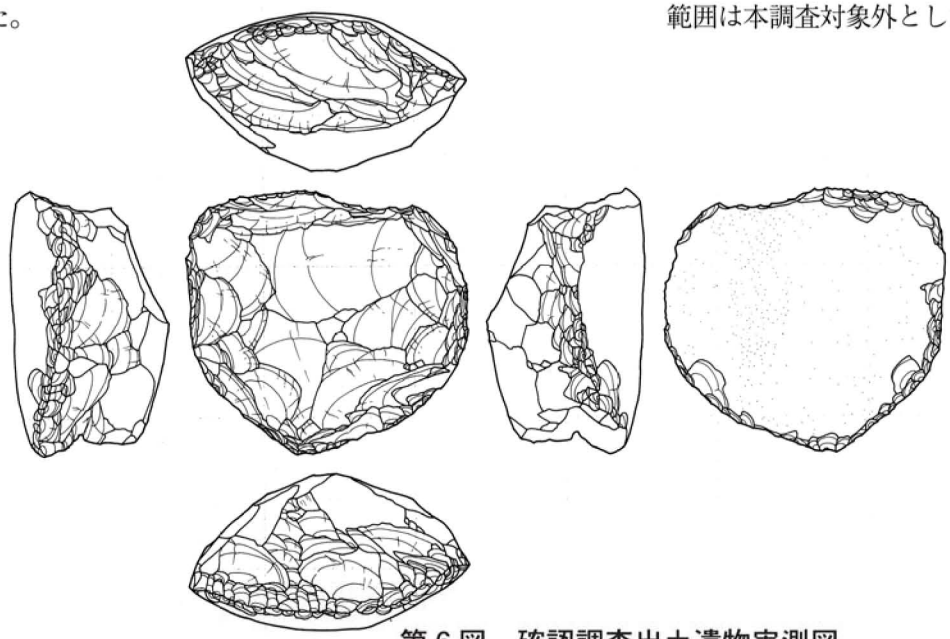
朝倉遺跡　　：平成17年２／14～３／18
尾立第２遺跡　　：平成17年２／14～３／10
朝倉遺跡（二次確認調査）：平成17年６／13～11／４

確認調査の結果を受け、朝倉遺跡、尾立第２遺跡を併せ朝倉遺跡とし平成18年度に本調査を行った。なお、例言にふれたとおり、確認調査・本調査時に朝倉遺跡、尾立第２遺跡としていた両遺跡を尾立第２遺跡とし本報告を行っている。以下に各調査の概要を述べる。

朝倉遺跡では、7,200㎡に対し、調査区に３箇所の深掘りトレンチと14箇所のトレンチ（800㎡）を設定し、人力による掘削が行われた。その結果、調査区北東ではK-Ahの良好な堆積が確認され、K-Ah下位より縄文時代早期の押型文土器が確認された。また、調査区西では表土下からKr-Kbを含む層が確認され、調査区は西から東に向かって傾斜していることが想定された。トレンチ調査により遺跡の全範囲に遺構・遺物が分布すると考えられた為、調査区西側斜面部分の表土下が礫層となる範囲（2,200㎡）を調査除外とし5,000㎡を調査対象とした。

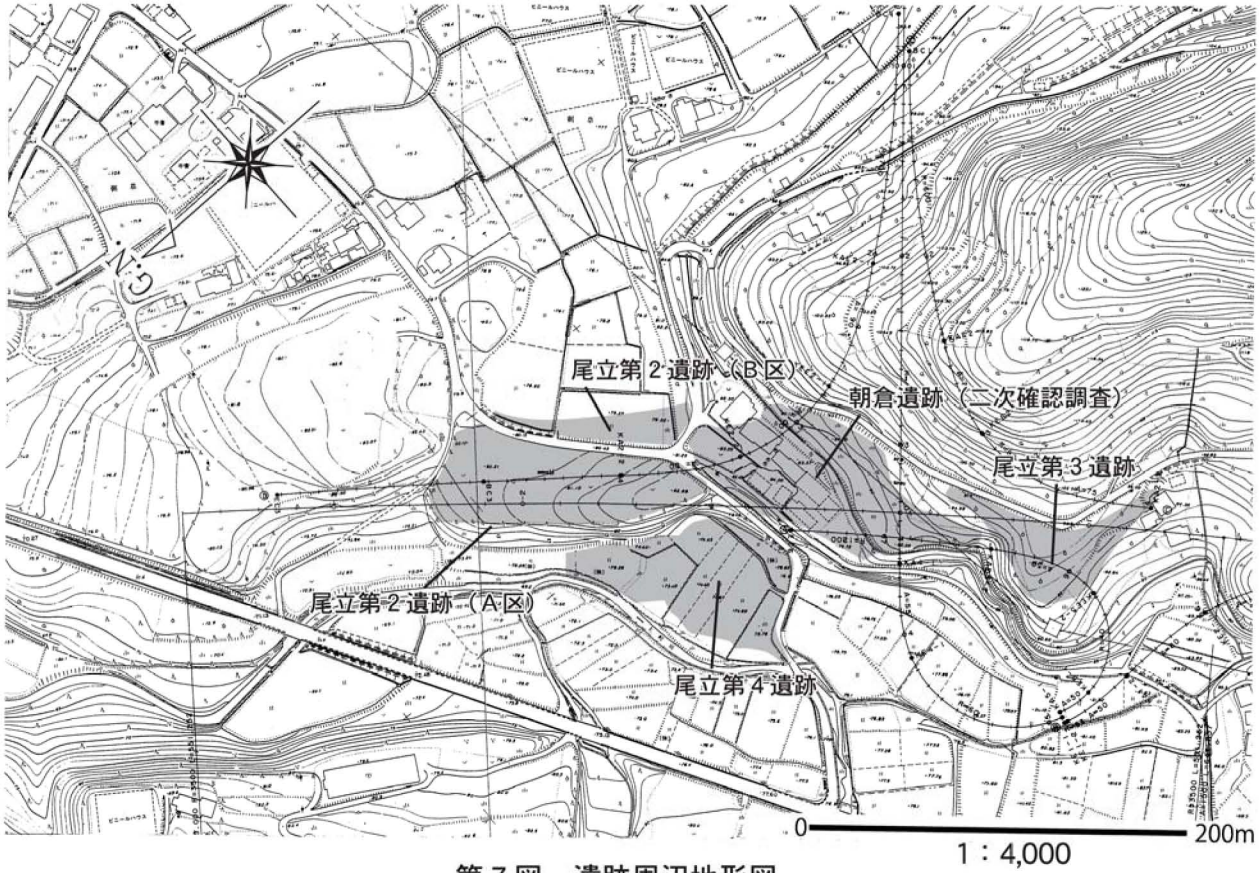
尾立第２遺跡は、朝倉遺跡から町道を挟む南側に位置し、比高差約２ｍの一段下がった耕作地に立地する。調査区中央～北西にK-Ahの良好な堆積が確認されている。朝倉遺跡同様、人力によるトレンチ掘削が行われ、ナイフ形石器や敲石等が出土した。このため1,000㎡の調査区全体を調査対象範囲としたが、遺跡は町道を挟み朝倉遺跡と隣接することから、作業の効率を考え、朝倉遺跡の本調査に組み込み、朝倉遺跡（5,000㎡）と尾立第２遺跡（1,000㎡）の合計6,000㎡を本調査対象面積とした。

また、朝倉遺跡の本調査と並行して実施された朝倉遺跡（二次確認調査）では対象面積12,200㎡に対し、15本のトレンチ（1,089㎡）を設定し、重機による表土除去後、人力による掘削を行った。調査区東に僅かに残る平坦面からはK-Ahの堆積が確認されたが、平坦面から西は削平の為、K-Ahの堆積が確認できず、ＡＴの堆積も傾斜に沿って低地に流れていることが確認された。K-Ahの堆積が確認される箇所も下層は本遺跡のＸ層と考えられる灰褐色土層が確認され、さらに下層からは１ｍ大の巨礫がまばらにみられた。トレンチ内から遺構・遺物は確認されず、礫器（第６図）を１点採集したのみであったため、朝倉遺跡（二次確認調査）範囲は本調査対象外とした。

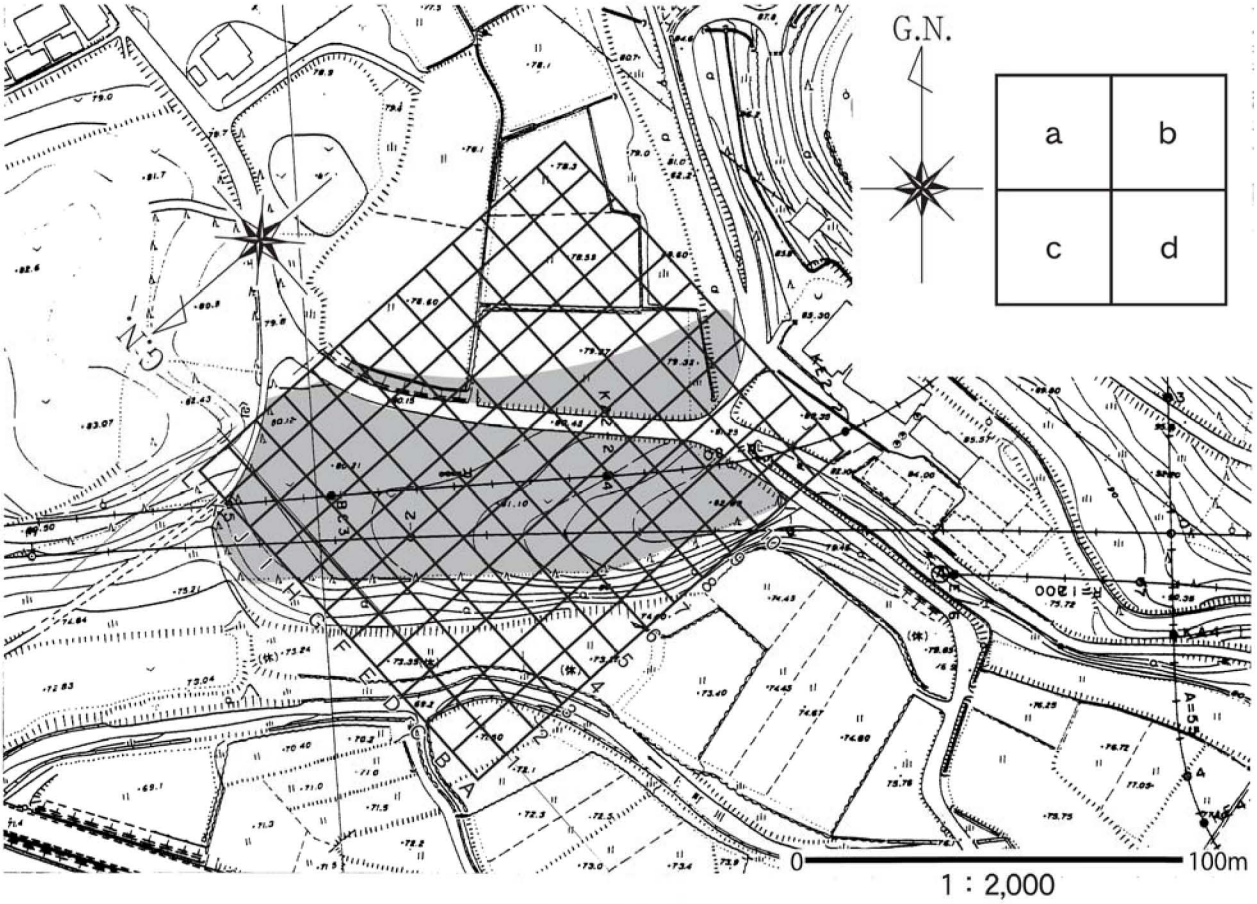


0 ―― 5cm
1：2

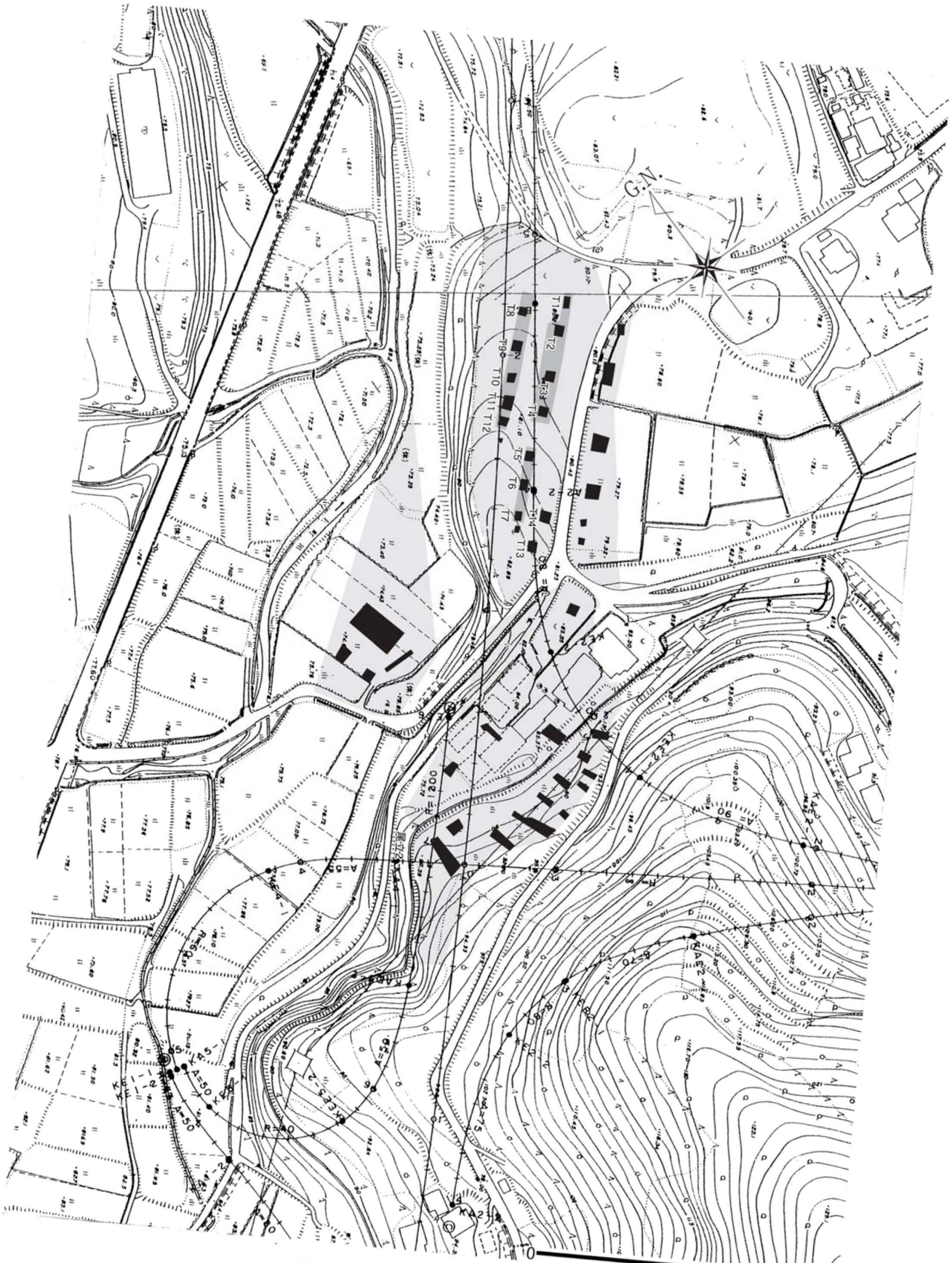
第６図　確認調査出土遺物実測図



第７図　遺跡周辺地形図



第８図　グリッド配置図



第９図　確認トレンチ配置図

第２節　発掘調査の経過

本調査は平成17年６月９日から平成18年２月10日まで実施した。調査にあたっては、確認調査時の朝倉遺跡をＡ区、尾立第２遺跡をＢ区とした。また、排土置き場の確保等の問題からＡ区を南北に分け、調査区の南側をＡ１区、Ａ２区に便宜上分け調査を実施した。調査はＡ１区→Ｂ区→Ａ２区の順で終了していった。

調査区は国土座標に準じた10m×10mグリッドを、西から東にＡ～Ｋ、北から南に０～10とし、このグリッドを５ｍ×５ｍで四分したものを小グリッドと設定した。各グリッドについては、B9Gr或いは、B9aGr等と呼ぶこととした（第８図）。

調査は、層の残存状況を確認しながら、まず表土を重機で除去した。確認調査で把握していたとおりＡ１区は表土下よりⅥ層の堆積が確認され、同一層で検出された集石遺構も下部のみ検出されることが多かった。また土層堆積の良好なＡ２区北東では、残存するK-Ah（Ⅲ層）上面を精査したが遺構・遺物は確認できなかった。さらに重機を使用してⅢ層を除去した後、手鍬による人力掘削に移った。包含層内より出土した遺物はトータルステーションで出土位置を記録し、取り上げを行った。また包含層内より出土した礫も遺物と同様トータルステーションによる取り上げを行った。

調査の結果、Ⅳ層～Ｘ層より遺構・遺物が確認され、後期旧石器時代から縄文時代早期、弥生時代、近世の遺構・遺物が確認された。検出された遺構は原則として１／10の縮尺で図化を行った。

【調査日誌抄】

平成17年

６．９（水）現場事務所設置・駐車場の整地。
6.13（月）作業員雇用開始（二次確認調査開始）。
6.20（月）Ｂ区作業員掘削開始。
７．４（月）Ｂ区Ⅴ層より礫群検出。石鏃，剥片・砕片等がまとまって出土し始める。
7.12（火）Ａ１区作業員掘削開始。
7.27（水）Ａ１区溝状遺構（SE1）を検出。
８．４（木）Ｂ区空中写真撮影終了。
8.26（金）Ａ１区南西側より石組遺構（SX1）を検出。
９．７（水）台風14号上陸。調査Ｂ区完全に水没。排水作業に日数を要す。
9.12（月）B9GrⅨ層より黒曜石製剥片の集中を検出。ネジリ鎌、竹串、ハケにより慎重に掘削を行う。
9.27（火）Ａ１区Ｘ層より局部磨製石斧出土。
10.12（水）調査区反転終了。A2区人力掘削開始。
10.14（金）泉　拓良氏・本田道輝氏・清野孝之氏・柳沢一男氏来訪。遺構・出土遺物について調査指導が行われる。
10.17（月）Ａ１区調査終了。
（Ａ１区遺物取り上げ点数2087点）
10.25（火）Ｂ区Ⅸ層湧水の為，トレンチによる調査。遺物出土なく、Ｂ区調査終了。
（Ｂ区遺物取り上げ点数501点）
11．４（金）貝殻刺突が施された尖底の縄文土器出土。
11.10（木）小畑弘己氏・田崎博之氏・広瀬和雄氏来訪。遺構・出土遺物について調査指導が行われる。
11.15（火）不明遺構（SZ1）を検出。壺・甕が出土。その成因過程に悩む。
12．１（木）Ａ２区空中写真撮影終了。
12.20（火）Ⅵ層面より黒いシミを検出。ＡＴを掘り込む土坑で尾根の谷際に集中する。
12.22（木）朝倉遺跡二次確認調査終了。

平成18年

1.18（水）㈱古環境研究所の早田勉氏来訪。K3Gr壁面の土層採取が行われる。
1.27（金）I3Grにトレンチ設定。Ｘ層下位掘削を進めるが遺物の出土は確認されず。
1.30（月）北海道埋蔵文化財センター鈴木宏行氏来訪。
2.10（金）Ａ２区調査終了。調査区埋め戻し。
（Ａ２区遺物取り上げ点数3265点）

第３節　整理作業の経過

整理作業は平成17年２月から埋蔵文化財センター内で開始し、水洗、注記、計測、接合、実測、製図を経て、平成19年10月に終了した。

石器は接合作業を行いながら、見た目、手触りを重視して、石材を分類した。また、黒曜石資料に関しては、肉眼、顕微鏡観察で分類を行うとともに、(株)古環境研究所に蛍光Ｘ線分析による黒曜石産地推定を委託した。

石器の実測は石鏃等の剥離が細かな石器を業者に委託し、残りのナイフ形石器等の実測は整理作業員と岸田とで行った（写真３）。

また、SX1、SZ1の床面の土を、埋蔵文化財センターに持ち帰り水洗選別を実施した。

現場段階では、後述するⅨ層より検出されたブロックＡの範囲の土を５㎜メッシュの篩を用い選別を行い、黒曜石製の砕片が多数確認された。同様にSC1～26の床面付近の土を採取し５㎜メッシュによる篩選別を試みたが、期待した成果は得られなかった。

礫の整理は水洗、注記、計測、接合の各作業を実施した（写真４）。計測は礫の法量、重量、石材の他に、礫に残された付着物、赤化、破損状況などを記録した。これらの礫の計測等のデータ採取作業は周辺に立地する尾立第３遺跡、朝草原遺跡と立野第５遺跡、立野第２遺跡の各調査者、井上美奈子、日髙優子（平成17・18年度宮崎県埋蔵文化財センター所属）と検討を加え、共通のデータ採取をする事とした。

第４節　普及活動

平成18年８月25日に宮崎県立図書館を会場に「ひむかの歴史2006」が行われ、尾立第２遺跡を始めとする、平成17年度に埋蔵文化財センターで調査された発掘調査成果が報告された。【71名参加】

また、平成19年３月４日には都農町立図書館を会場に都農町遺跡報告会を実施し、尾立第２遺跡を始めとして、町内外に発掘調査の成果を報告した（写真５）。【72名参加】

写真３　整理作業：石器実測風景

写真４　整理作業：礫接合風景

写真５　都農町遺跡報告会　展示風景

第Ⅳ章　調査の記録

第１節　基本層序

基本層序を設定するにあたって、K3Grの南西壁を土層観察用の壁面として利用した（第10図）。土層は色調、土質によりⅠ～Ⅺ層までの層に分層した。各層の詳細は次項に示している。

本遺跡の土層の堆積は一定ではなく、旧地形は西から東に向かって傾斜し、北東側は南西側に比べ層が厚く堆積していた。地形の変化を南北でみると、Ｅライン（Ｙ＝49830）付近より西側は削平によってⅤ層以上が消失している。

また、東西では、標高の低いH4Gr・I4Gr周辺でⅢ層からⅤ層の堆積が確認され、北側・西側に進むにつれその堆積は徐々に薄くなっている。調査区の旧地形は南西から北に延びる尾根となり、Ｂ区が所在する南東側は谷となる。さらに、調査区で最も標高が高い南西側では耕作土を除去するとすぐに礫層が検出された（第14図）。

本遺跡の旧地形は近年まで蜜柑畑として利用され、約１ｍ×１ｍの正方形の蜜柑穴が調査区の全体に等間隔に並んでいた。これらの攪乱は堆積の薄い調査区南西では地山（Ⅵ層）を切るように蜜柑穴が掘り込まれ、逆に堆積の厚い調査区北東では耕作土（Ⅰ層）よりも蜜柑穴の深度が浅いため、Ⅲ層以下は影響を受けていない。耕作土（Ⅰ層）下がすぐに礫層となる範囲では、掘削時に礫層を掘り込むことが困難であったためか、蜜柑穴は確認されなかった。

また、本遺跡では、土層中にいくつかの火山灰が確認された（第Ⅴ章第１節参照）。K-Ahは調査区南東に、ＡＴは調査区全面に純層で堆積していた。これらの火山灰は色調・土質に特徴があるため、ローム層との比較は容易であったのに対し、Ⅵb層からⅦa層より検出されたKr-Kbは橙色の粒子が上下に散在して確認される状況であり、単一層としての判断は行えなかった。同様に、Ⅸ層で確認された姶良大塚テフラ・姶良深港テフラに至っては調査中には確認することができなかったが火山灰分析の結果、両テフラの存在が判明した。

なお、東九州自動車道（都農～西都間）の調査では、宮崎平野部で認められるテフラやローム層、黒色帯に共通の略称を用いている。第10図に示したMB0やML1等がこの略称にあたる。ただし本遺跡が所在する都農町は宮崎平野部の北端にあたり、共通認識として捉えられてきた宮崎平野部の基本層序にそぐわないことも確認されてきている（宮崎県埋蔵文化財センター2006）。

宮崎県埋蔵文化財センター『東九州自動車道（都農～西都間）関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅵ』2006

Ⅰ	耕作土	
Ⅱ	黒色土〔クロボク〕	
Ⅲa･b	鬼界アカホヤ火山灰〔K−Ah〕	
Ⅳ	黒色土〔MB0〕	※
Ⅴ	黒褐色土〔ML1上部〕	※
Ⅵa	黒褐色土〔ML1下部〕	※
Ⅵb	黒褐色土〔ML1下部〕	
	小林軽石〔Kr−Kb〕	
Ⅶa	黒褐色土〔MB1上部〕	
Ⅶb	黒褐色土〔MB1下部〕	
Ⅶc	にぶい黄褐色土〔ML2〕	
Ⅷa･Ⅷb	姶良Tn火山灰〔AT〕	
Ⅸa	黒色土〔MB2〕	※
	姶良深港〔A−Fm〕・姶良大塚〔A−Ot〕	
Ⅸb	黒色土〔MB3〕	
Ⅹ	灰褐色土〔ML3〕	
Ⅺ	明黄褐色土	
Ⅻ	にぶい黄橙色〔礫層〕	

※主要遺物包含層

第10図　尾立第２遺跡基本土層図

基本層序

Ⅰ層　：耕作土

Ⅱ層　：黒色土（Hue7.5YR1.7／1）
層厚およそ２～４㎝を測る。しまりが弱く、粘性が弱い。所謂クロボクと考えられる。

Ⅲa層　：橙色土（Hue7.5YR6／8）
鬼界アカホヤ火山灰。層厚22㎝を測る。

Ⅲb層　：明褐色土（Hue7.5YR5／8）
鬼界アカホヤ火山灰。Ⅲaに比べ１㎜大のオレンジ粒子が多くなる。

Ⅳ層　：黒色土（Hue10YR2／1）
層厚は最大で６㎝を測る。しまりは弱く、粘性も弱い。MB0に相当する。
遺物包含層

Ⅴ層　：黒褐色土（Hue10YR3／1）
層厚は６㎝を測る。しまりはやや強く、粘性がある。ML1上部に相当。
遺物包含層

Ⅵa層　：黒褐色土（Hue10YR3／2）
層厚は最大で20㎝を測る。しまりはやや弱く、粘性がある。オレンジ粒子をわずかに含み、ブロック状で入る箇所もある。
遺構検出層・遺物包含層

Ⅵb層　：黒褐色土（Hue10YR3／2）
層厚は最大で21㎝を測る。Ⅵa層に比べ粘性が弱くなる。オレンジ粒子わずかに含む（粒子量Ⅵa＜Ⅵb）。ML1下部に相当する。

Ⅶa層　：黒褐色土（Hue7.5YR3／1）
層厚16㎝を測る。しまりはやや弱く、粘性がある。また、乾燥すると明瞭なクラックが発達する。MB1上部に相当する。

Ⅶb層　：黒褐色土（Hue10YR3／1）
層厚は15㎝を測る。粘性があり、固くしまっている。１㎜以下の白色粒子をわずかに含む。MB1下部に相当。遺物包含層

Ⅶc層　：にぶい黄褐色土（Hue10YR5／4）
層厚は７㎝を測る。しまりはやや強く、１㎜大の黄色粒子や白色粒子が多くなる。ＡＴ直上（ML2）に相当する。
遺構検出層

Ⅷa層　：明黄褐色土（Hue10YR6／8）
層厚は最大で12㎝を測る。１㎜大のオレンジ粒子を多く含む。粗粒でざらざらしていて粘性が非常に弱い。姶良Tn火山灰。

Ⅷb層　：黄橙色（Hue10YR7／8）
Ⅷaに比べ粒子が細かい。姶良Tn火山灰。

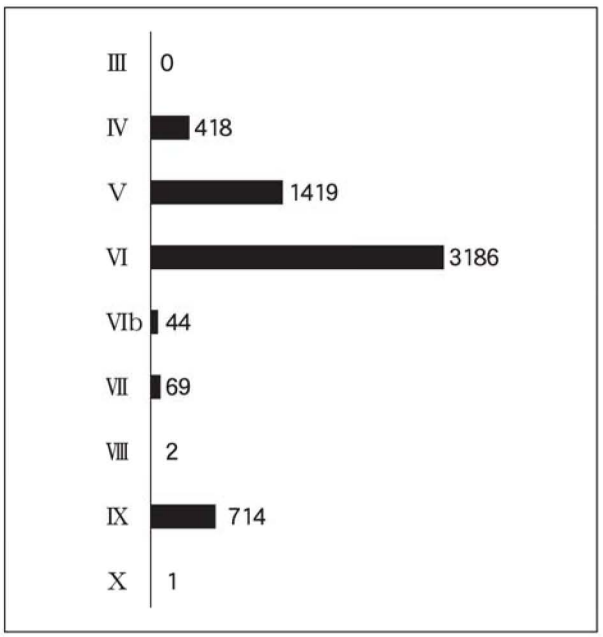
Ⅸa層　：黒色土（Hue10YR2／1）
層厚は最大で32㎝を測り、しまりが強い。１㎜以下の白色粒子を多く含み、クラックが発達する。MB2に相当する。
遺構検出層・遺物包含層

Ⅸb層　：黒褐色土（Hue10YR2／2）
層厚は最大で17㎝を測る。Ⅸa層に比べしまりが弱く、粘性が強くなる。MB3に相当する。

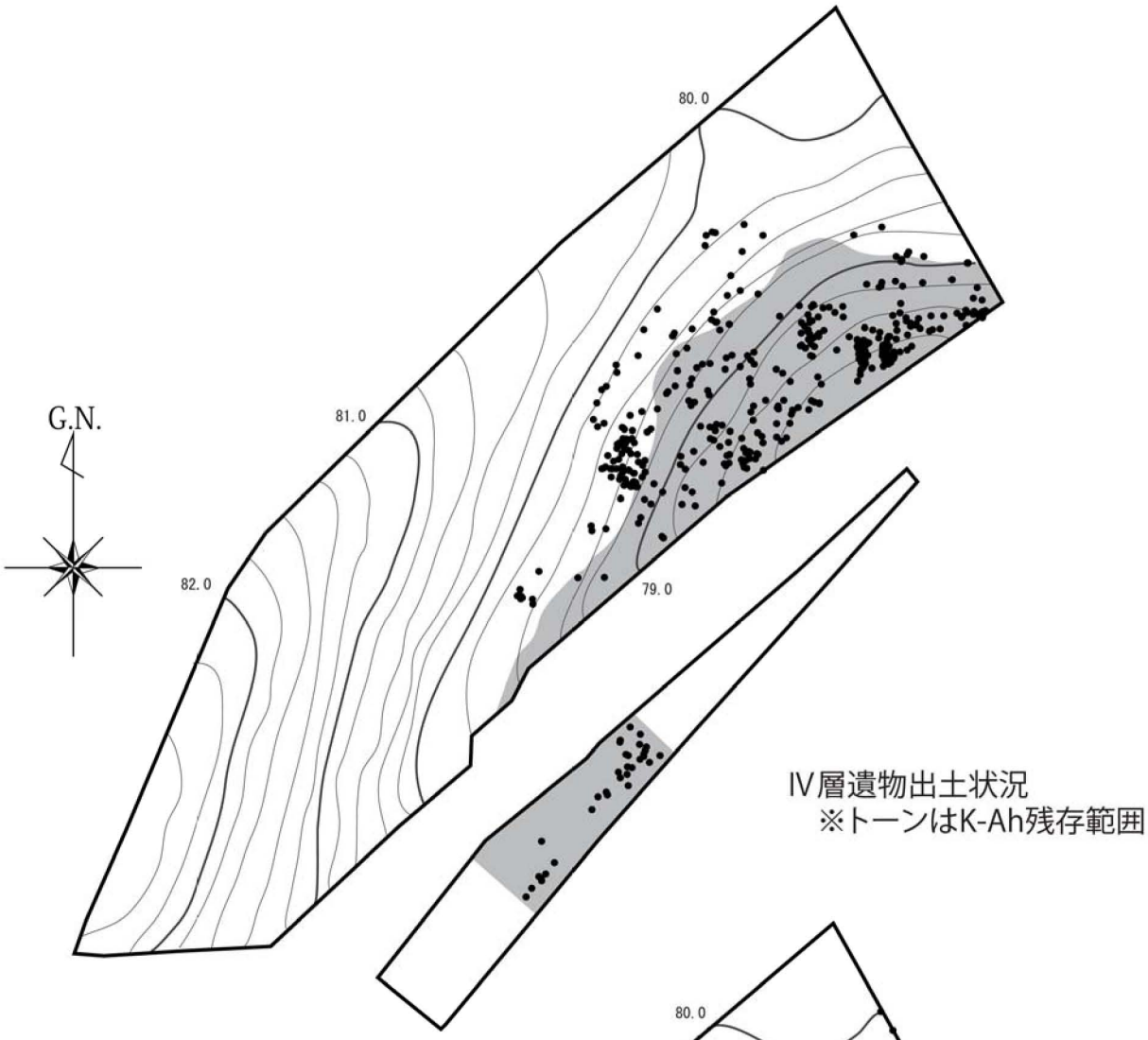
Ⅹ層　：灰褐色土（Hue5YR4／2）
層厚は６㎝。しまりは弱く、粘性が強い。ML3に相当する。遺物包含層

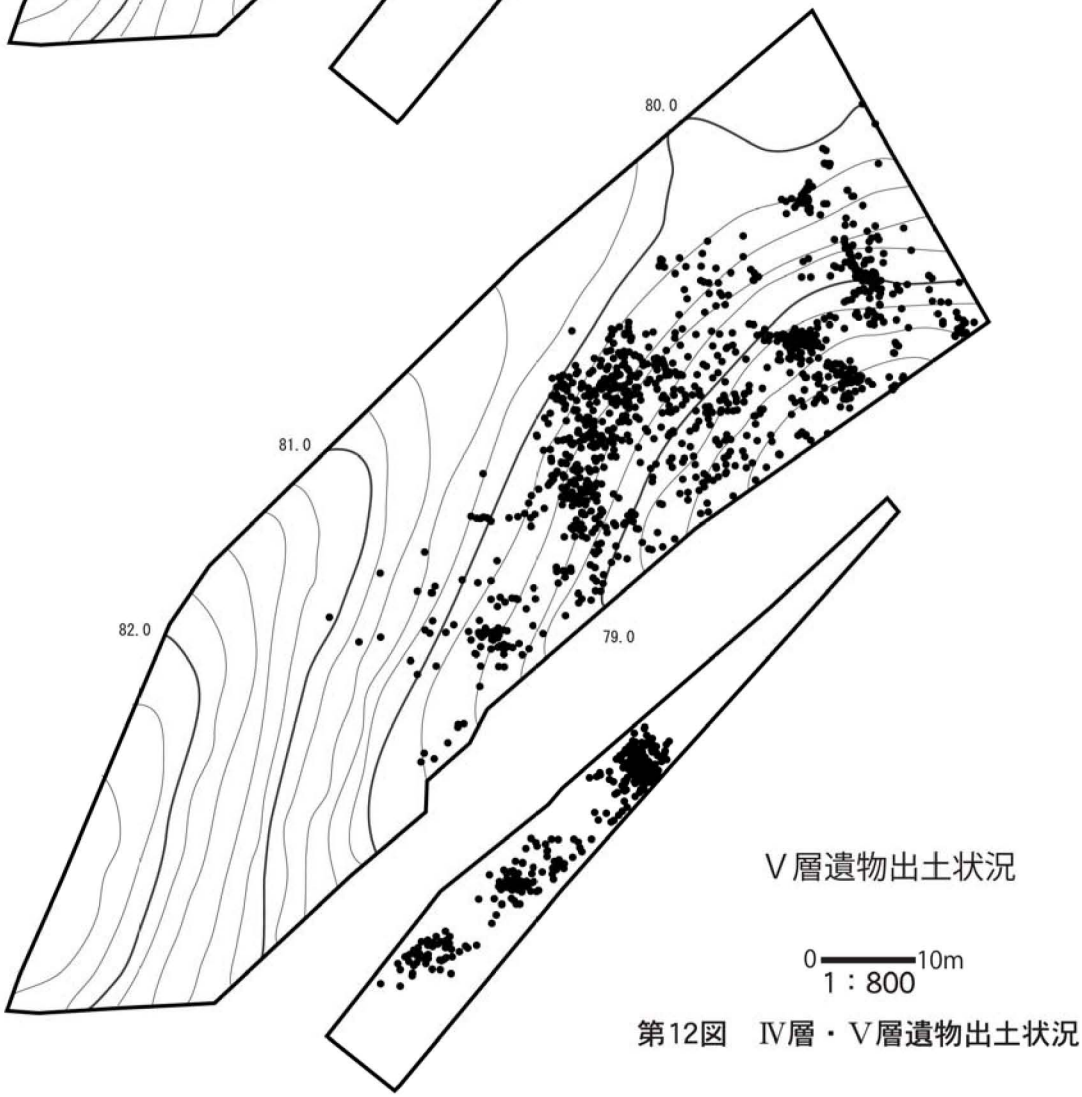
XI層　：明黄褐色土（Hue10YR6／6）
巨礫を含み、しまり、粘性ともに強い。

XII層　：にぶい黄橙色土（Hue10YR6／4）
しまり、粘性ともに強い。礫層。

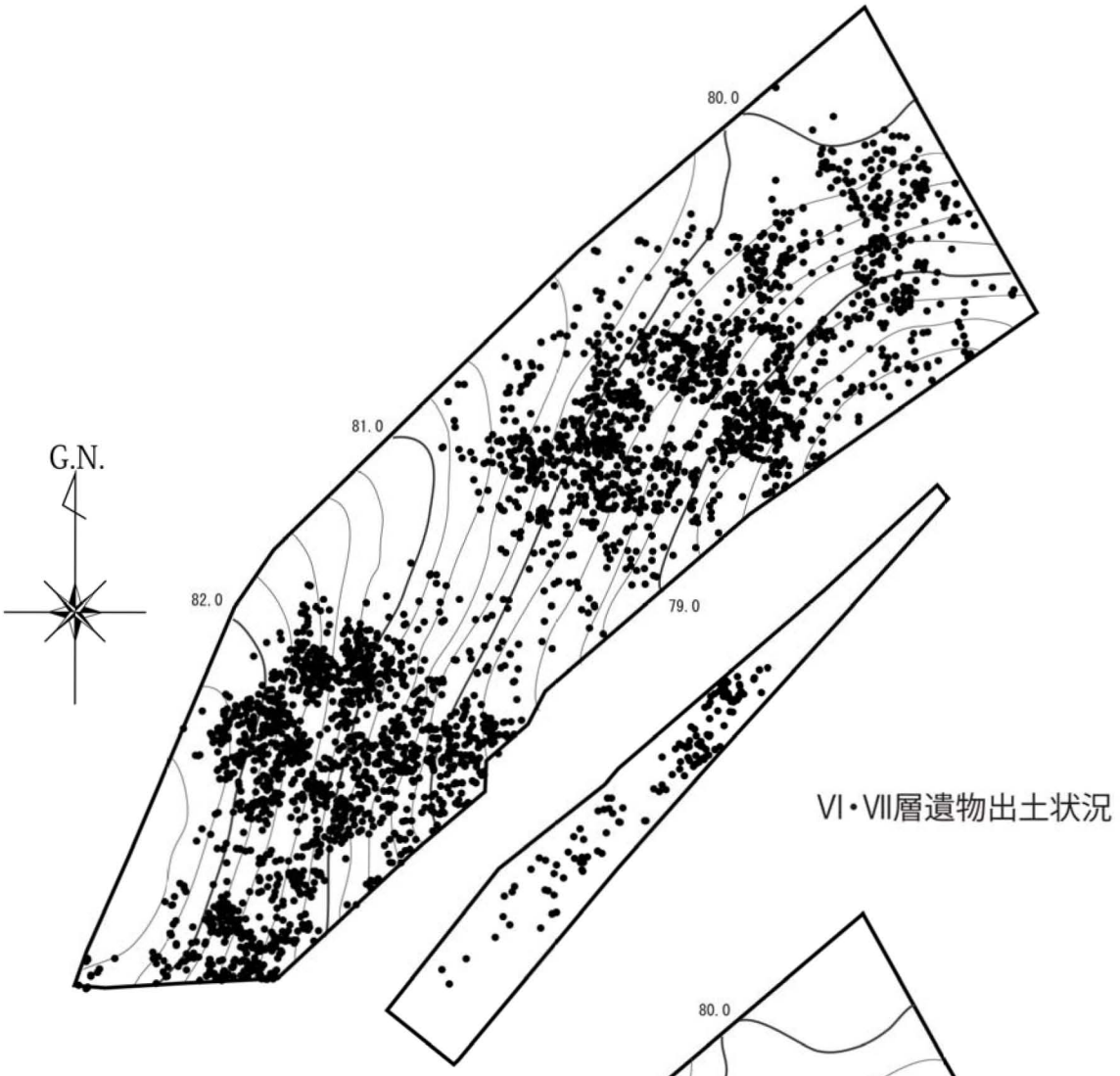


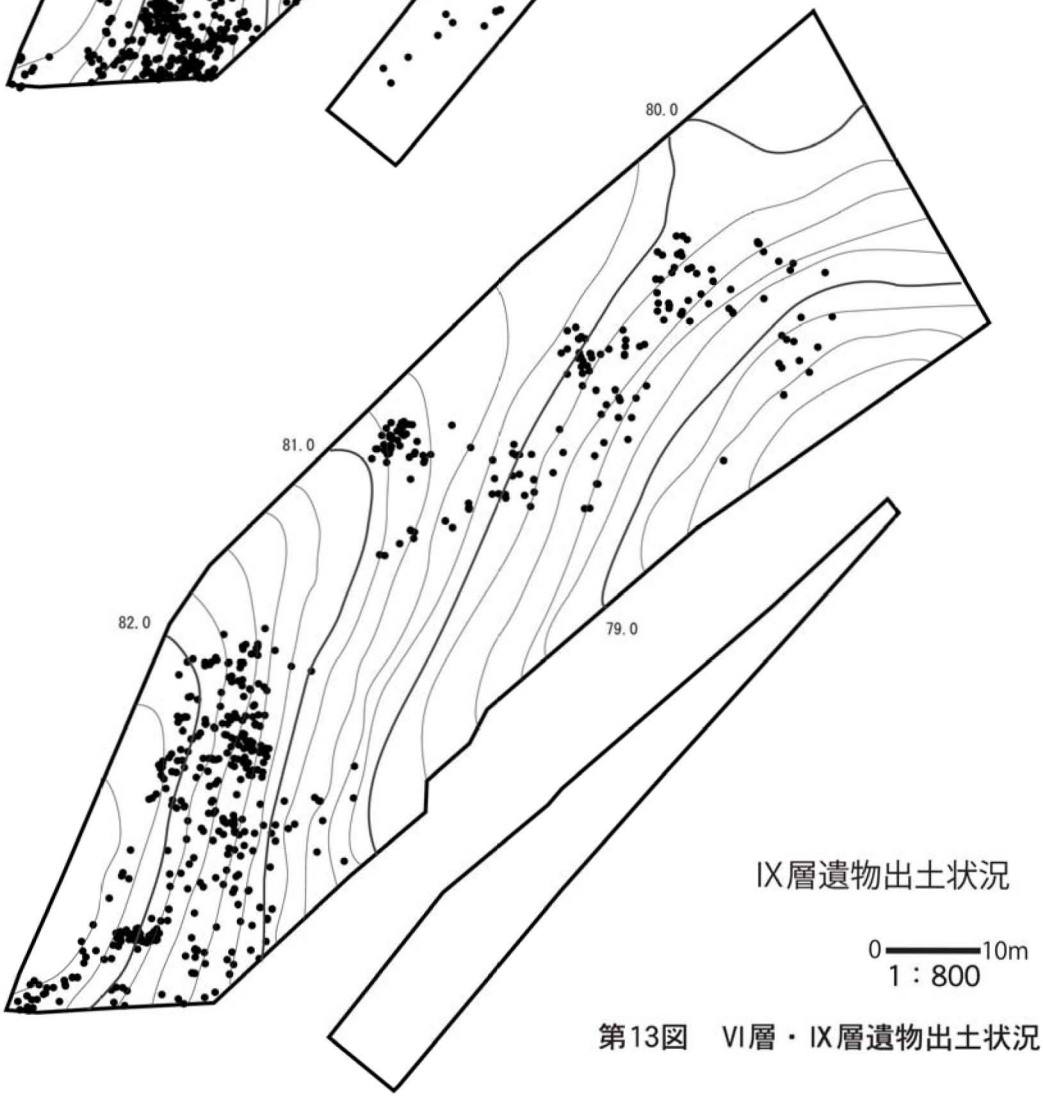
第11図　層位別遺物出土状況



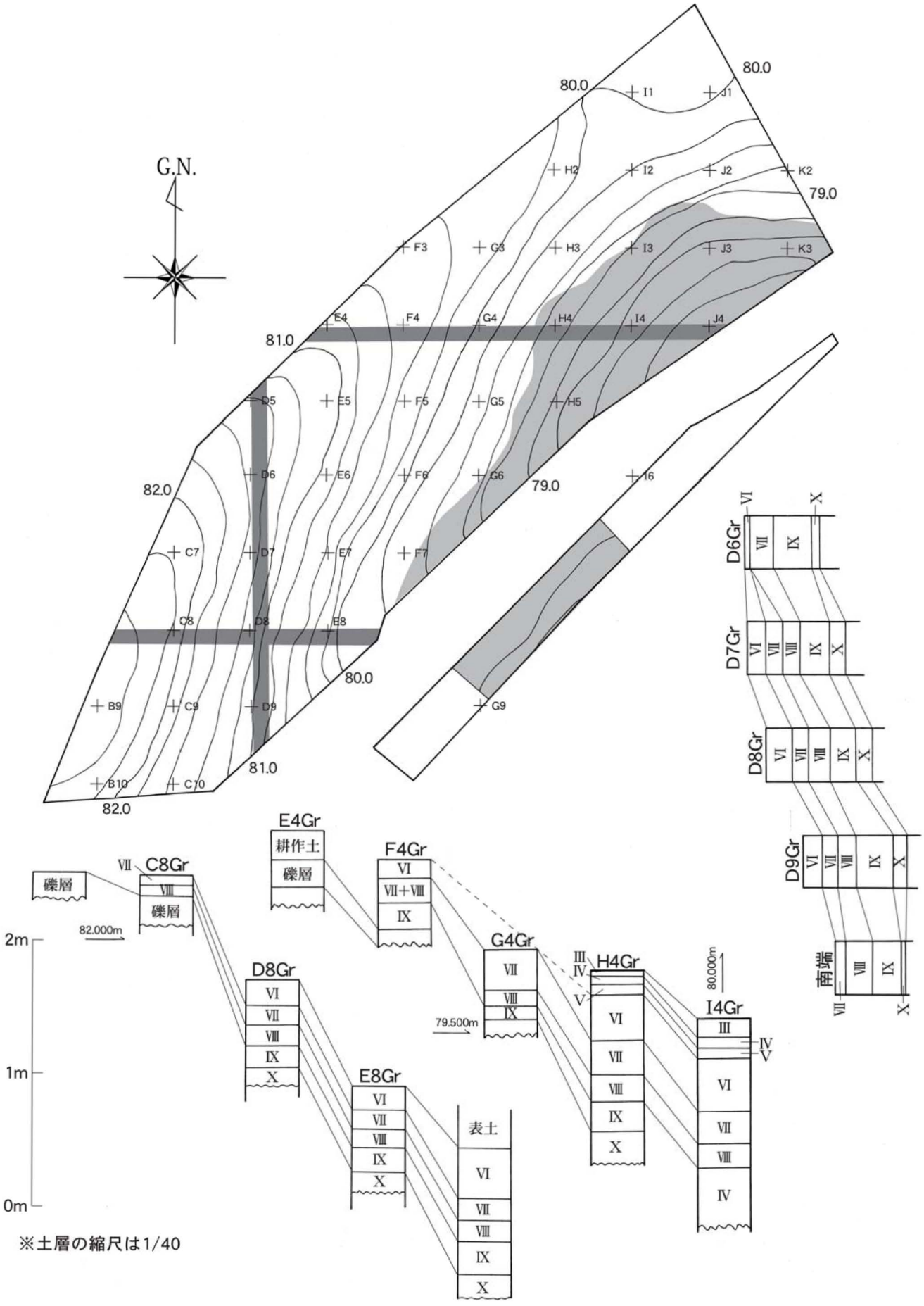


第12図　Ⅳ層・Ⅴ層遺物出土状況





第13図　Ⅵ層・Ⅸ層遺物出土状況


G.N.
80.0
81.0
82.0
79.0
B9
C9
D9
B10
C10
C7
D7
E7
F7
C8
D8
E8
D5
E5
F5
G5
H5
D6
E6
F6
G6
I6
E4
F4
G4
H4
I4
J4
F3
G3
H3
I3
J3
K3
H2
I2
J2
K2
I1
J1
G9
D6Gr
D7Gr
D8Gr
D9Gr
南端
C8Gr
E4Gr
F4Gr
G4Gr
H4Gr
I4Gr
D8Gr
E8Gr
礫層
耕作土
表土
82.000m
79.500m
80.000m
2m
1m
0m
※土層の縮尺は1/40

第14図　土層堆積状況

第２節　遺物包含層の認識

本遺跡の調査中および調査直後の層位と遺構、遺物の認識は以下のとおりであった。

Ⅳ層　：縄文土器、石鏃の出土、不定形剥片の出土。

Ⅴ層　：縄文土器、石鏃、打製石斧、細石刃、細石刃核、縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器を有する石器群。遺構検出面。

Ⅵa層　：細石刃、細石刃核、縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器、角錐状石器を有する石器群。本遺跡で最大量の遺物が出土。遺構検出面（遺構数Ⅴ＜Ⅵa）。

Ⅵb層　：層位でのⅥa層との分層は困難。Ⅵaに比べ大幅に剥片等遺物数が減少。下部になる程遺物は少なくなる。

Ⅶa～Ⅶb層　：遺物の出土はほとんど確認されない。

Ⅶc層　：切り出し状のナイフ形石器がＢ区で１点出土。遺物はほとんど確認されない。遺構検出面。

Ⅸa層　：縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器が出土。遺物は調査区全体に散在する。また、B9Grより黒曜石が集中する範囲を確認。礫群を１基検出。

Ⅸb～Ⅹ層　：D8Gr・I3Gr周辺のみ調査。局部磨製石斧、敲石が出土。

今回、報告書作成において、出土遺物の層位別遺物分布状況および石材別分布図を基に検討した結果、調査時の認識とともに、以下の事柄を考慮しつつ記述を進めたことを断っておく。

① Kr-Kbの堆積は火山灰分析の結果、最厚37cmの堆積を示すが、層として確認できなかった。そのため火山灰を鍵とした遺物包含層の判断上下に限られ、層の細分は土質によるものである。こうした状況から遺物の取り上げは色調や土質が似るⅥa層・Ⅵb層を含めⅥ層と、Ⅸa層・Ⅸb層を含めⅨ層として行った。

② 調査区北東は旧地形が谷となり、Ⅳ・Ⅴ層の堆積が確認される。しかし、調査区南西は、後世の耕作による削平が考えられ、遺物に二次的な移動が生じている可能性がある。また、層の堆積は調査区内で一定でなく、急な勾配は存在しないが、西から東に傾斜し、平坦な場が広がる範囲はH2GrやI1Gr周辺に限られる。

③ ①・②を踏まえ、基本的に接合資料、平面分布、石材をもとにブロックを設定した。本報告で用いるブロックの名称は、同一母岩、同一石材を重視し、他時期の遺物の混在を避けることを努め、設定したものである。そのため、通常用いられるブロックの名称とは異なっている。

これらのことから、本報告書では後期旧石器時代の時期細分について以下のように取り扱った。

Ⅰ期

Ⅸ層下部からⅩ層より出土した石器。AT直上での出土が確認されなかった石器で、出土した箇所もⅡ期の石器群とは遺物の平面分布が重ならずⅠ期の石器とした。

Ⅱ期

Ⅷ層（AT）直下より出土した石器群。Ⅷc層がわずかに残る層からⅨa層直上で遺物が出土している。調査区のほぼ全面にATの堆積が確認されたため、後述するⅠ期の石器群を除くAT下位の石器群として取り扱った。上部からの攪乱も少なく、他の時期に比べ時期の決定を判断しやすかった。

Ⅲ期

細石刃石器群を除くAT上位の石器群。縦長剥片を素材とした小型のナイフ形石器を主とし、角錐状石器や台形様石器、剥片尖頭器等、多くの器種が確認され、時期差も考慮される。出土遺物量が最も多いが、その分布から時期の判断が困難であった。

Ⅳ期

細石刃石器群を有する時期。層位では、Ⅲ期石器群との区分ができず、Ⅲ期石器群、或いは後続する縄文時代の時期との区別が困難であった。そのため、明らかに細石刃石器群と判断できる器種（細石刃・細石刃核・打面再生剥片）とその同一母岩の遺物について取り扱った。

第３節　石材の分類基準

石器石材は第Ⅲ章第３節で触れたように、色調、礫面の特徴、手触り、風化の状況などを重視し分類を行った（第２表）。各石材の同定にあたっては、赤崎広志氏（宮崎県総合博物館）の協力を得て、岸田が決定した。また、確実に同一母岩と判断されるものに関しては文中で触れることとし、遺物の平面分布等の検討には第２表に示す石材分類名称を用いた。石材名称については周辺に立地する立野第５遺跡、立野第２遺跡、朝草原遺跡、尾立第３遺跡と石材名称が異なることを極力避けたが、見解の相違によりやむをえず別の名称を付したものもある。

黒曜石は、肉眼により観察される情報をもとに分類を行い、その分類の中から蛍光Ｘ線分析による黒曜石産地推定分析を委託した。そうした分析結果から得られた石材の特徴を援用して最終的な石材産地の決定に至った。

分析の結果、黒曜石①類は人吉桑ノ木津留群、黒曜石③類は大口日東群、黒曜石④類は樋脇上牛鼻群と推定された。また、黒曜石②類・⑤類の分析値は、群として固まりが見られるものの、データベースにない産地のものであり、仮に尾立第２０Ｘ群と名称づけられた。

分析結果からは、霧島系とされる未発見の産地の可能性も指摘されるが、霧島周辺での確実な原産地が未発見の現状では、霧島系という名称は不確実であり、本遺跡では黒曜石②類・⑤類を産地不明としておきたい。ただし、尾立第２０Ｘ群と分析された試料にも、石材のもつ特徴が肉眼観察からは、桑ノ木津留産黒曜石原産地で採取できるものと、近似するものが存在している。

また、分析を行わなかった黒曜石⑥類、黒曜石⑦類は前者が腰岳産、後者が姫島産と推定される。

第２表　石器石材分類表

石材名	小分類	略称	石器石材の特徴
流紋岩	①類	Ryu①	白色に風化し、流離構造が観察されるものもある。風化にはツヤがあるもの、粉を吹くもの等バリエイションがみられる。新鮮面は黒色緻密。
	②類	Ryu②	黒色を呈し、灰～灰褐色の流離構造が確認されるもの。黒色面のみの部分もある。新鮮面は黒色緻密。礫面は滑らか。
ホルンフェルス	①類	Hol①	黒色でツヤがあるものと、灰白色斑が混ざるものがある。礫面は滑らかである。剥離面の特徴は流紋岩②類の流離構造が確認されないものに近似し、流紋岩②類を含む可能性がある。
	②類	Hol②	風化面が黄色をし、粉を吹いたかのような状態になっているもの。稜線が摩滅する傾向が強い。新鮮面は黒色緻密。
	③類	Hol③	風化面が灰色或いは白色を示し、粉を吹いたかのような状態になっているものをまとめたもの。複数母岩が含まれるが細分していない。全て新鮮面は黒色緻密。
安山岩	－	An	風化面が白灰色を示し、表面がざらざらしているもの。新鮮面は黒灰色。
頁岩	－	SH	黒灰色を中心とし、薄い層状に剥離する。ホルンフェルス化が進んだものはHol③との比較が困難となり、新鮮面が露出せず、層状の剥離が確認されないものはHol③類とした。
チャート	－	Ch	青色、白色等、色調にはバリエイションをもつ。表面には光沢があるものも存在する。薄く剥離されたものは半透明となる。
玉髄	－	CC	白色。不純物を含まず表面は滑らかなものと、不純物を含むものがある。
砂岩	①類	Sn①	黄褐色から黄土色を呈し、肉眼で砂粒が確認できるもの。礫石器が多いが、剥片も存在する。
	②類	Sn②	青灰色を呈する。硬質緻密で重量がある。礫面は滑らかで、形状は円あるいは楕円の礫。
尾鈴山酸性岩類	－	Os	新鮮面は灰白色を呈し、白色に風化する。良質で緻密なものとそうでないものとが混在する。礫面は滑らかで円礫のものもある。
黒曜石 ※	①類	Ob①	透過性が高く飴色を呈する。わずかに白色の不純物や気泡を含むものもある。礫面は鮫肌状にざらざらするものと、一見、転磨されたような滑らかな面で覆われるものがある。【人吉桑ノ木津留群】
黒曜石 ※	②類	Ob②	磨りガラス状で透過性の低いもの。黄白色の不純物を含むものもある。3㎜大の球顆あるいは3㎜大の球顆がとれ、クレーター状の穴が礫面や剥離面に含まれる。礫面は一見、転磨されたような滑らかな面で覆われる。【尾立第2OX群】
黒曜石 ※	③類	Ob③	黒色で透過性が低いもの。黄白色の不純物を多く含む。剥片状に薄いものは透過性をもつものもある。【大口日東群】
黒曜石 ※	④類	Ob④	全面が風化し、光沢が全くない。新鮮面は透過性のない黒灰色。【樋脇上牛鼻群】
黒曜石 ※	⑤類	Ob⑤	青みがかる黒褐色を呈す。剥離面は磨りガラス状で透過性が低い。礫面はクレーター状の細かな凹凸をもつ。【尾立第2OX群】
黒曜石	⑥類	Ob⑥	漆黒色で透過性が低いもの。〔腰岳〕
黒曜石	⑦類	Ob⑦	乳白色を呈し、1㎜以下の赤い粒子が認められるもの。〔姫島〕

※黒曜石産地推定分析（蛍光X線分析）実施石材

第４節　後期旧石器時代Ⅰ期

Ⅰ期とした石器群はⅨ層下部からⅩ層より出土した石器である。第Ⅲ章第１節で触れたように、堆積の薄い調査区南西側はⅨ層除去後すぐに礫層となるため、調査は、良好な堆積が確認されたD8GrとI3Gr・I4Gr周辺に限られた。遺物の出土は、Ⅸa層掘削後、トレンチ調査を行っていた際出土したものであり、調査区全面の掘削は行っていない（第15図）。

遺物（第15図1・2）

１は局部磨製石斧である。背面は礫面の形状を利用し、両側面からの剥離で整形をした後、表面下部付近に磨きを行い刃部が作り出されている。ホルンフェルス製で、風化は激しい。局部磨製石斧は調査区南東側の堆積が薄いⅨb層下部からの出土であり確実にⅨ層と分離できる状況ではなかったが、Ⅸ層出土の石器群より下位で出土したとの判断からⅠ期の石器と理解した。また、局部磨製石斧の出土により、D9Gr周辺の掘削を行ったが、他の遺物は確認されなかった。

２は敲石である。円礫の側面を巡るように敲打痕がみられ、特に左側面には明瞭な敲打による凹みが認められる。砂岩製ではあるが、Ⅸ層あるいはAT上位より出土する砂岩製の敲石とは石材の特徴が異なる。１に比べⅨb層の堆積は厚い範囲よりの出土であったため、Ⅹ層内での出土が明確であったものの、周辺の掘削で剥片等の遺物は確認されなかった。

【小結】

Ⅰ期の遺物は資料数に乏しく、掘削範囲も限られることから詳細を語ることはできない。また、Ⅸ層の堆積が薄い範囲にⅠ期の石器が混在する可能性もある。AT下位出土遺物のうち定型的な縦長剥離をもつ石核と、不定形な剥片石核に注意し、整理作業時にⅠ期石器群の抽出に努めたが、明確なⅠ期の石器を判断することができなかった。

第５節　後期旧石器時代Ⅱ期

AT直下にあたるⅨa層上面より石器の出土が確認された。Ⅸa層は尾根状に伸びる調査区の北東で約30cmの堆積が確認されたが、調査区南側に行くに従って、その堆積は徐々に薄くなっていた。また、B8Gr、C6Gr、D5Gr、E3Grはすでに礫層が露出しておりⅨ層の堆積が認められなかった。

調査は、遺物が安定的に確認された範囲を中心として行ったが、掘削を行っていない範囲もある。確認された遺構・遺物は礫群１基、石器712点で、これらの遺構・遺物をもとに３箇所のブロックを設定した（第16図）。

ブロックAの石器群（第17～19図3～48）

B9Gr周辺に堆積していたⅧ層を手鍬で掘削していたところ、Ⅷ層下部がわずかに残るⅨ層直上から多量の黒曜石製剥片が出土してきた。そのため、手鍬からネジリ鎌、竹串に発掘道具を替え、掘削を進めていった。

黒曜石製石器が密集する範囲からはナイフ形石器や二次加工剥片、敲石等が出土し、石器は約２m四方に密集していた。これらの石器は、黒曜石内に２～３㎜大の球顆を含むものが存在することから、同一産地の黒曜石と考えられるが、遺跡内に搬入された母岩数は１個体だけではない。これらの黒曜石製石器群に対して、蛍光Ｘ線分析を行ったところ、分析した試料10点中１点が桑ノ木津留産黒曜石と分析され、残りの８点がデータベースにないものであった。この産地不明の資料は仮に尾立第２OX群と名称づけられた。（原石は全面風化の為、測定不可）。

上記の黒曜石製石器群が集中する範囲をブロックＡとする。

ブロックＡでは17例の接合資料が確認された。剥片剥離に利用される母岩には拳大よりも小さな黒曜石が用いられ、自然面に覆われた状態で遺跡内に搬入されたと考えられる。剥片と剥片、石核と剥片との接合が確認されたが、剥片を採取する際に、衝撃により生じた偶発的な剥片・砕片との接合が多く認められた。遺物が集中する範囲、遺

物の集中する範囲とその周辺、遺物の密集する範囲の周辺どうしでの接合が認められる。また、B9Gr周辺の土を篩により選別した結果、1㎝以下の黒曜石製砕片が多量に確認された。

ナイフ形石器は7点が確認され、全て二側縁加工が施される。最大長は2～3㎝であり、左側面に丹念な調整が入るものが多い。黒曜石製剥片が最も集中する範囲より7、8が出土している。

また、同ブロックより出土した18は棒状を呈する敲石である。敲打の痕跡が両端部に認められ、中央部で欠損している。出土状況からブロックAの黒曜石製石器の製作に伴う敲石と考えられる。

ブロックBの石器群（第20～23図49～85）

ブロックBはC7Gr周辺を中心とするホルンフェルス①類の石材を中心とした石器群でナイフ形石器、二次加工剥片、礫器、掻器、剥片、石核で構成される。遺物の出土状況は、ブロックAに比べ、同一石材が密集するという状況ではなく、石器群の器種構成、石材構成に顕著なまとまりは認められない。また、ブロックB周辺はⅨ層の堆積が薄く上層の遺物の混在も排除できない。石器に用いられる石材の傾向として、ナイフ形石器や二次加工剥片、剥片にはホルンフェルス①類が石材として用いられることが多く、スクレイパーや礫器はホルンフェルス③類が用いられる。ホルンフェルスは前者に比べ、後者は風化が著しい。

ナイフ形石器は全て、約2～3㎝大の縦長剥片を素材とし、素材の打面側を基部に設定する。このうち50～52、54、55は正面に、ナイフ形石器の素材を獲得する以前に石刃状の剥片が採取された痕跡を残す。74は親指大の掻器で、素材の周縁を巡るように粗い剥離が施されている。

石核はホルンフェルス①類とホルンフェルス②類製が確認されるが、接合資料7や60の石核のように打面を固定せず不定形方向から剥離を行うものと、72や73、75のように、打面を固定し、共通した打面から縦長剥片を採取するものがある。また、61は水晶製の石核であるが、調査区内に同一石材の石器は出土していない。

ブロックCの石器群（第24図86～105）

E4Gr周辺にホルンフェルス②類の剥片が集中しており、ブロックCを設定した。ナイフ形石器等の利器は出土せず、石核、剥片で構成される。剥片は縦長のものだけでなく、幅広のもの等、不定形な剥片が採取され、剥片剥離に一定した技術は認められない。ブロックCの石器群は同一の母岩を用いていると考えられ、全ての石器が黄色く、粉を吹いているように風化する特徴が共通して確認される。

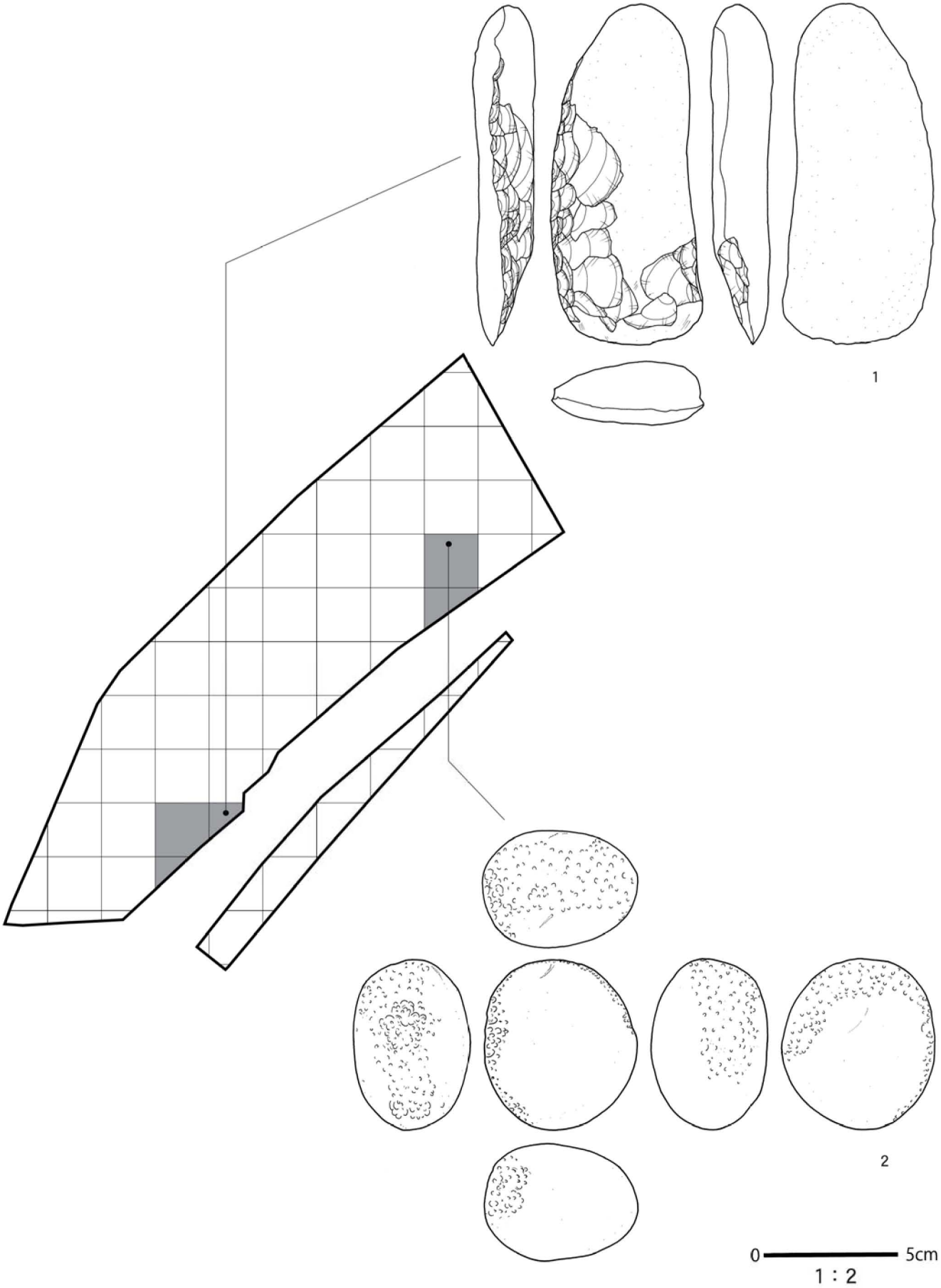
ブロック外の石器（第25～26図106～126）

106～113はナイフ形石器である。ブロック内で確認されるナイフ形石器と同様に、縦長剥片を素材とし、石器基部側に素材打面部を設定し、二側縁加工が施されている。114は頁岩を石材とした打製石斧である。AT直下からの出土であり、剥片等の遺物が集中する範囲とは位置が離れる。基部側のみの出土であり、刃部は欠損により消失している。正面・裏面ともに側面からの加工が行われ、稜が摩滅する箇所も認められる。風化が激しく、研磨による線状痕は確認できないが、整形の後磨きを行った可能性もある。薄い層状に剥離される頁岩がホルンフェルス化したものであり、Ⅷ層下位から同一石材は確認されていない。

遺構（第27図）

SI18は17点の礫で構成される。礫は密集せず、遺構のほぼ中央に、やや環状に配置される小礫と、自然による凹みをもつ10㎝大の礫が確認される。石材は尾鈴山酸性岩類である。礫に被熱等による赤化はみられず、炭化物は出土しなかった。礫群の西は、Ⅸ層の堆積が確認できず礫層が露出しており、東におよそ2ｍの位置には前述したブロックAが存在する。周辺には人為的な礫の配置は確認されず、Ⅸa・Ⅸb層下位よりの礫層の巨礫が頭を出しているような状況であった。

123はSI18内より出土した礫器である。自然面を正面に配置し、裏面側からの粗い加工が施される。遺構を構成する礫とは明らかに石材が異なり、遺構内の遺物と判断される。



第15図　後期旧石器時代Ⅰ期石器実測図

【小結】

Ⅱ期石器群を理解するにあたって、３つの石器ブロックを設定した。これらブロックの中でも、ブロックＡは敲石とナイフ形石器、剥片、砕片等がATにパックされた状態で出土し、石器製作の痕跡を残す良好な一括資料と判断される。また、出土した黒曜石産地は蛍光Ｘ線分析の結果、尾立第2OX群と桑ノ木津留群の黒曜石が出土している。

各ブロックの状況をみると、ブロックＡ・ブロックＢでナイフ形石器の製作が行われた痕跡がわかる。特に、ブロックＢでは、縦長剥片素材を採取することを目的とした石核（72・73・75）が特徴的で、縦長剥片を採取しようとする技術の介在を見て取れる。これらの石核は、ナイフ形石器の素材として縦長剥片を目的としていたことを示し、Ⅱ期石器群の特色である。また、本遺跡のⅡ期石器群ではブロックと認識しなかったものも含め、縦長剥片を素材とし、基部側に剥片の打面が設定される長さ４～５㎝大のナイフ形石器が15点出土している。

これに対し、ブロックＡの剥片剥離技術を石核から見出すことは難しい。出土した石核からは背面や側面に礫面を残す資料が多く、剥片剥離の際に、礫面を除去し剥片を採取する。しかし、前述した石核のように縦長剥片を剥離する痕跡を残すものは少なく、やや縦に長い不定形な剥片を、一定の面に打面を固定せず採取しているようである。

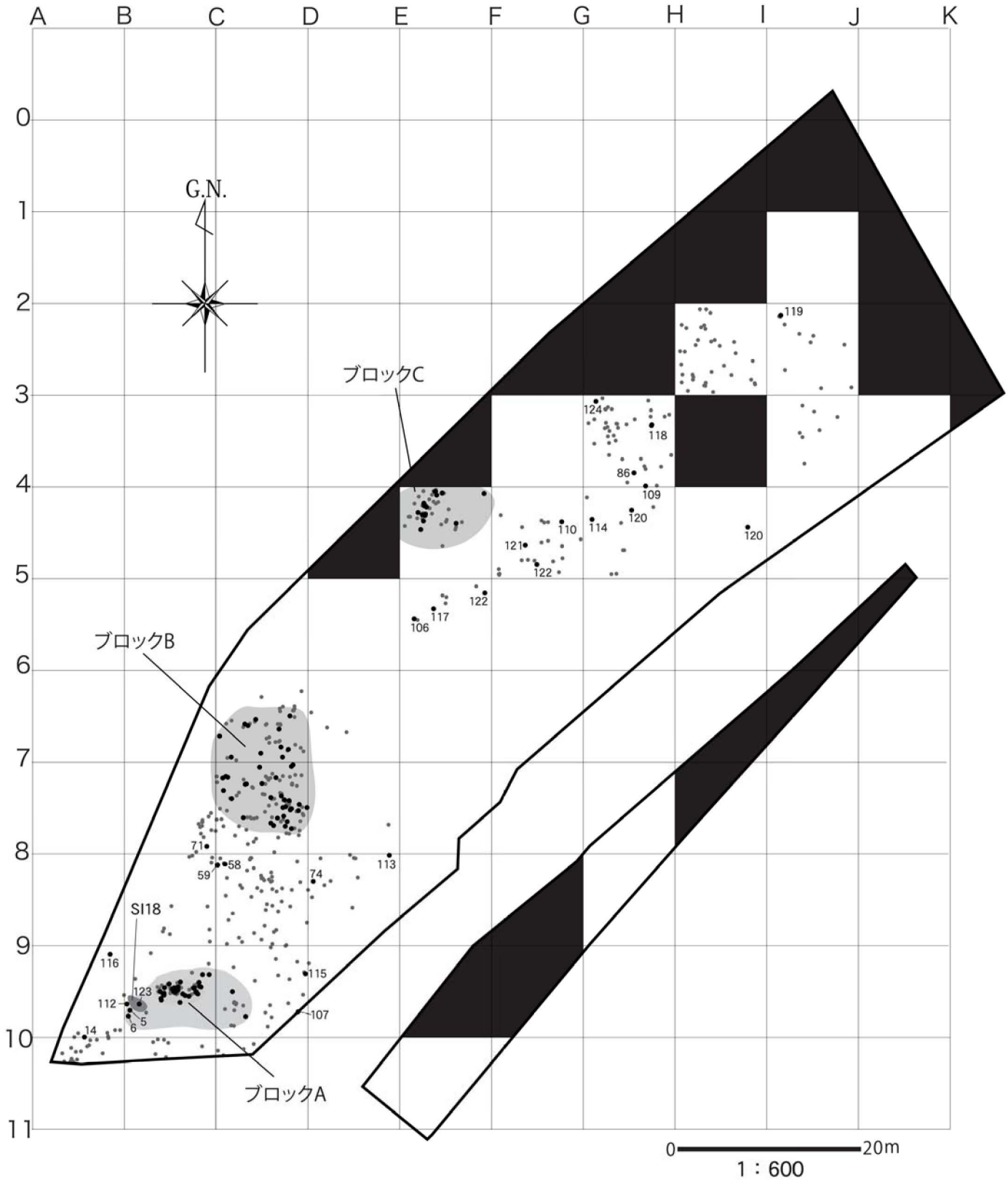
石核と接合する剥片はサイズが小さく、これらの資料は、剥片剥離による加撃の際、衝撃により採取されたものであり、尾立第2OX群とされる黒曜石が、剥片剥離を安定的に行うことに不向きな石材であることを示している。こうした黒曜石②類の持つ安定的に目的とする剥片を得ることができない特徴から、ブロックＡより出土したナイフ形石器は、幾度かの剥片作出により偶発的に生じた剥片のうち、形のよいものを素材として利用して整形されたと考えられる。

また、ブロックＡより出土した敲石にも注目したい。対象となる石器石材の違いが選ばれる敲石のサイズに影響すると指摘されるように（藤木2000）、18は拳大よりも小さな石核より剥片剥離を行うには手頃な大きさと考えられる。しかし、同ブロックより出土したナイフ形石器に施される細かな二次加工にも、この敲石が使用されたとは考えづらく、その他のハンマーの利用も想定される。

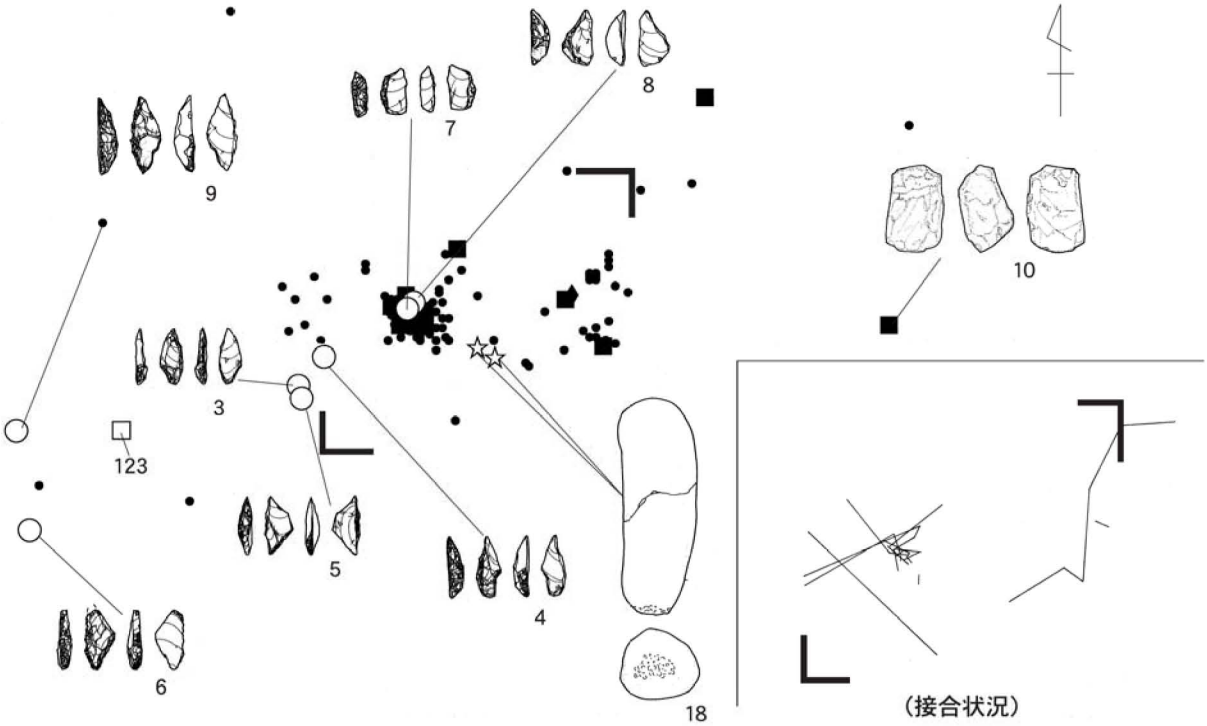
藤木聡「敲石と石器製作」『旧石器考古学』60号　旧石器文化談話会　2000

第３表　Ⅱ期接合資料剥離工程表

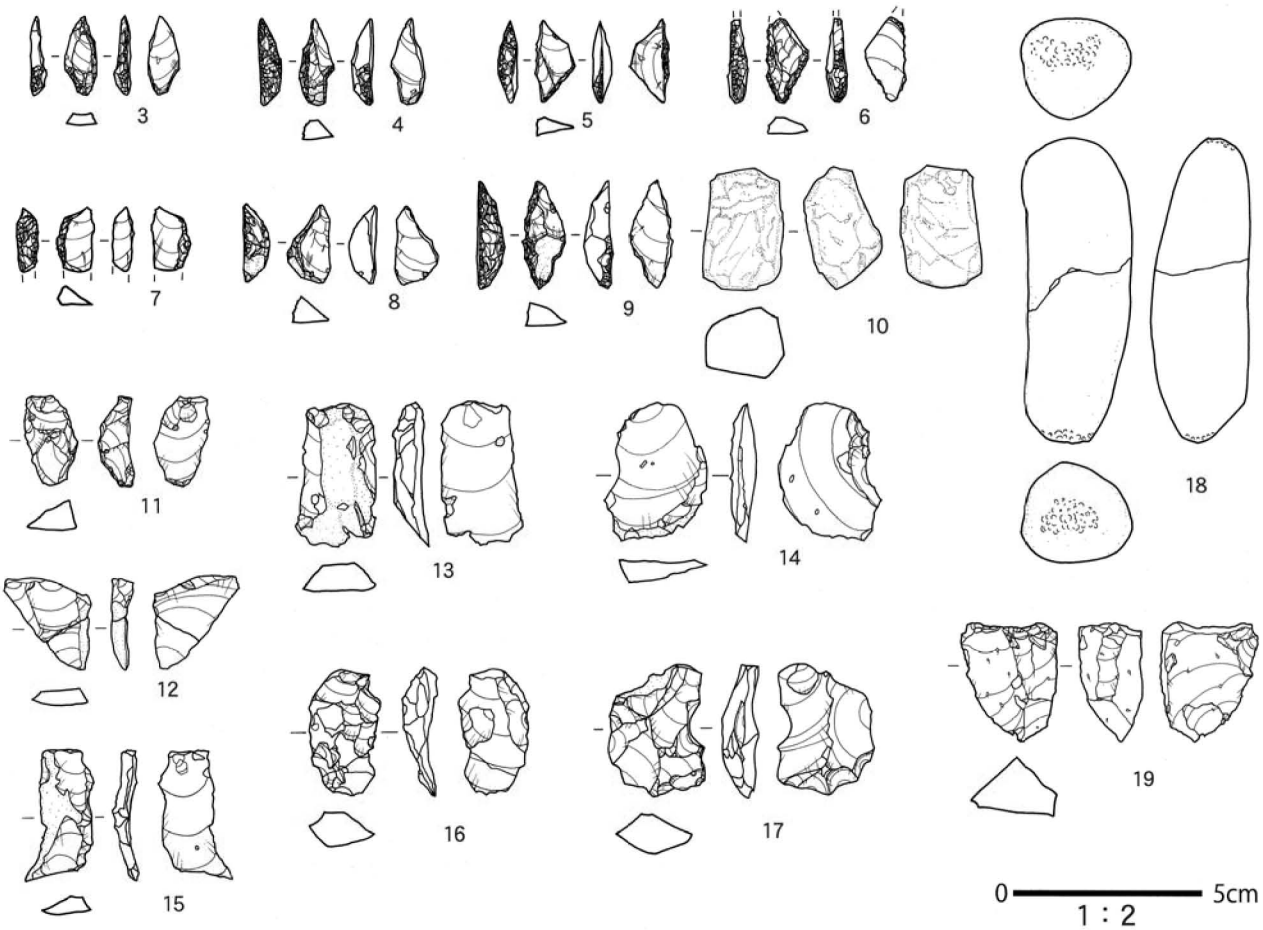
接合番号	遺物番号	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	剥離の順序
接合資料1	20＋21＋22＋23＋24＋25	4.7	3.5	2.2	28.9	幅広剥片(21)を剥離。→別打面より幅広剥片(22)を剥離。→正面側からの剥離により作出された平坦打面より幅広剥片(23)を剥離。剥片23剥離時に石核(24)と石核(25)が分離か。小剥片(20)は裏面別打面より礫面を除去するように剥離。
接合資料2	26＋27＋28	2.5	1.6	0.5	1.8	幅広剥片(27)採取時に、小剥片(26、28)が偶発的に割れ。小剥片(26、28)が剥離された痕跡なく、裏面全てに礫面が残存。
接合資料3	29＋30＋31	2.4	1.3	0.9	1.2	平坦打面より小縦長剥片(29)を剥離。→小縦長剥片(30)を剥離。その後、縦名剥片(31)を剥離。29、30、31の全ての剥片は同一の平坦打面より剥離される。剥片同士の接合。
接合資料4	33＋34＋35	2.6	1.8	0.5	2.6	縦長剥片(33)を剥離後、縦長剥片(34・35)を剥離。縦長剥片(33・34)は平坦面より採取される。剥片(33)と剥片(35)の接合は剥離の際の偶発的な割れで、34、35の主要剥離面に残る球顆の凹みにより割れが生じたと思われる。剥片同士の接合。
接合資料5	36＋37＋38＋39	3.6	1.6	0.6	3.3	縦長剥片剥離時の衝撃により、下半部のみ残存(38)。→平坦打面より小剥片(39)を剥離。→縦長剥片(37)を剥離。→打面を180°回転させ小剥片(36)を剥離。38剥離の際の打面は37、39と同一の平坦打面と思われる。
接合資料6	40＋41＋42＋43＋44＋45	2.8	2.3	0.9	8.1	礫打面より剥片(41)を剥離。→打面を180°回転させ、礫打面より幅広剥片(40)を剥離。→剥片40と同一の礫打面より小縦長剥片(42・45)を剥離。剥離時の衝撃により剥片42、45は中央部より欠損。→別方向から小剥片(43)を剥離。上半部欠損は剥離の衝撃によるものか。→別方向から小剥片(44)を剥離。
接合資料7	62＋63＋64＋65	3.8	4.7	2.9	59.9	正面方向からの剥離により幅広剥片(63)と幅広剥片(64)を剥離。剥片63、64により作出された打面より幅広の剥片を採取。→正面側からの加工により縦長剥片(62)を剥離。65は残核。礫面形状より原石は円礫。



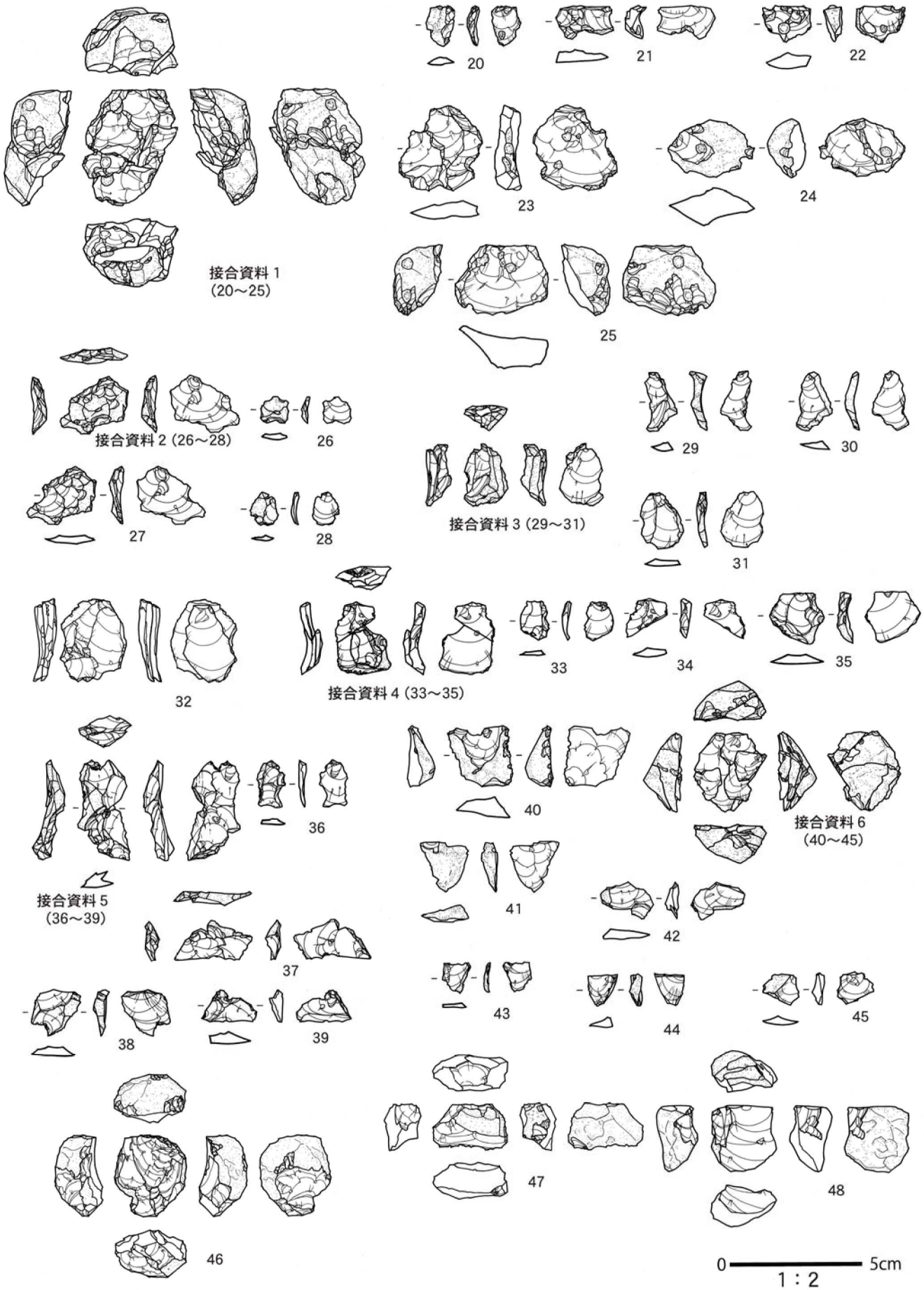
第16図　後期旧石器時代Ⅱ期石器分布図



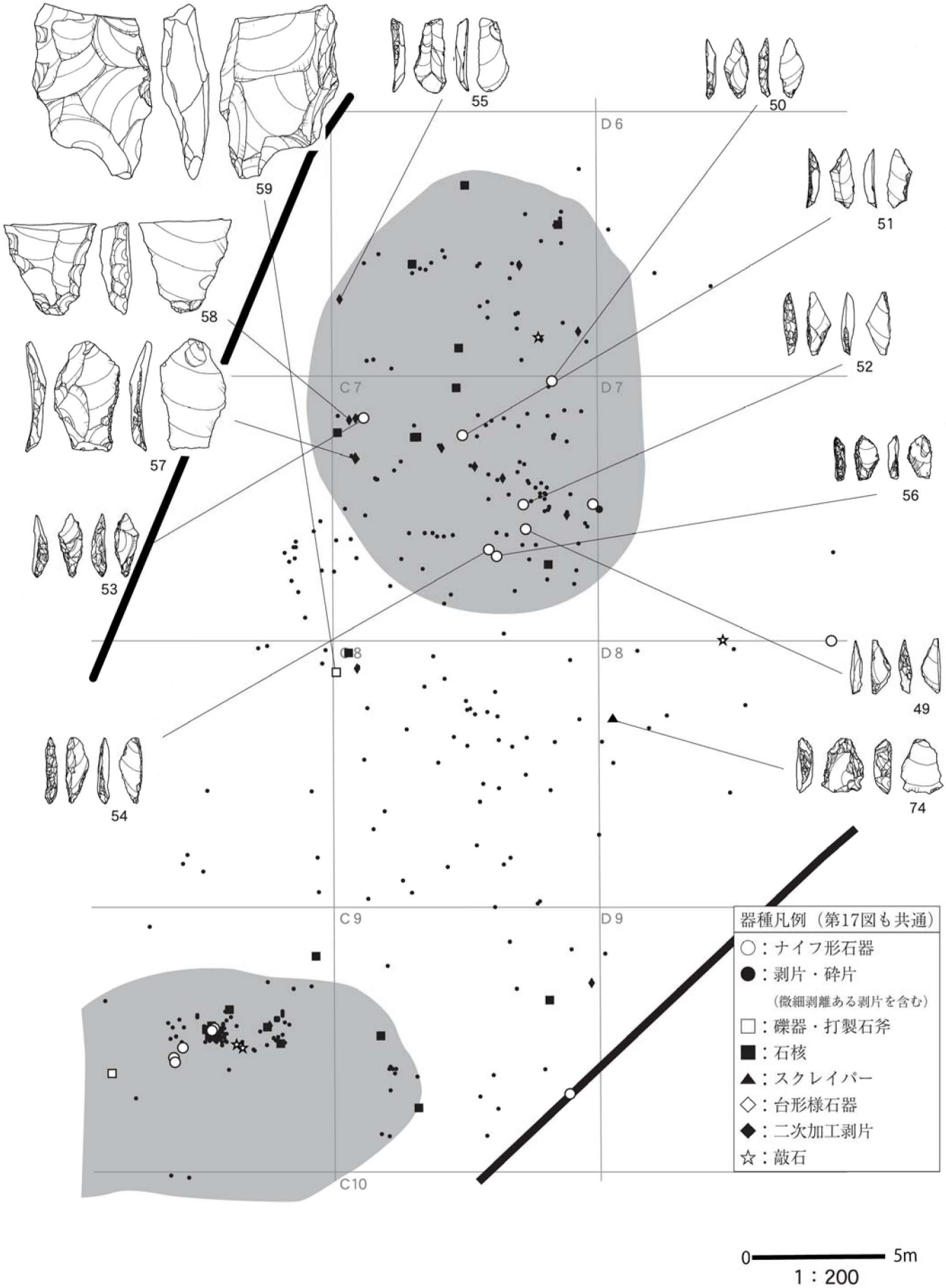
第17図　ブロックＡ石器分布図



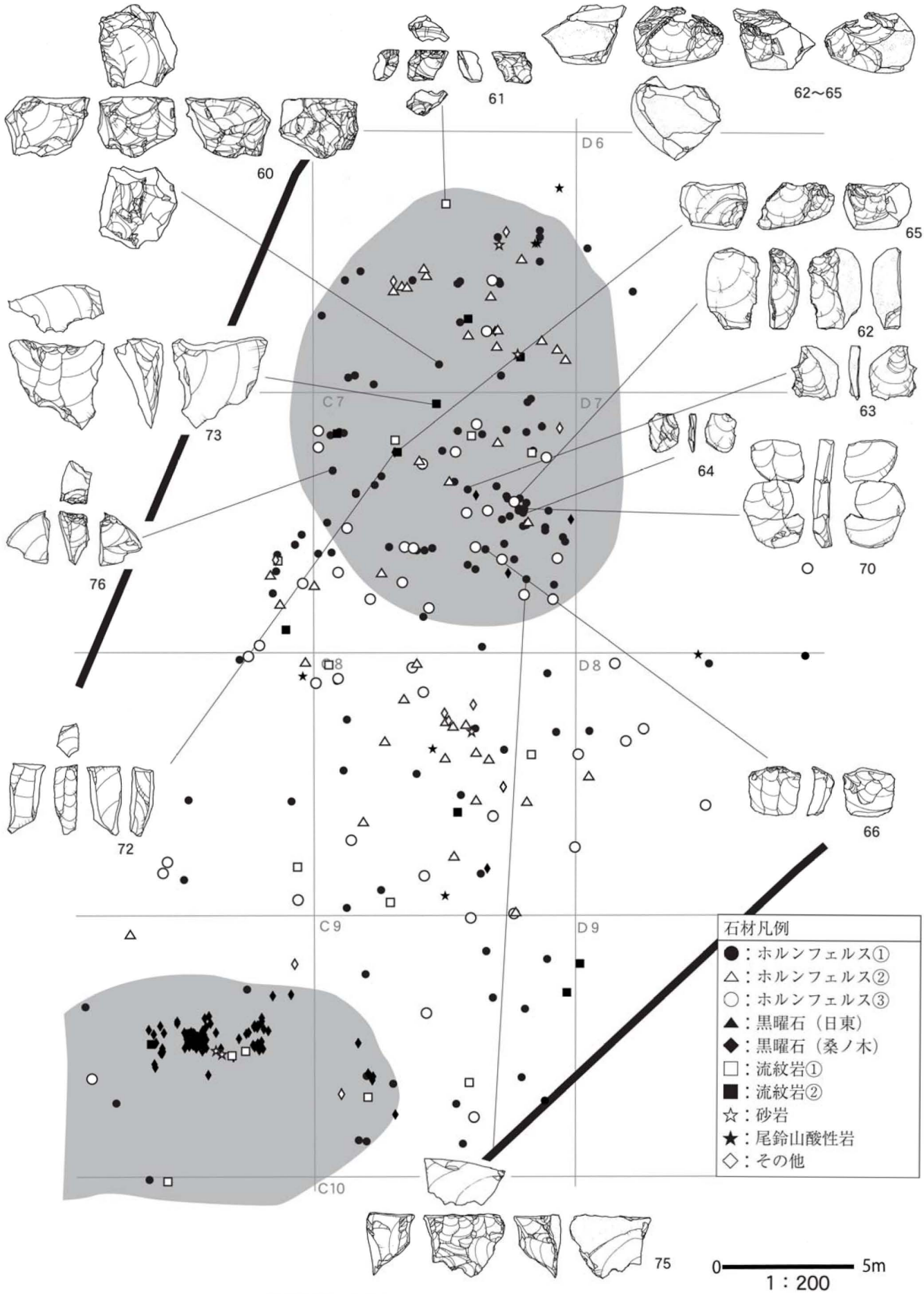
第18図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（１）



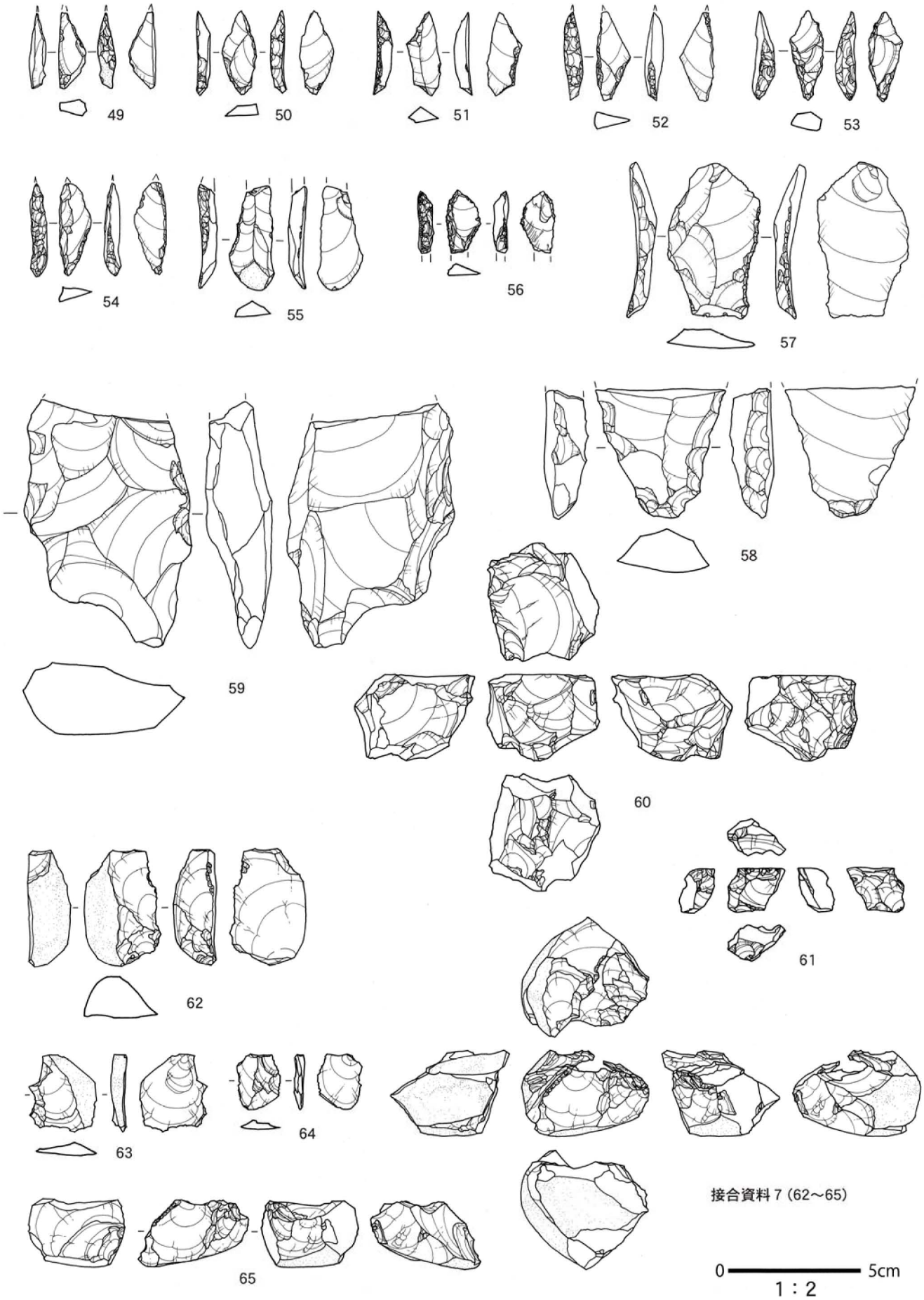
第19図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（2）



第20図　ブロックＢ石器分布図（器種）

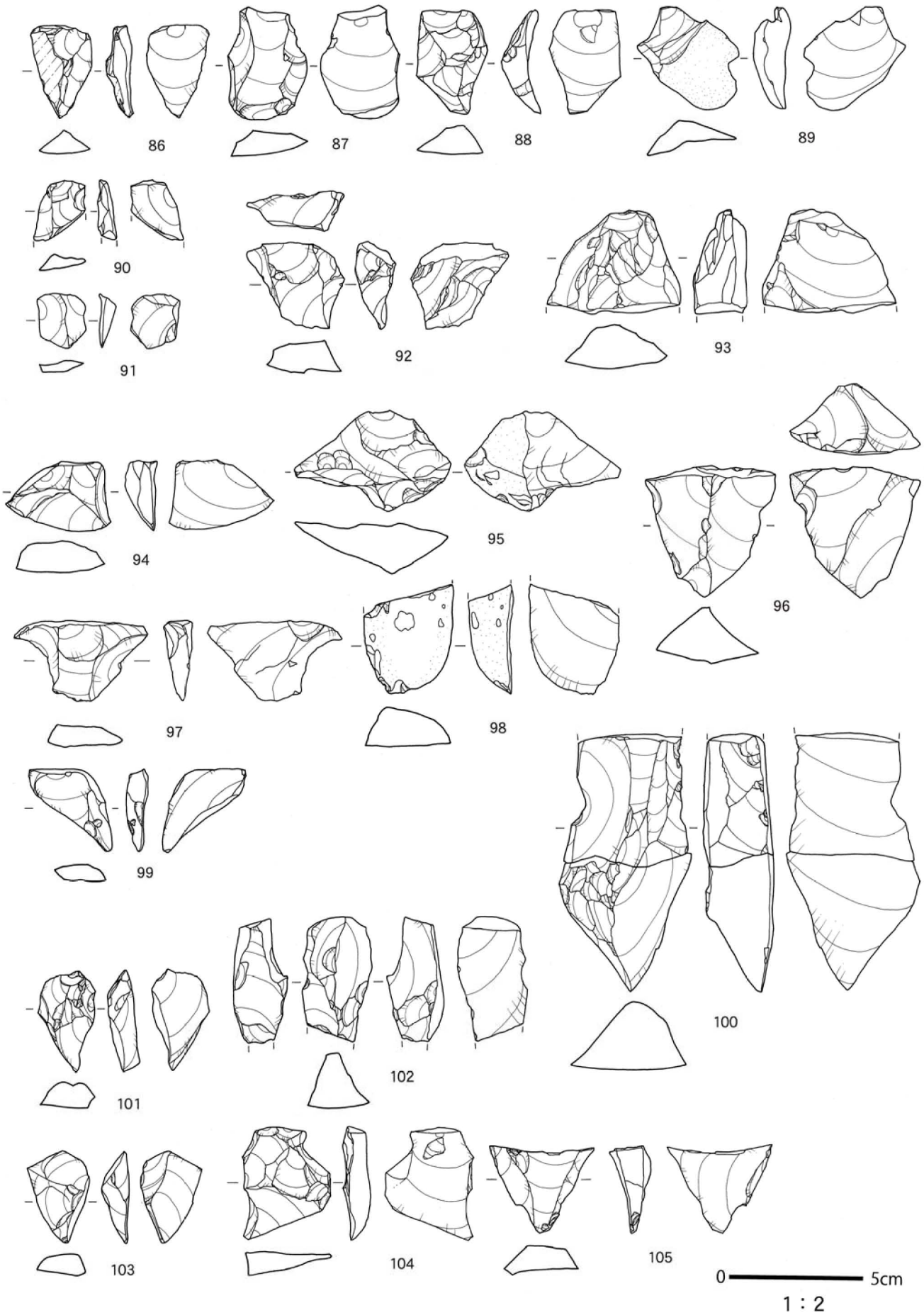


第21図　ブロックＢ石器分布図（石材）

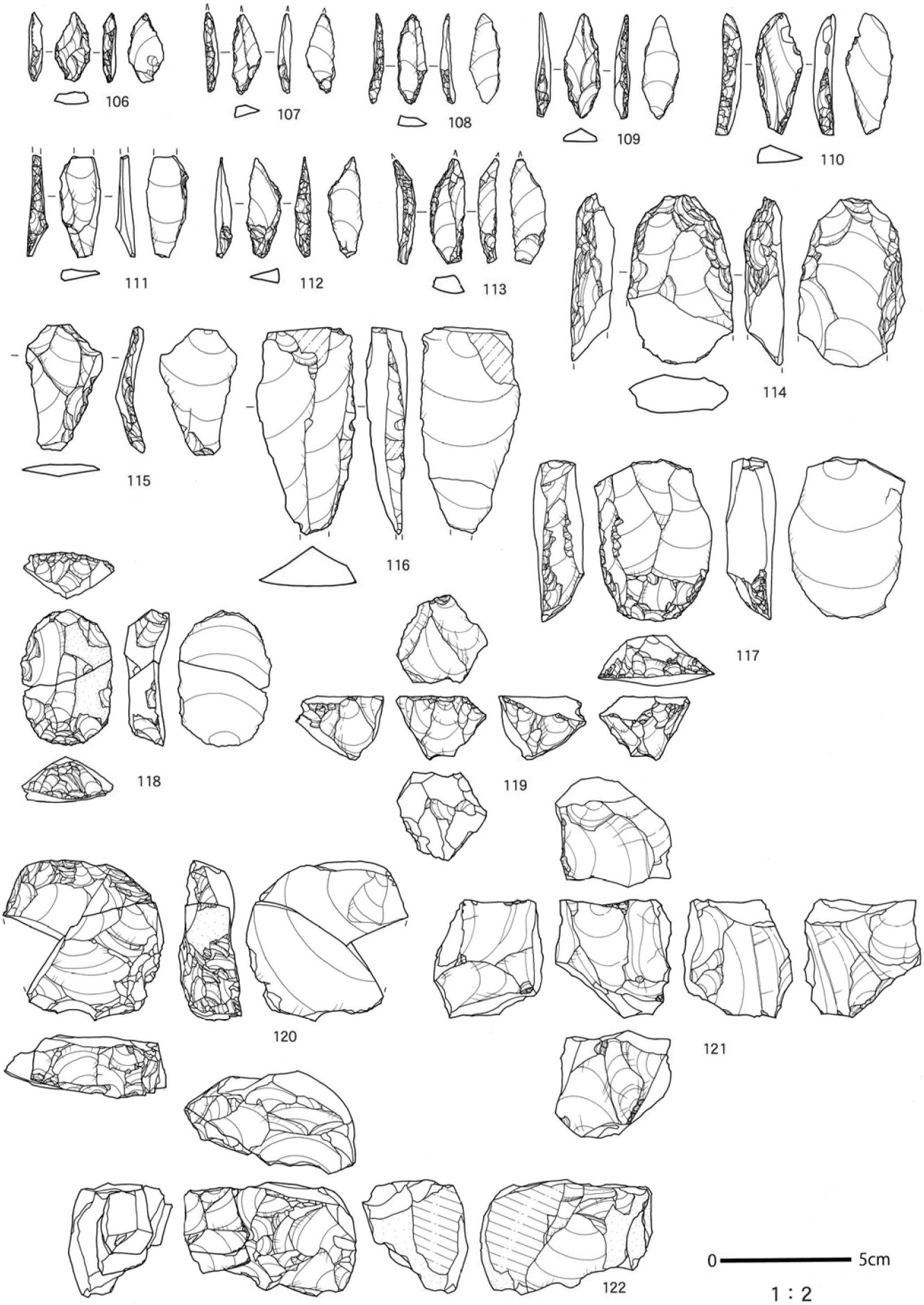


第22図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（３）

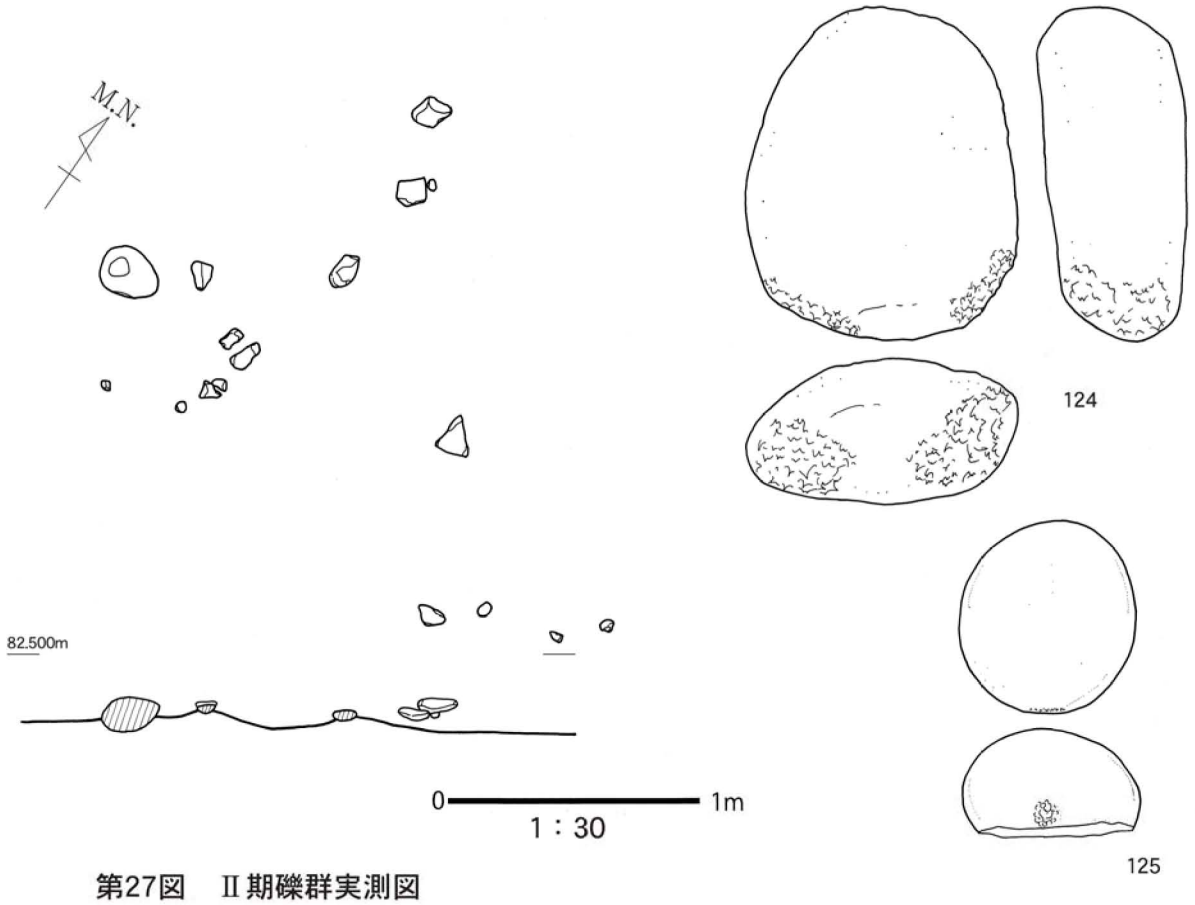
第23図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（4）



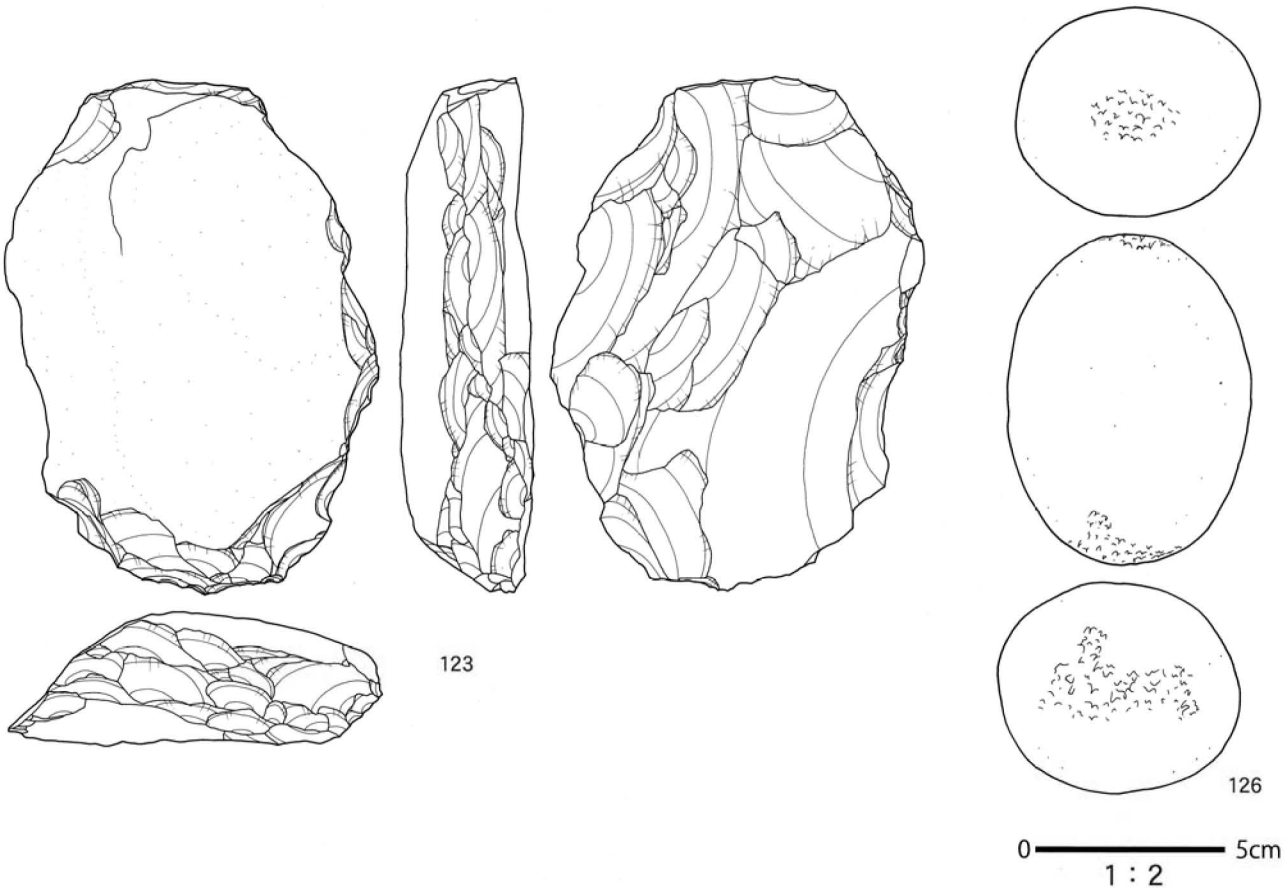
第24図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（5）



第25図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（6）



第27図　Ⅱ期礫群実測図



第26図　後期旧石器時代Ⅱ期石器実測図（7）

第４表　Ⅰ期・Ⅱ期石器観察表

掲載番号	遺物番号	出土層位	Gr	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	ブロック	観察所見
1	1682	Ⅸ	D9	局部磨製石斧	Hol③	12.6	5.6	2.3	245.5	―	扁平な礫素材を利用。刃部付近磨製。
2	5340	Ⅹ	I3	敲石	Sn①	6.3	5.7	4.4	199.0	―	円礫。ほぼ全周に敲打痕。
3	1844	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.1	0.8	0.4	0.5	A	小型の縦長剥片を素材とし、素材末端が基部。
4	1843	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.3	0.9	0.6	0.9	A	小型の縦長剥片素材。左側面に入念な加工。
5	1845	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.2	1.0	0.5	0.6	A	小型の横長剥片素材。両側縁からの整形により基部は鋭角。
6	1940	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.2	1.1	0.5	1.1	A	縦長あるいは幅広の剥片素材。先端部は欠損。
7	1969	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	1.7	1.0	0.6	0.7	A	縦長剥片素材。左側面に入念な加工。
8	1832	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.1	1.1	0.7	1.1	A	縦長あるいは幅広剥片素材。石器基部側には礫面が残存。
9	1842	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Ob②	2.8	1.1	0.7	1.6	A	縦長剥片素材で素材末端が基部。正面下半に礫面残存。
10	1705	Ⅸ	C9	原石	Ob②	3.2	2.0	1.9	14.4	A	黒曜石原石。3cm大の亜角礫。
11	1489	Ⅸ	C7	微細剥離のある剥片	Ob①	2.4	1.5	1.0	2.3	A	縦長剥片素材。素材末端に礫面が残存。左側縁に微細剥離。
12	1865+1952	Ⅸ	B9	剥片	Ob①	2.4	2.1	0.4	2.2	A	幅広剥片。前段階の剥離とは逆方向から剥片採取。
13	1841	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.8	2.0	0.6	6.3	A	縦長剥片。正面ほぼ全面に礫面が残存。
14	1786	Ⅸ	A9	剥片	Ob②	3.6	2.7	0.7	4.8	―	横長剥片。
15	1941	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.5	1.4	0.3	1.9	A	縦長剥片。正面は上・下両端側からの剥離により礫面除去。
16	1794+1795	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.2	1.8	0.7	3.4	A	縦長剥片。不定形方向からの剥片剥離。
17	1806	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.5	2.5	1.0	6.8	A	幅広剥片。両面に不定方向からの剥離。
18	1927+1928	Ⅸ	B9	敲石	Ob②	8.1	2.7	2.7	87.1	A	棒状礫。上端・下端に敲打痕。
19	1713	Ⅸ	B9	剥片	Ob③	2.9	2.3	1.5	10.9	(A)	1点のみの出土。上部からの流れ込みの可能性が高い。
20	1796a	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.5	1.1	0.4	0.4	A	小縦長剥片。接合資料1
21	1817	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.2	2.1	0.7	1.1	A	幅広剥片。接合資料1
22	1792a	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.4	1.8	0.7	1.3	A	幅広剥片。接合資料1
23	1793	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.7	3.1	1.0	6.6	A	幅広剥片。打面調整なし。右側面は礫面が残存。接合資料1。
24	1811	Ⅸ	B9	石核	Ob②	2.2	3.2	1.4	7.1	A	円礫素材。不定形剥片剥離。接合資料1。
25	1815	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	2.7	3.5	1.8	12.4	A	円礫素材。幅広剥片剥離。礫面に球顆が残る。接合資料1。
26	1905	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.0	1.0	0.3	0.1	A	小剥片。裏面は全面礫面。接合資料2
27	1846	Ⅸ	B9	石核	Ob②	2.2	2.6	0.5	1.6	A	幅広剥片。打面調整なし。頭部調整なし。接合資料2。
28	1971	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.2	1.0	0.3	0.1	A	小剥片。接合資料2
29	1874	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.1	1.1	0.2	0.1	A	小縦長剥片。接合資料3。
30	1873	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.2	1.1	0.4	0.4	A	小幅広剥片。接合資料3。
31	1826	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.2	1.4	0.4	0.7	A	小幅広剥片。接合資料3。
32	1838+2000	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	3.1	2.3	0.6	4.7	A	縦長剥片同士の接合。
33	1875	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.5	1.1	0.3	0.4	A	小縦長剥片。接合資料4。
34	1890	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.5	1.5	0.4	0.6	A	小幅広剥片。接合資料4。
35	1880	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.9	2.0	0.6	1.6	A	幅広剥片。接合資料4。
36	1914	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.8	1.1	0.3	0.4	A	小縦長剥片。接合資料5。
37	1892	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.5	2.9	0.6	1.2	A	小幅広剥片。接合資料5。
38	1947	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.7	1.9	0.6	1.0	A	小幅広剥片。接合資料5。
39	1998	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.2	2.0	0.5	0.7	A	小幅広剥片。接合資料5。
40	1840	Ⅸ	B9	石核	Ob②	2.3	2.4	1.0	3.5	A	幅広剥片。正面礫面残存。接合資料6
41	1824	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.9	1.8	0.6	1.3	A	幅広剥片。接合資料6。
42	1894	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	1.9	1.9	0.5	0.9	A	小幅広剥片。接合資料6。
43	1981	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	2.2	1.2	0.7	0.6	A	小剥片。接合資料6。
44	1833	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	2.2	1.3	0.5	0.8	A	小剥片。接合資料6。
45	1963	Ⅸ	B9	剥片	Ob②	2.1	1.6	0.5	1.0	A	小剥片。接合資料6。
46	1847	Ⅸ	B9	石核	Ob②	3.1	2.7	1.7	13.1	A	円礫素材。打面調整を施さず幅広剥片剥離。
47	1858	Ⅸ	B9	石核	Ob②	1.8	2.8	1.3	6.4	A	円礫素材。人為的加工なく、礫形状によるものか。
48	1821	Ⅸ	B9	石核	Ob②	2.5	2.4	1.6	8.7	A	亜角礫素材。打面調整なく、礫面が剥片剥離時の打面。
49	1523	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	2.9	1.0	0.6	1.8	B	小形の縦長剥片を素材。右側縁上半に入念な加工。
50	1594	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.1	1.2	0.5	1.8	B	縦長剥片素材。素材剥片の末端を石器基部側に設定。
51	1565	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.1	1.2	0.6	1.8	B	縦長剥片素材。先端・基部は裏面側、中央は正面側から調整。
52	1544	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.3	1.2	0.6	2.1	B	縦長剥片素材。素材末端が基部。刃部は鋭角で切り出し状。
53	1588	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.4	1.3	1.0	2.5	B	両側縁から基部周辺に入念な加工。刃部はペン先状。
54	1492	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.5	1.2	0.6	2.1	B	縦長剥片素材。刃部は微細剥離痕が残る。先端部欠損。
55	1740	Ⅸ	C6	二次加工剥片	Hol①	3.9	1.7	0.7	3.9	B	縦長剥片素材。左側縁に加工が施される。先端部欠損。
56	2007	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Ob①	2.3	1.3	0.6	1.4	B	縦長あるいは幅広剥片素材。先端部欠損。
57	1555	Ⅸ	C7	二次加工剥片	Hol①	6.0	3.9	1.0	14.5	B	縦長剥片素材。右側縁に二次加工。右側縁上部に微細剥離。
58	1760	Ⅸ	C8	二次加工剥片	Hol①	4.9	3.9	1.6	32.1	―	縦長剥片を素材とし、裏面から二次加工。上部欠損。
59	1761	Ⅸ	C8	礫器	Hol③	9.3	6.2	3.0	151.2	―	全面が不定形方向からの粗い剥離により整形。上部欠損。
60	1600	Ⅸ	C6	石核	Hol①	3.3	4.2	4.5	74.6	B	打面転移を繰り返し、不定形方向から剥片剥離。打面調整なし。
61	1694	Ⅸ	C8	石核	水晶	1.6	2.1	1.4	3.5	B	平坦打面を有し、幅広剥片剥離。頭部調整を有する。
62	1585	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	4.4	2.9	1.6	21.7	B	縦長あるいは幅広剥片。裏面に礫面が残存。接合資料7。
63	1532	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.9	2.5	0.6	3.7	B	幅広の剥片。正面右に礫面が残存。接合資料7。

掲載番号	遺物番号	出土層位	Gr	器種	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	ブロック	備考
64	1531	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.1	1.6	0.4	1.1	B	幅広小剥片。接合資料7。
65	1560	Ⅸ	C7	石核	Hol①	2.5	4.1	3.6	33.4	B	円礫素材。不定形方向から幅広剥片剥離。接合資料7。
66	1522	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.6	2.8	1.1	7.3	B	縦長剥片。頭部調整を有し、剥片獲得前段階は縦長剥片剥離。
67	1597	Ⅸ	C6	剥片	Hol①	2.5	2.3	0.8	4.9	B	幅広剥片。平坦打面で頭部調整を有する。
68	1526	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	3.1	3.2	1.4	7.4	B	幅広剥片。
69	1543	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	3.9	2.5	1.0	7.7	B	幅広剥片。正面右に礫面が残存する。頭部調整を有する。
70	1530+1540	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	5.8	2.8	0.8	19.2	B	縦長剥片。正面に縦長剥片剥離の痕跡。中央欠損は偶発的か。
71	1524	Ⅸ	B7	剥片	Ryu②	6.3	3.8	2.0	42.1	—	縦長剥片。石器中央が肉厚となる。平坦打面。
72	1561	Ⅸ	C7	石核	Ryu②	3.8	1.2	1.3	9.9	B	縦長剥片剥離が全周を巡り残核形態は角柱状。平坦打面。
73	1595	Ⅸ	C7	石核	Ryu②	4.8	5.1	2.6	39.7	B	剥片素材。正面に3条の剥片剥離の痕跡が残る。平坦打面。
74	2022	Ⅸ	B9	スクレイパー	Hol①	2.8	1.9	0.9	6.3	—	縦長剥片素材。素材末端、両側縁に二次加工。
75	1487	Ⅸ	C7	石核	Hol①	3.4	4.3	2.5	36.1	B	平坦打面から小縦長剥片剥離。正面左下は打面転移前の剥離。
76	1551	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.9	1.7	2.3	9.1	B	節理による平坦な面を打面とし小縦長剥片剥離。頭部調整あり。
77	1534	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	1.7	1.5	0.5	1.0	B	小幅広剥片。
78	1548	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	1.8	1.7	0.5	1.1	B	小幅広剥片。平坦打面を有する。
79	1568	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.5	1.4	0.4	1.2	B	小縦長剥片。頭部調整が介在する。下部欠損。
80	1515	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.7	1.0	0.5	1.5	B	小縦長剥片。下部欠損。
81	1593	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.9	4.1	1.1	6.4	B	幅広剥片。
82	1599	Ⅸ	C6	微細剥離のある剥片	Hol①	4.4	2.2	0.6	7.2	B	縦長剥片。左側縁に微細剥離が残る。頭部調整を介在。
83	1584	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.1	2.6	0.5	2.4	B	幅広剥片。平坦打面を有す。頭部調整が介在。
84	1559	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	3.1	2.5	0.9	4.2	B	幅広剥片。正面に礫面が残存。
85	1577	Ⅸ	C7	剥片	Hol①	2.9	3.0	1.4	7.0	B	幅広剥片。平坦打面を有する。底面は礫面残存。
86	5220	Ⅸ	G3	剥片	Hol②	3.5	2.3	1.0	6.1	—	縦長剥片。正面左側は節理。
87	5281	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	4.2	2.9	1.2	15.2	C	縦長剥片。平坦打面より剥片を採取。
88	5282	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	3.9	2.7	1.0	10.2	C	縦長剥片。
89	5278	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	3.8	3.8	1.4	10.9	C	幅広剥片。円礫素材で、正面に礫面が残存。
90	5280	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	2.3	2.0	0.7	2.3	C	縦長剥片。下部欠損。
91	5284b	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	2.0	1.8	0.7	1.7	C	幅広剥片。
92	5293	Ⅸ	E4	石核	Hol②	3.2	3.7	1.8	13.5	C	正面、裏面ともに不定形な小剥片を採取。打面は礫面か。
93	5284a	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	3.9	5.0	2.0	35.0	C	肉厚な幅広剥片。下部欠損か。稜が摩滅し風化が激しい。
94	5290	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	2.6	4.0	1.2	12.1	C	幅広剥片。稜が摩滅し風化が激しい。
95	5297	Ⅸ	E4	石核	Hol②	3.8	5.8	2.0	28.3	C	円礫素材。不定方向から幅広剥片を採取。
96	5268	Ⅸ	E4	石核	Hol②	4.9	4.9	2.5	45.4	C	肉厚な幅広剥片。
97	5295	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	3.0	5.0	1.1	11.9	C	幅広剥片。稜が摩滅し風化が激しい。
98	5292	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	4.1	3.3	1.7	25.2	C	正面は全て礫面で覆われる。円礫素材。
99	5266	Ⅸ	E4	剥片	Hol②	3.1	3.1	0.8	6.3	C	不定形剥片。稜が摩滅し、風化が激しい。
100	5265+5270	Ⅸ	E4	二次加工剥片	Hol②	9.4	4.5	2.5	110.9	C	縦長剥片素材。左側面に裏面側からの剥離。上部欠損。
101	1615	Ⅸ	C6	剥片	Hol②	3.8	2.2	1.2	7.6	C	不定形剥片。稜が摩滅し、風化が激しい。
102	1606	Ⅸ	C6	剥片	Hol②	4.6	2.6	2.2	20.9	C	不定形剥片。
103	1622	Ⅸ	C6	剥片	Hol②	3.4	2.3	1.2	6.1	C	幅広剥片。風化が激しく、稜が摩滅。
104	1602	Ⅸ	C6	剥片	Hol②	4.2	3.2	1.0	11.7	C	縦長剥片。平坦打面より剥片を採取。
105	1610	Ⅸ	C6	剥片	Hol②	3.2	3.9	1.6	10.5	C	幅広剥片。
106	5317	Ⅸ	E5	ナイフ形石器	Ob①	2.6	1.3	0.5	1.6	—	幅広剥片素材の二側縁加工ナイフ形石器。刃部に微細な剥離痕。
107	2065	Ⅸ	C9	ナイフ形石器	Hol①	3.0	1.1	0.4	1.3	—	小形の縦長剥片素材。素材剥片打面を基部側に設定。
108	5263	Ⅸ	E4	ナイフ形石器	Hol①	3.4	1.1	0.4	1.6	—	小形の縦長剥片素材で素材打面側が基部。先端が尖る。
109	5222	Ⅸ	G3	ナイフ形石器	Hol①	3.9	1.4	0.6	2.6	—	縦長剥片素材で、素材打面側を基部とする。刃部に微細剥離。
110	5239	Ⅸ	F4	ナイフ形石器	Hol①	4.7	1.8	0.8	5.9	—	縦長剥片素材。刃部に微細な剥離痕が残る。下部欠損。
111	1491	Ⅸ	C7	ナイフ形石器	Hol①	3.9	1.5	0.7	2.1	—	縦長剥片素材、左側縁側のみ二次加工。上部・下部欠損。
112	1942	Ⅸ	B9	ナイフ形石器	Hol①	3.8	1.2	0.6	2.4	—	縦長剥片素材。素材剥片の打面を残す。
113	2050	Ⅸ	D8	ナイフ形石器	Hol①	4.0	1.3	0.7	3.3	—	縦長剥片素材。素材剥片の打面を残す。先端部欠損。
114	5227	Ⅸ	G4	打製石斧	SH	6.4	4.1	1.5	45.0	—	両側縁からの加工による整形。正面中央の摩滅は研磨か。
115	2064	Ⅸ	C9	二次加工剥片	Ryu②	4.8	2.9	1.0	8.2	—	縦長剥片素材。正面下端に礫面残存。
116	384	Ⅸ	A9	微細剥離のある剥片	Hol③	7.9	3.8	1.6	38.9	—	縦長剥片素材。正面に石刃状の縦長剥片採取の痕跡を残す。
117	5315	Ⅸ	E5	スクレイパー	Hol①	6.1	4.5	1.9	50.0	—	縦長剥片素材。剥片末端に粗い二次加工が施される。
118	5202+5203	Ⅸ	G3	スクレイパー	Hol③	5.0	3.3	1.8	29.3	—	縦長剥片素材。素材上、末端に二次加工。風化激しい。
119	5351	Ⅸ	I2	石核	Hol②	2.4	3.4	3.3	22.9	—	平坦打面。小形の縦長剥片が採取され、残核形状は円錐形。
120	5228+5234a	Ⅸ	G4+H4	石核	Hol①	6.2	6.2	2.1	96.1	—	小形の幅広剥片採取か。欠損は剥片採取時の衝撃時か。
121	5252	Ⅸ	F4	石核	Hol③	4.5	4.4	4.1	94.4	—	不定方向から打面転移を繰り返す。最終剥片採取は平坦打面。
122	5255+5314	Ⅸ	E5+F4	石核	Hol①	4.6	6.8	3	103.6	—	円礫素材。不定形方向から幅広剥片剥離。
123	1930	Ⅸ	B9	礫器	Hol③	13.6	9.9	3.5	514.0	—	正面ほぼ全面に礫面残存。風化激しい。
124	5224	Ⅸ	G3	敲石	Os	8.9	7.2	3.9	340.3	—	両側面下端に敲打痕。敲打の単位は粗い。
125	1696	Ⅸ	C8	敲石	Sn①	5.1	4.7	2.9	94.7	—	小円礫。下端に敲打痕。欠損は敲打によるためか。
126	5306	Ⅸ	E4	敲石	Os	8.8	6.5	5.5	398.2	—	円礫。礫の上端・下端に敲打痕。

第６節　後期旧石器時代Ⅲ期

Ⅲ期石器群はⅣ層～Ⅶ層で確認された石器群で、遺物のほとんどがⅥ層上部から出土した。しかし、第13図に示されるとおりⅥ層検出面での遺物の分布は調査区全面に渡り、前節で触れたブロックＡのような、一定範囲での石器の集中を見出すことは困難であった。

第Ⅳ章第２節において、石器群の理解を図るため、本報告書でのブロックの設定の基準を示した。しかし、説明が不足している点もあるため、出土遺物が各時期の中で最も多いⅢ期石器群の報告を前に、Ⅲ期石器群を検討する際に行った作業を説明したい。

まず、Ⅲ期石器群以外の石器群（Ⅰ・Ⅱ期石器群、後述するⅣ期石器群、縄文時代早期の石器群）を除去し、第28図のような平面分布図を石材ごとに作成するとともに、出土遺物の点数を５ｍ×５ｍのグリッドで区切り、遺物分布の偏りを確認した。これらの作業の結果、日東系の黒曜石がF5Gr、G5Gr周辺に集中して分布すること等、分布に特徴が見られる石材の抽出を行うことができた。また、チャート製、玉髄製の剥片・砕片が集中する範囲は同石材の石鏃と分布域が重なることから、両石材の剥片・砕片は縄文時代早期に帰属させることとした。

数量・重量ともに大きい流紋岩①類やホルンフェルス①類、ホルンフェルス③類は遺物・重量の両分布図を作成するとともに、接合資料の平面的な範囲の確認を行った。

その結果、流紋岩①類、ホルンフェルス①類、ホルンフェルス②類、ホルンフェルス③類の石材は接合範囲がほぼ同じ範囲に収まることとなった。なお、接合資料の多くは尾根の鞍部と谷とで接合が確認され、遺物が標高の低い方へ向かって落ち込んだ可能性を示すかのような状況であった。

また、堆積の薄い調査区南西、C6Gr・D6Gr周辺は、ナイフ形石器等が多く確認されるが、これまで指摘してきたように、上層削平の為、遺物が原位置を留めていない可能性が高い。こうした理由から、調査区のほぼ全面がATに覆われていたⅡ期石器群とは異なり二次的な動きが激しいと考えられる。そのため出土遺物の図化を行ったが、平面分布等の検討は避けた。

こうした作業を行った後、同一母岩を見出すことを目的とし、石器の観察を行った。ブロックの抽出に対しては、後述する細石刃石器群や縄文時代に位置づけられる剥片等の遺物とⅢ期石器群の明確な区分が行えない以上、石器群の集中するＦ～Ｈ・３～5Gr周辺に限り、平面分布状で石器の集中する範囲の器種構成、石材構成を指摘するに留めた（第31図～第36図）。ここでブロックとした石器群は平面分布から分かるように、掘削範囲に対し、遺物が特に密集する範囲はなく、掘削時から明確に遺物の集中が確認された前述のブロックＡのような出土状態ではなかった。

なお、ブロックの名称はⅡ期石器群と区分するため、ブロックＤ、Ｅ、Ｆ、Ｇとした。

礫群（第30図・第62図）

Ⅶ層より礫群を４基検出した。SI21はⅧ層直上より、平面形が円を呈するように礫が検出された。すべてが尾鈴山酸性岩類で構成され、そのほとんどの礫面が激しく赤化していた。礫は完形のものがなくすべて破砕礫で構成され、破損面にも赤化が認められた。遺構内の礫は１点ずつ取り上げをおこなったが、礫は全面が赤化し、下部が赤化しないという状況は認められなかった。また、SI21より出土した炭化材に対しAMSによる年代測定を行ったところ、暦年代較正の範囲外ではあるが、24,900±160年BPの年代値が得られている。

Ⅲ期の遺構とした４基の礫群は上位層からの落ち込みは考えられない。また、後述する集石遺構と比較して遺構を構成する礫の赤化が激しいことに特徴をもつことで共通している。

調査区中央の東端に他の礫群に比べ平面規模が大きく、300点を超える破砕礫で構成されるSI21が配置され、その約20ｍ南西に散礫状に礫が散在するSI23、SI27が、その約10ｍ南西に礫が円状に密集するSI30が検出されている。調査区中央より北からは礫群は確認されなかった。

ブロックD・Eの石器群（第31～第34図）

F4Gr、G4Gr周辺で、ナイフ形石器や角錐状石器が集中して分布していた。分布している範囲は重なっていたが石材と器種構成が異なることからブロックDとブロックEを区別した。両ブロックが位置する範囲は旧地形が調査区の中でも比較的平坦な箇所であり、面的にそろって遺物が分布する。

ブロックDでは流紋岩①類製の角錐状石器に特徴がみられる。特に、F4aGr、F4cGr周辺径３ｍ×４ｍの範囲に、ナイフ形石器と角錐状石器が弧状に分布するような遺物の出土状況であった。

294、295は主要剥離面の両側縁から二次加工が施された後、中央に走る稜を除去するかのように縦あるいは横からの加工が加えられる。そのため、断面形が台形状となることで共通した特徴をもつ。また、312や313のように、角錐状石器の先端部のみが出土している例もある。

ブロックEはブロックDより若干北東に位置する。G4Gr周辺径５ｍ×７ｍの範囲には347～354、355～359の接合資料があり、これらは、当時の剥離工程を示す接合資料で、偶発的な割れや、二次的な割れ等が含まれるものの、人為的な剥離による痕跡も残る。接合遺物の範囲の広がりは、二次的な移動の範囲を示す上で重要であり、接合範囲を重視しブロックEと設定した。

ナイフ形石器の素材にはホルンフェルス①類が多く利用される。打面を基部側に設定した縦長剥片を用い、基部側にブランティングが施されるものが多く、先端部付近に部分加工を施すものも存在する。

178、195はナイフ形石器としたが、角錐状石器と共通するような平坦剥離が施される。両石器とも打面を除去するかのように裏面基部側に加工が施されている。

341はホルンフェルス①類の掻器である。幅広の剥片の末端に粗い二次加工が施されている。正面に残る３条の剥離痕はすべて341の素材採取前の剥離によるものである。

ブロックFの石器群（第35図～第36図）

ブロックＦは調査区東H3Gr、H4Gr周辺に位置する。前述のブロックＤ、ブロックＥの範囲からはおよそ５ｍの間隔をもつ。ブロックＦの特徴として、H3Grではナイフ形石器が９点、H4Grからは台形様石器が５点出土している。調査区内で台形様石器が散在せずまとまって出土するのはH4Gr周辺のみである。

台形様石器は５点を図化した。縦長剥片、あるいは不定形な剥片を素材とし、それを横位に用いて両側縁への調整が施されている。基部が先細りするように整形され、形態が撥状を呈することで共通している。

326は剥片尖頭器である。縦長剥片の打面を基部側に設定し基部に抉りを施すように加工が施されている。326と同様の形態を呈す剥片尖頭器は本遺跡内からは他に出土しておらず、特異な石器である。

ブロックGの石器群（第52図）

F5Gr、G5Gr周辺では、50点を超える黒曜石③類製の石器が集中した。石材は風化が著しい１点の角錐状石器（433）を除き、他の角錐状石器、剥片等と共通した特徴を示している。同一母岩とも考えられるが接合する遺物は確認されていない。そこでF5Gr、G5Gr周辺より出土した黒曜石③類製の石器群をブロックＧと設定した。

ブロックＧでは径20ｍ×11ｍの範囲に黒曜石③類製の角錐状石器が３点、二次加工剥片が１点、50点以上の剥片等が出土している。

その他の石器（第37～54図）

Ⅲ期の石器としてブロック内外を含め、ナイフ形石器等332点を図化した。これらの石器群の中で、ナイフ形石器や角錐状石器はその素材や加工部位、形態により分類が可能である。

ナイフ形石器は、縦長剥片を素材とするものがほとんどで、横長剥片を素材としたものは僅かに確認される程度である。

二側縁加工のナイフ形石器、あるいは基部加工のナイフ形石器が多くみられ、小形の縦長剥片を

素材としたものや（第40図213～240）、やや幅広の剥片を素材とした基部周辺に加工が施されるもの（241～254）、正面基部中央に前段階の剥離が残るもの（256～261）等は共通した特徴を見出せる。

角錐状石器は最大長が５㎝を超えるものと、５㎝以下に大別できる（第42図、第43図）。大形のものは、ホルンフェルス③類を石材とし、素材となる縦長剥片の基部側に打面を設定し、縦長剥片採取時に生じた剥片の厚みを除去するかのように、基部裏面に加工が加えられ、粗い二次加工により整形されている（318～320）。

小型の角錐状石器は、背面に主要剥離面が用いられるものと、剥片の厚みを除去するかのように、基部裏面が加工されるものが存在する。

台形様石器は、ナイフ形石器や角錐状石器に比べると出土数が少ないが、131を除き、器軸に対して直交あるいは斜方向の刃部を設定し、平面形態が撥状を呈すことで共通している。

剥片尖頭器は３点出土した。322はナイフ形石器とも捉えられ、縦長剥片の打面側を基部に設定し、基部に抉りが施される。

また、326は基部に抉りを施す剥片尖頭器である。

【小結】

Ⅲ期の遺構・遺物として礫群４基と、Ｆ～Ｈ・３～5Gr周辺に設定したブロックについて説明してきた。

礫群は４基検出し、すべての礫群で礫面に激しい赤化が認められた。これらの礫群はⅦ層下部とⅧ層直上より検出されており、Ⅵ層上部で確認されたナイフ形石器等の石器群とは出土層位に違いがある。そのため、遺構と遺物との関係は判断しづらいが、SI21上層より出土した石器のレベル差が0.4m存在することから、Ⅲ期とした石器群と礫群の間には、時期差が存在すると思われる。また、遺構が検出されるⅦ層下面では遺物がほとんど出土しないことから、遺構と遺物との総合的な判断を行うことはできなかった。

Ⅲ期石器群は、平面分布状況から、石器群の一括性を見出すことに努め、ブロックの設定を行った。

結果的には、一括性を有する石器の抽出を明確にすることはできなかったが、ブロックＤ・Ｅ・Ｆ・Ｇとした範囲では石器器種・石材に異なる様相が確認された。

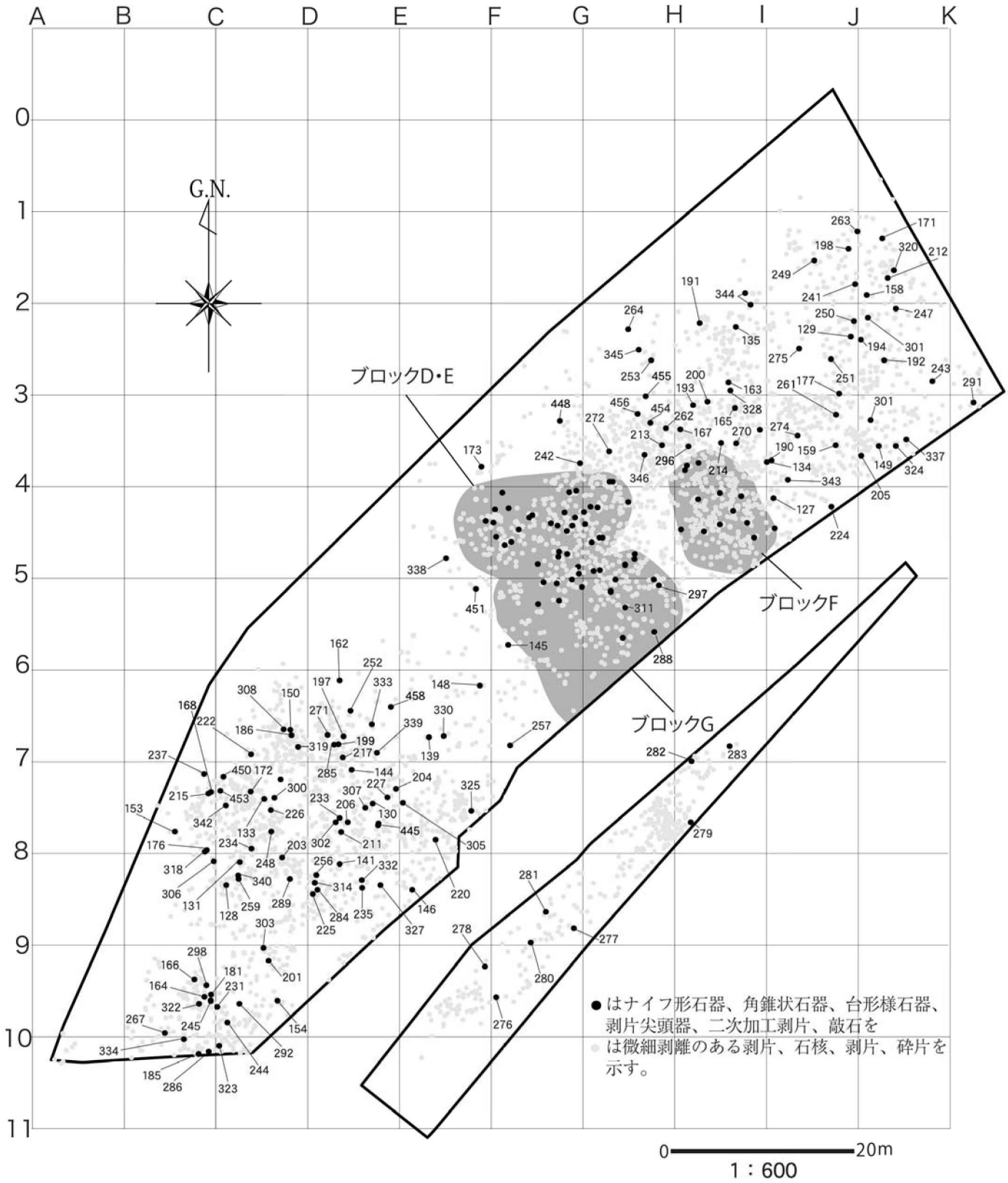
ブロックＤ・Ｅ・Ｆ・ＧはG4Gr、F4Gr周辺、径20ｍ×30ｍの範囲に当たり、それぞれのブロックの設定基準は前述した通りである。設定されたブロックの特徴をまとめるとブロックＤでは風化面が白色を呈す流紋岩①類製の角錐状石器が、ブロックＥではホルンフェルス①類のナイフ形石器が特徴的である、また、ブロックＦではホルンフェルス①類を石材とした台形様石器を含む石器群が確認される。

ブロックＥはナイフ形石器と同じホルンフェルス①類の接合資料が集まる範囲であり、ブロックＧの黒曜石③類製の角錐状石器、剥片は同一母岩の可能性を残している。

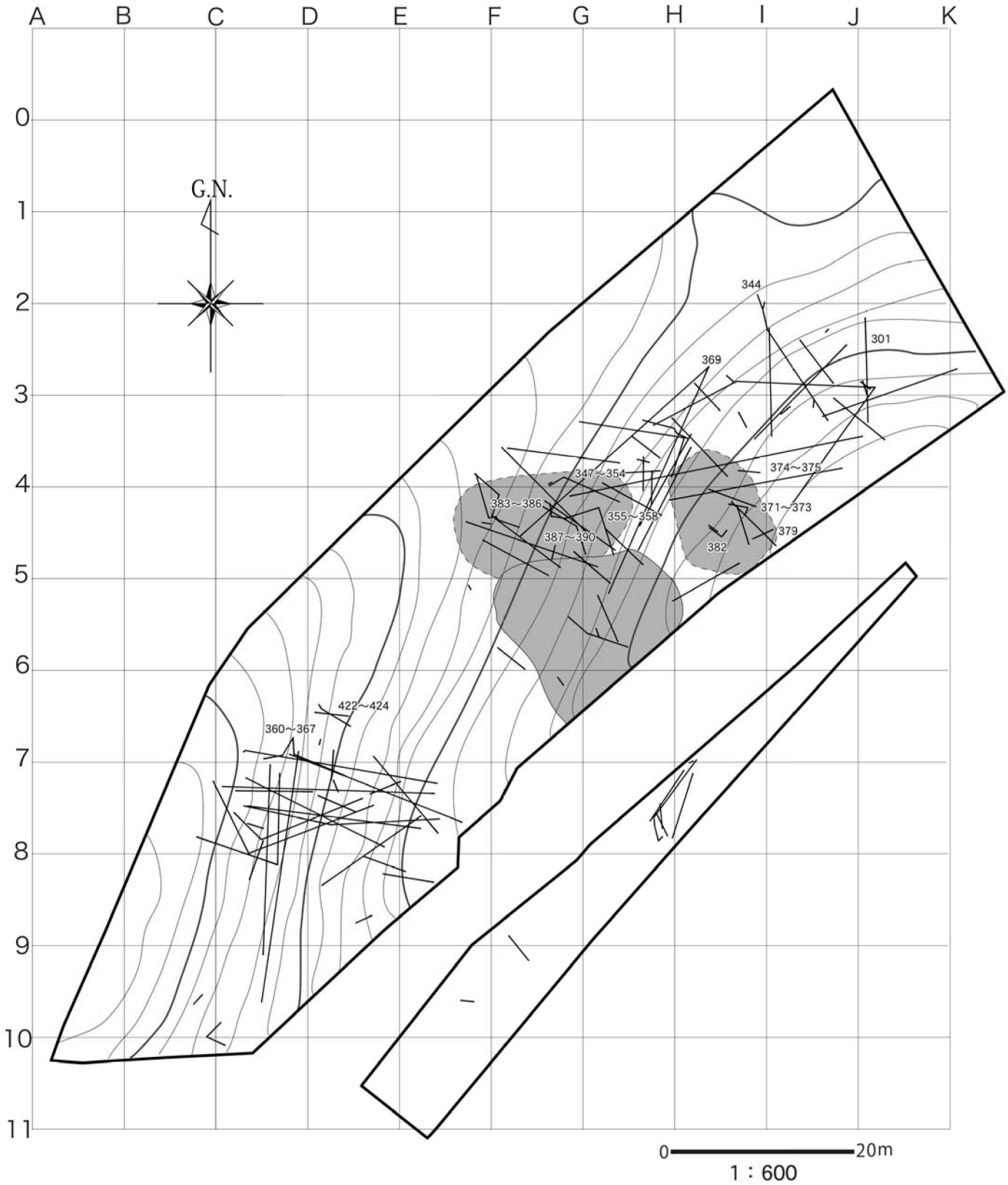
各ブロック間は、ブロックＤ・Ｅがほぼ同範囲となるのに対し、ブロックＤ・Ｅを中心とするとブロックＦは約５ｍ東に位置する。器種分布に限った分布をみるならば、両ブロック間にはナイフ形石器等の器種が空白となる範囲があり、ブロックＤ・ＥとブロックＦを隔てた石器群の集中する場が存在するかのようである。また、ブロックＧとした黒曜石③類製石器群はおよそ５ｍ南に位置している。

これらの各ブロックすべての石器が同時期の所産とするには課題が残る。しかし、同範囲内において同一石材、同一器種の石器群が集まることは、注目すべきことである。

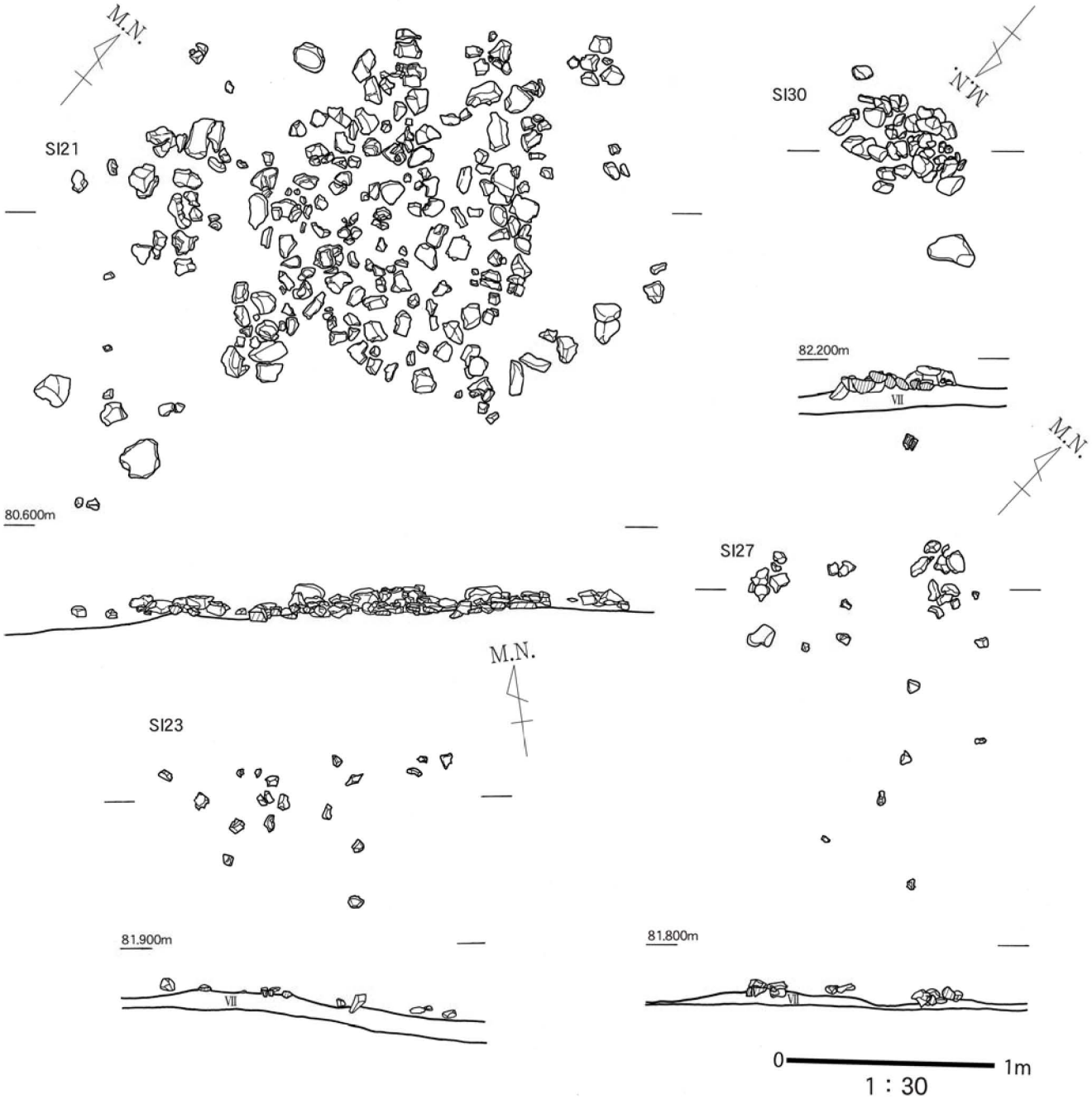
また、調査区の範囲に対し、石器が密に集中する範囲が存在せず、調査区全面に遺物が散漫に分布する状況はⅢ期石器群の特徴であり、その理解を困難にしているが、ブロックあるいは、その範囲外でもナイフ形石器、角錐状石器の分布が集中する範囲をもつ傾向がある（第６表）。これらの石器が集中する背景には、何らかの場の機能を想定することができるのかもしれない。



第28図　後期旧石器時代Ⅲ期石器分布図



第29図　Ⅲ期石器接合状況



第30図　Ⅲ期礫群実測図

第５表　Ⅲ期礫群観察表

遺構No	検出層	Gr	長(m)	幅(m)	総重量(g)	総礫数(個)	掘り込み	平面形態 礫密度	観察所見
SI21	Ⅶ	E7	2.8	1.8	125,808	644	―	円・密	Ⅷ層直上より検出。全てが破砕礫で構成。礫の赤化が激しい。
SI23	Ⅶ	C8	1.7	0.4	2,538	13	―	散・粗	Ⅶ層下位より検出。礫の赤化が激しい。
SI27	Ⅶ	C8	1.1	1.5	3,223	14	―	散・粗	礫の集中する範囲が分かれる。礫の赤化が激しい。
SI30	Ⅶ	B10	0.6	0.4	11,937	42	―	円・密	平面形態は円弧状になり礫が密集。礫の赤化が激しい。

第６表　グリッド別器種分類表

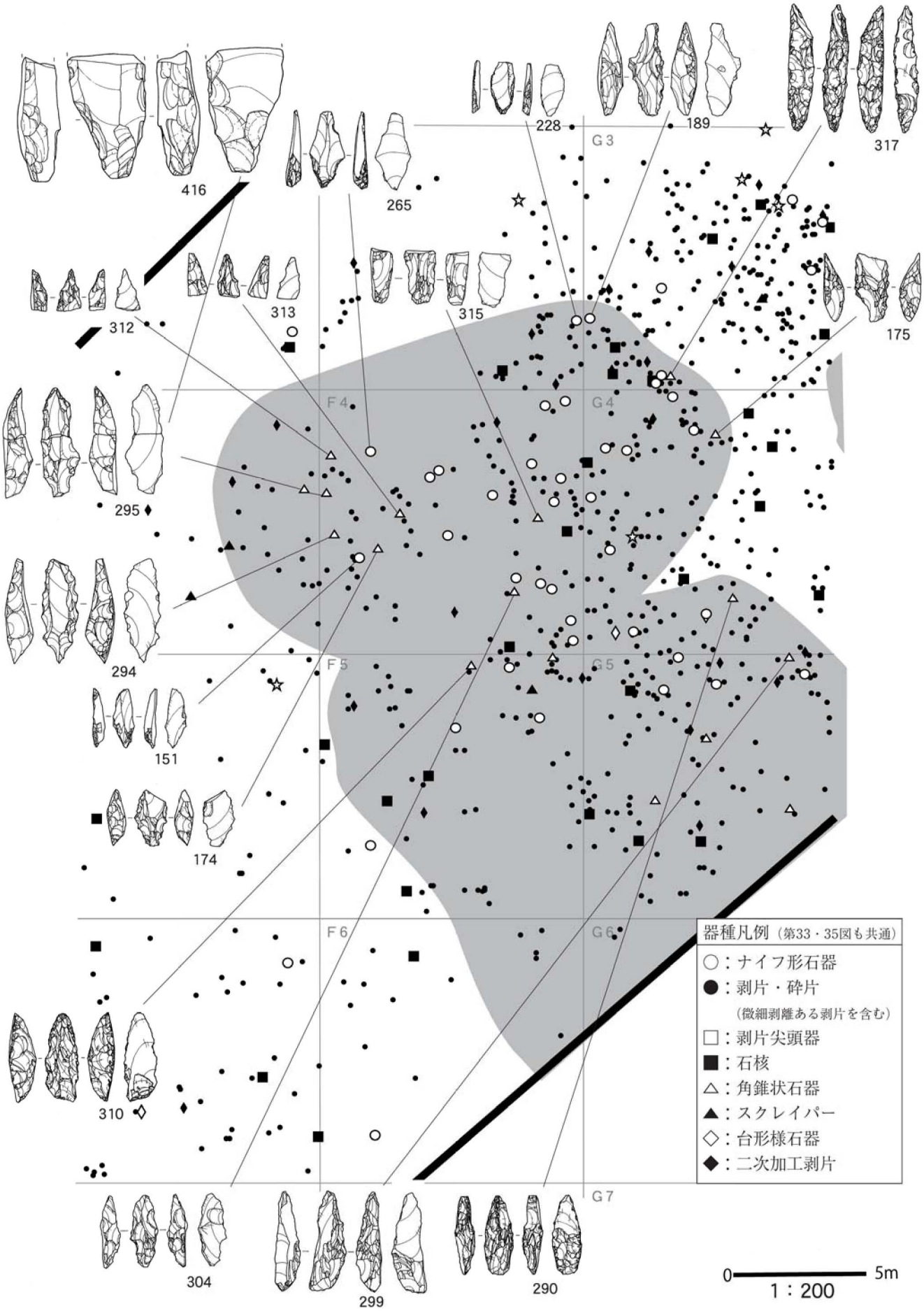
Gr		Kn	Tr	Ka	FP	Sc	RF	UF	Fl	Ch	Co	Ha	Mb	Mc	Cho
A8	b														
	d														
A9	b														
	c								2						
	d														
A10	a								5	1					1
	b														
B6	b														
	c														
	d								1						
B7	a								1						
	b	3							19	3			1		
	c								1						
	d	2		1			2	1	26		2		1		
B8	a														
	b			1			1		10	1					
	c														
	d					1			7		1				
B9	a								6	1					
	b	1		1					20				3	1	
	c	1							14	1			1		
	d	3			1		1		42	5					
B10	a								7	1	1				
	b	2		1			1		14	3			1	1	
	B10													1	
C5	a														
	b														
	c									1					
	d									1					
C6	a								1						
	b						1		13	1	1				
	c	1					1		8		1				
	d	3		2			1	2	72	6	3		4		
C7	a	1					2	2	67	2	1	2	2		
	b		1	1				2	22	2	2	1	1		
	c	1					1	1	44	3	4				
	d	2					1	3	44	3					
C8	a	1	2				3		36	4	1		2	1	
	b	1		1			1		41	3	1				
	c								11				1	1	
	d							1	23	1			2		
	C8												1		
C9	a			1				2	11		2				
	b	2		1					21	2	3				
	c	2		1			2	2	36	3	2			1	
	d	1						1	10		1				
C10	a			1			1		19	1	1		1		
	C10													1	
D4	a														
	b														
	c														
	d														
D5	a														
	b														
	c														
	d							1							
D6	a	2							12	1	1		1		
	b							1	5			1			
	c	4		1			1	2	60	1	4		1		
	d					1		2	22	1				3	
D7	a	2					1	1	40	3	1		1		
	b	3	1				4		20	2			1	1	
	c	2		1			5	1	33		3				
	d	1					3	1	40	2		2			
D8	a	3	1	1			4	1	39	2	3				
	b	1					1	1	21	1	2				
	c							1	18						
	d								10		1			1	1
D9	a								6						
	d														
D10	a														
	b														
	d														
E3	a														
	b														
	c								3						
	d	1					1		3						
E4	a						1		1						
	b			1			2		12						
	c								1						
	d					2			17				1		
	E4		1												
E5	a														
	b								7			1			
	c								4		1				1
	d							1	5						

凡例

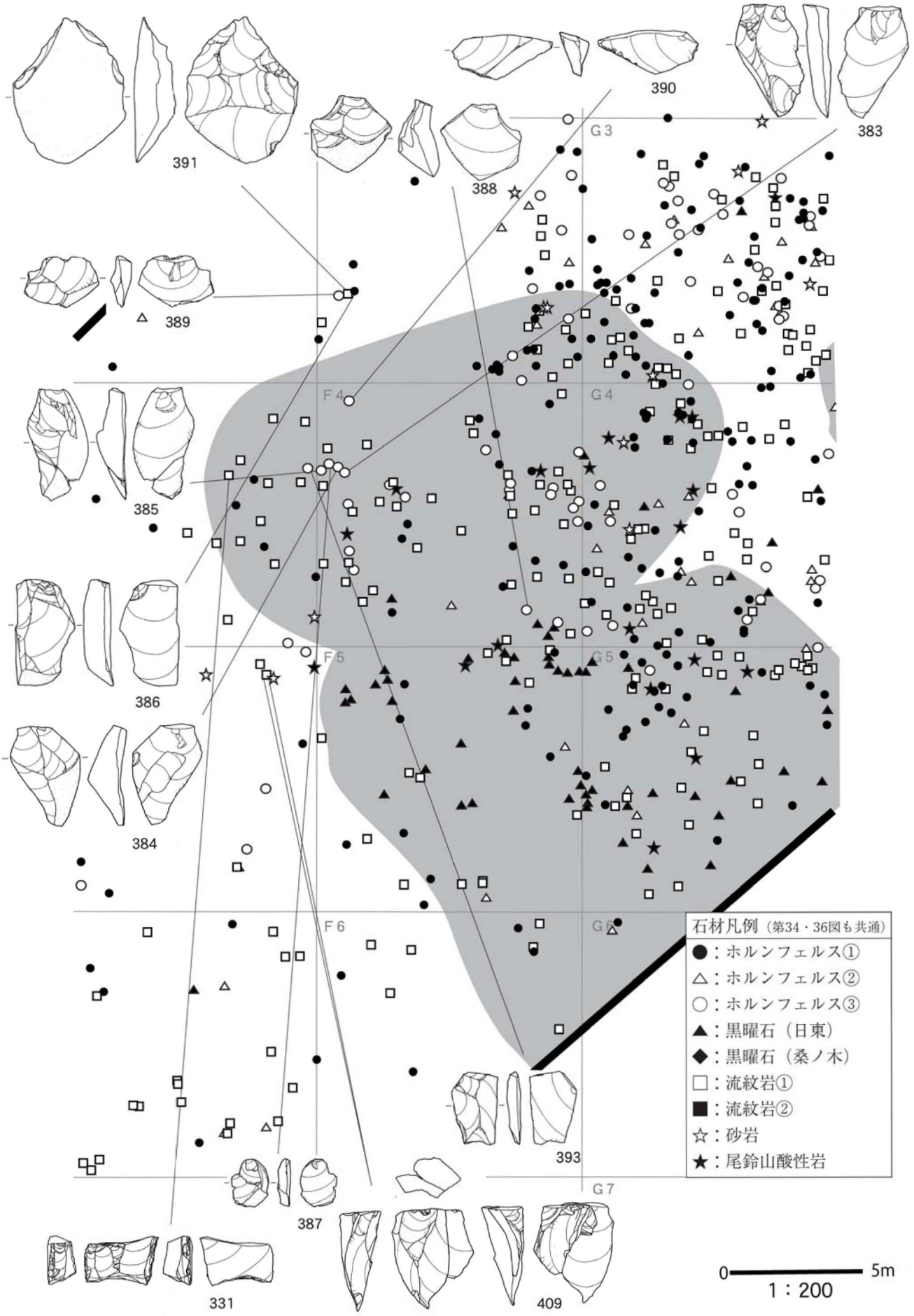
Kn…ナイフ形石器、Tr…台形様石器、Ka…角錐状石器、FP…剥片尖頭器、Sc…スクレイパー、RF…二次加工剥片、UF…微細剥離のある剥片、Fl…剥片、Ch…砕片、Co…石核、Ha…敲石、Mb…細石刃、MC…細石刃核、Cho…礫器

Gr		Kn	Tr	Ka	FP	Sc	RF	UF	Fl	Ch	Co	Ha	Mb	Mc	Cho
E6	a								4		1				
	b								8						
	c		1				1		9	1					
	d								14		2				
E7	a			1					22		1				
	b							1	26						
	c	1						3	49			1	1		
	d				1				27	1					
E8	a	1					1	1	22						
	b								2						
	c								2						
	E8	1													
E9	a														
	b		1				1		4						
	c							1	8						
	d								33	1	2			1	
E10	a								1						
	b														
	c														
	d														
F2	a														
	b								2						
	c								1						
	d								3						
F3	a								2						
	b								13			1		1	
	c						1	1	11	1					
	d	1					2	1	32		1				
	F3					1									
F4	a	3		3					32					1	
	b	6		1			1		48				1	2	
	c	2		2					30						
	d	5		1			1		38		2			1	
F5	a			1					15	2	1				
	b	3		2		1	1		24						
	c	1					1		8		2			1	
	d								16				1		
F6	a								9		1				
	b								5				1		
	c	1							2						
	d														
	F6											1			
F7	a								2						
	b														
	c														
F8	a														
	b						1		3	1					
	c	1							4		1				
	d	1		1					18	3	1			1	
F9	a								13						
	b								2				1		
	c			1					3		1				
	d														
G0	b														
	c														
	d														
G1	a														
	b														
	c														
	d														
G2	a	1													
	b								3						
	c								4						
	d	1				1			10					1	
G3	a	1						26	1	1	1			1	
	b	2					2		51	1	2	3	2	1	
	c	4		1			3	1	54	2	3		1		
	d	1				1	1	1	79	1	1		1		
G4	a	5		1			1	2	50	1	1				
	b						1		28	1	3			1	
	c	2	2						59	2	1	1			
	d			1			1		28	1	1			3	
G5	a	3		1			1		38	1	1		1	1	
	b			2			2		26	1					
	c			1			1		25		3				
	d			1					6	1					
G6	a								2						
	b														
	c														
G7	b								15						
	c								4						
	d						1	1	85	9	4		3	1	
G8	a						1	1	14	1					
	b								8					1	
	c								2						

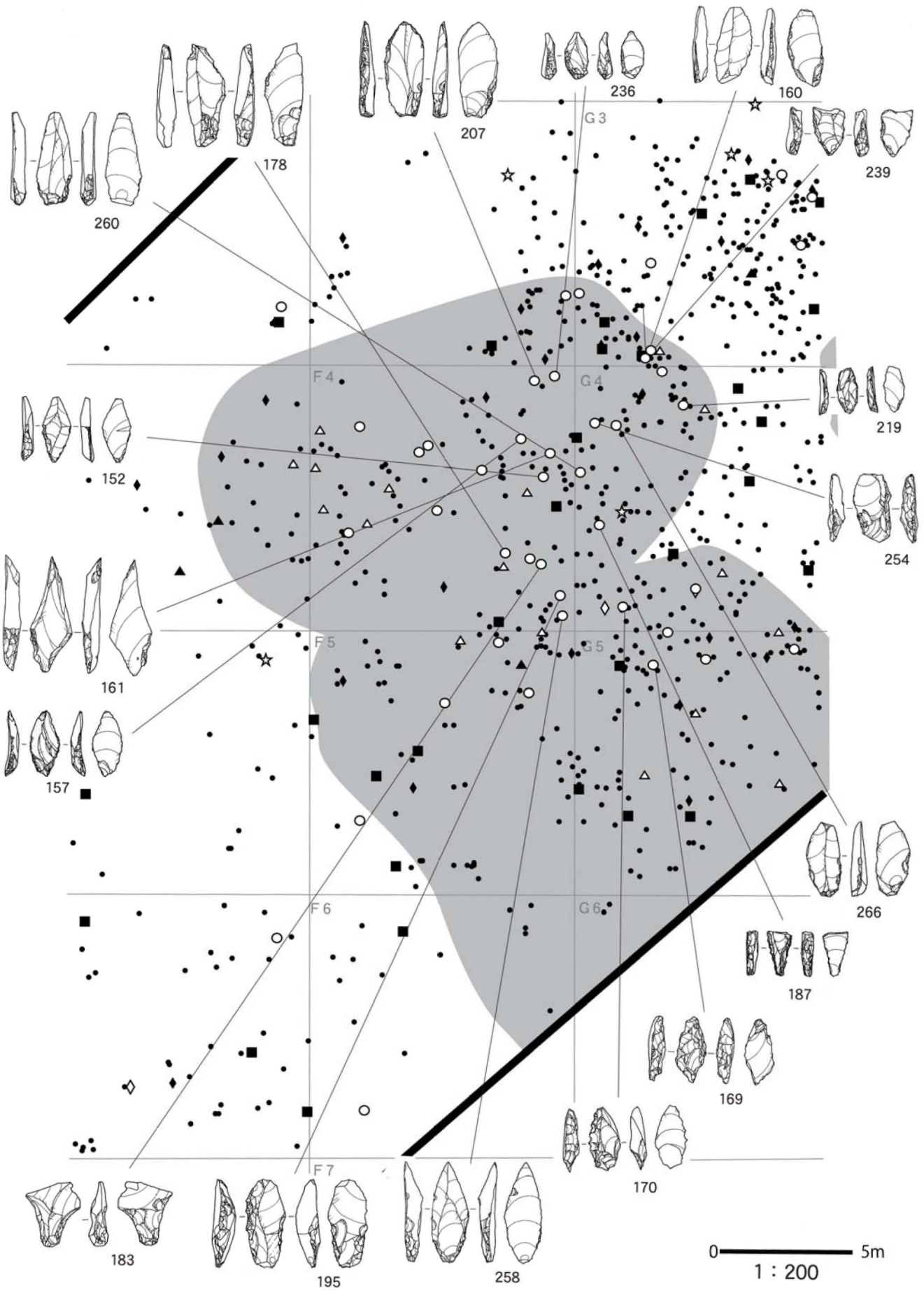
Gr		Kn	Tr	Ka	FP	Sc	RF	UF	Fl	Ch	Co	Ha	Mb	Mc	Cho
H0	a														
	b														
	c														
	d													1	
H1	a														
	b								1						
	c														
	d					1			5			1			
H2	a	1						1	22						
	b		1			2	2		32				2		
	c							1	12						
	d	2					2		32		1		2	1	
H3	a	3						1	61	1	1		3		
	b	1		1			3		35	1	1		4		
	c	5					2	1	59		2			2	2
	d												1		
H4	a	2	4				1	1	67	1	1		1	1	
	b	2	1	1	1		3	1	61		1				
	c						2		22					1	
	d								46	1	1		1	1	
H5	a								10						
	b														
	c														
H6	b														
	c						1		5		1			1	
	d	1							3						
H7	a								24	1					
	b								1						
	c	1				1	1	1	21	1	1		2		
I0	a														
	b														
	c								2						
	d						1								
I1	a								9	1	1		1		
	b	2						1	10		1			1	
	c								7						
	d	2					2	2	17	2			2	1	
I2	a	1							15	1	1				
	b	1	1						26		3			1	
	c								6						
	d	2						2	22		1		1		
	I2	1													
I3	a	1					2	1	42				5		
	b	2							54	3	2		3	1	
	c	1	1				1		18		1		1		
	d	1							37				1		
I4	a		1				1		23					1	
	b	1							4	1					
	c								9						
	d														
I5	c	1													
J0	c	1									1				
J1	a	1						1	12						
	c	2		1			3		25					1	
	d								14	1					
J2	a	3		1			1		16		1		1		
	b								3						
	c	2					1		41	1	1		1		
	d						1		4	1				1	
J3	a			1			1		22		1		1		
	b						1		22	1			3		
	c	2		1			1		24				1		
	d								2						
J4	a														
K1	b														
K2	a														
	b														
	c								6	2	1				
	d														
K3	a			1					2	1					
	b														
	c														
	d														



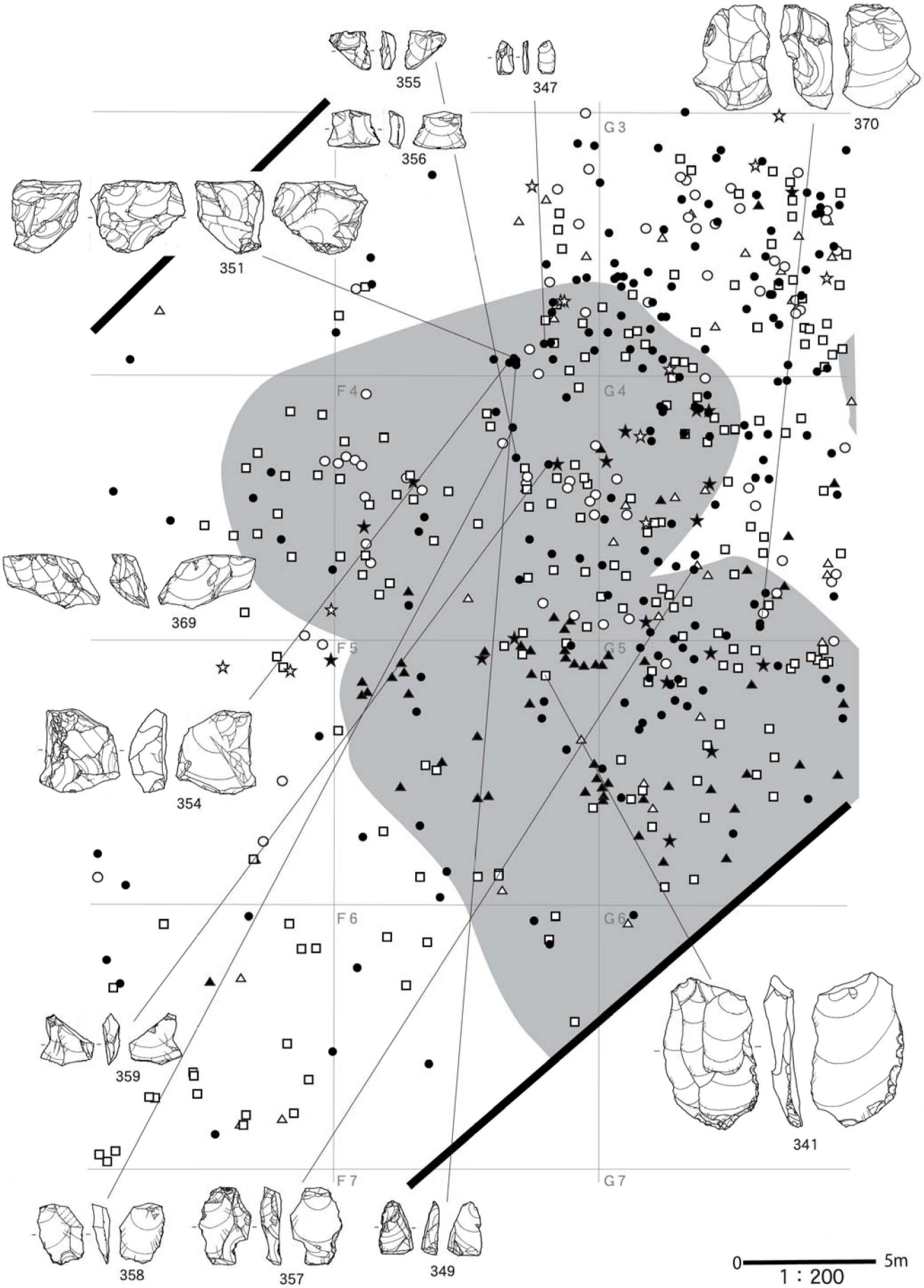
第31図　ブロックD石器分布図（器種）



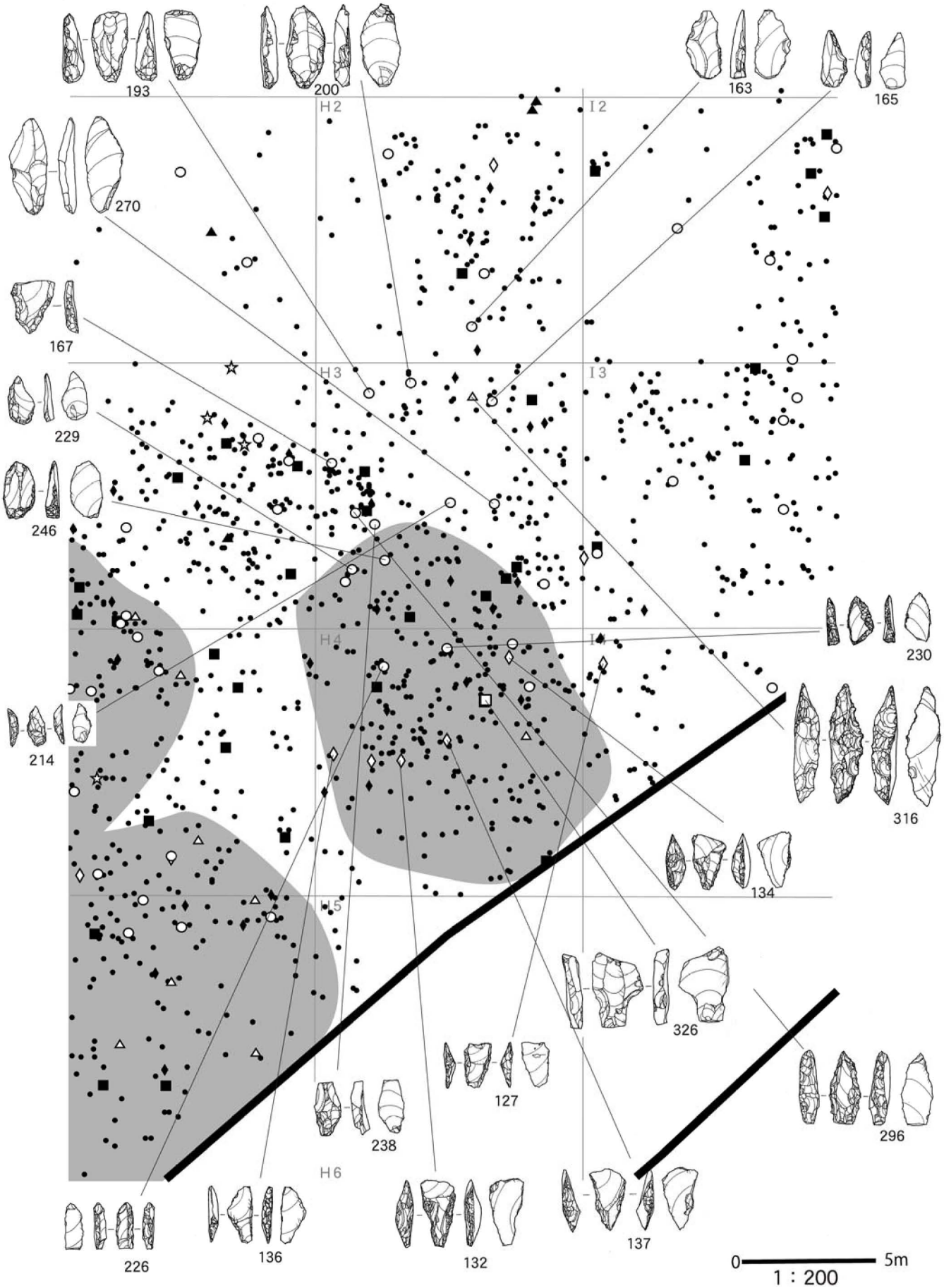
第32図　ブロックD石器分布図（石材）



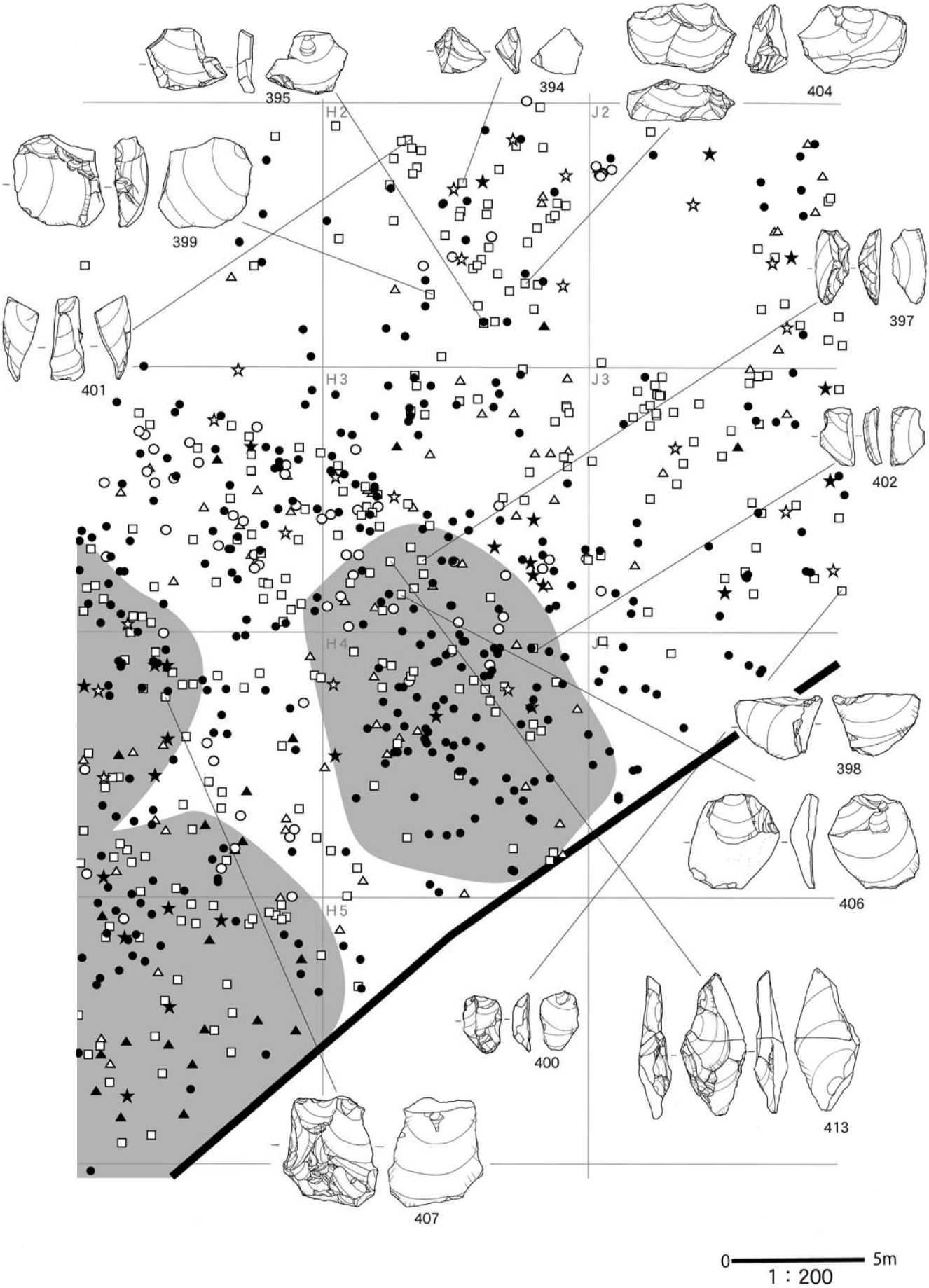
第33図　ブロックE石器分布図（器種）



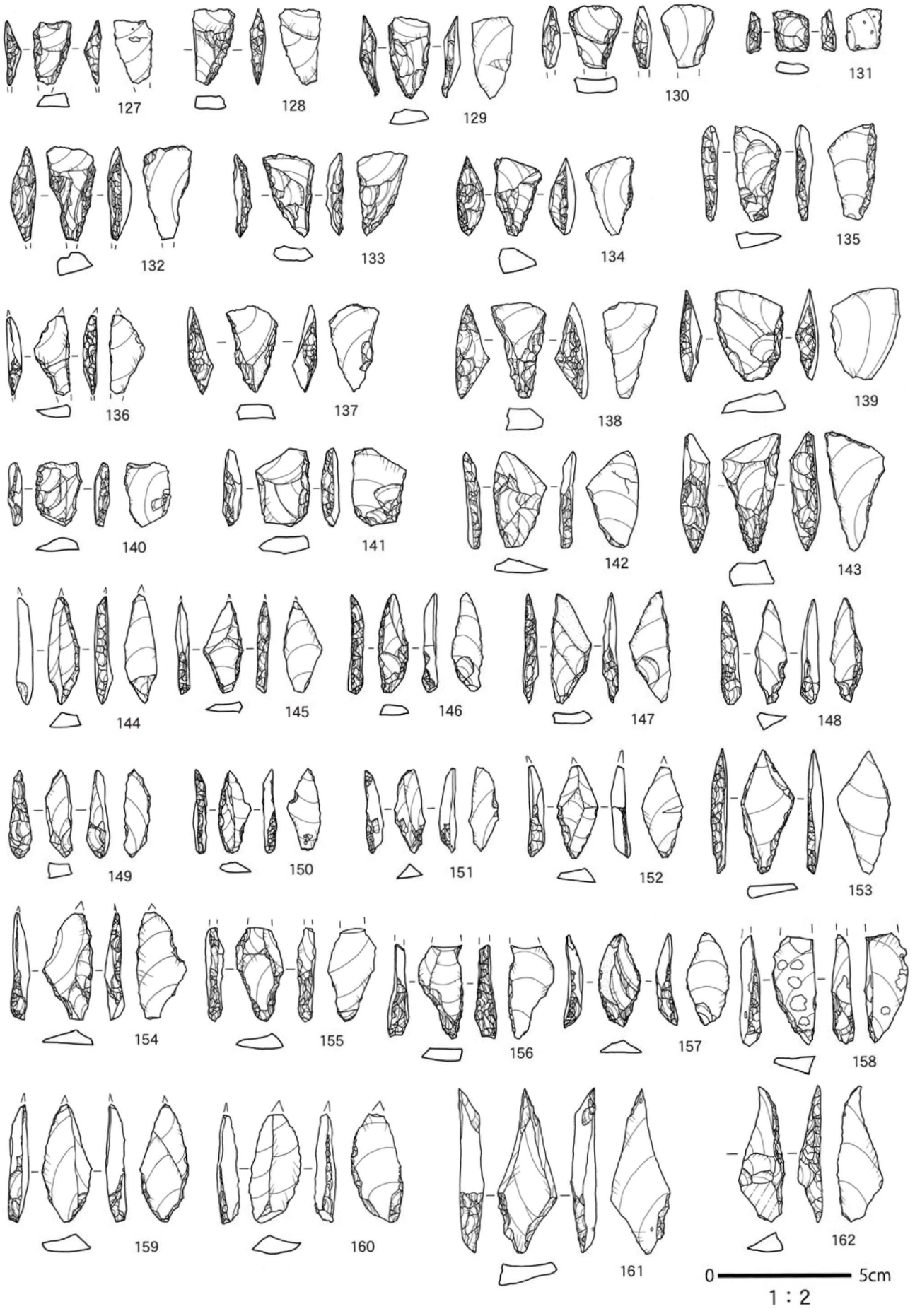
第34図　ブロックE石器分布図（石材）



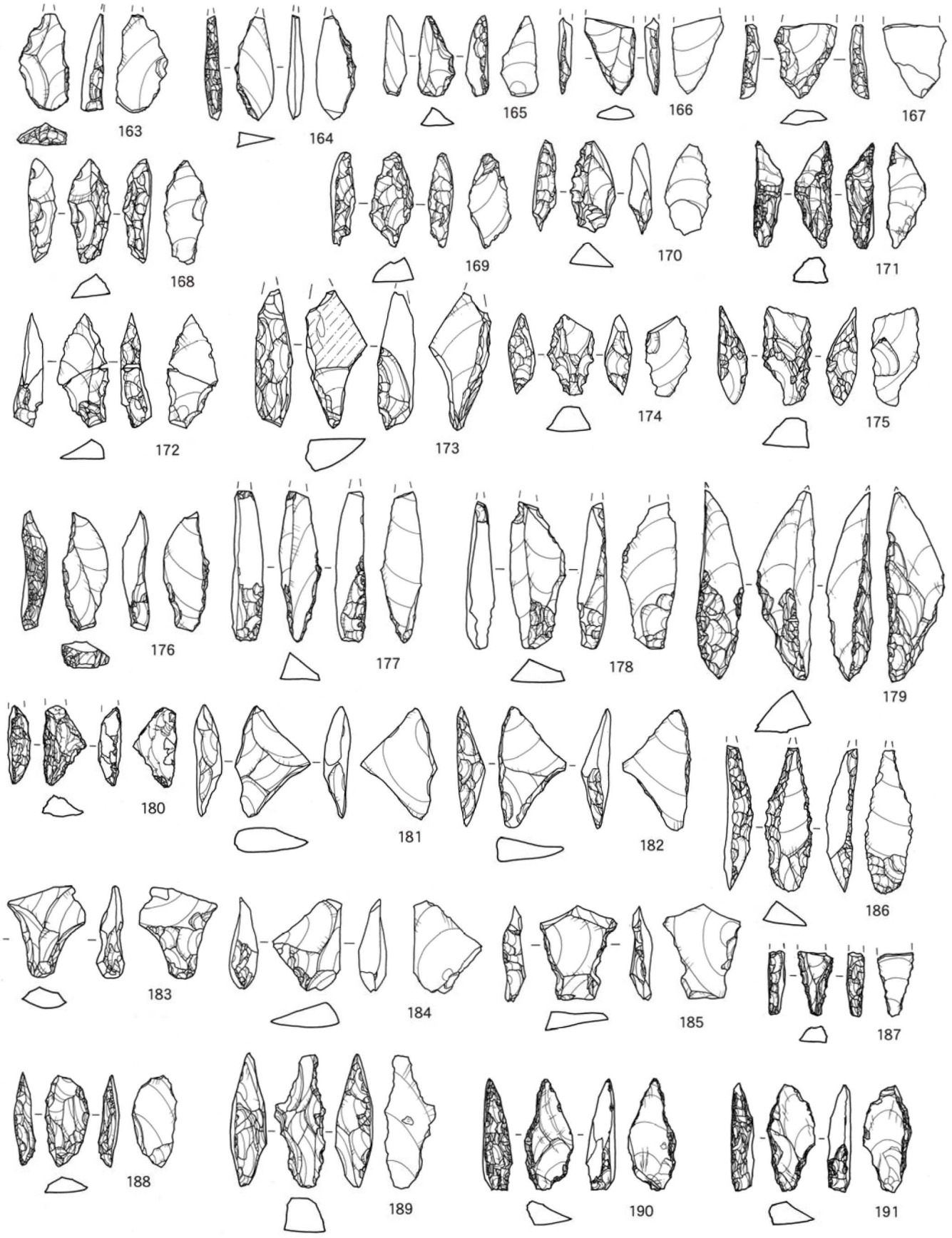
第35図　ブロックF石器分布図（器種）



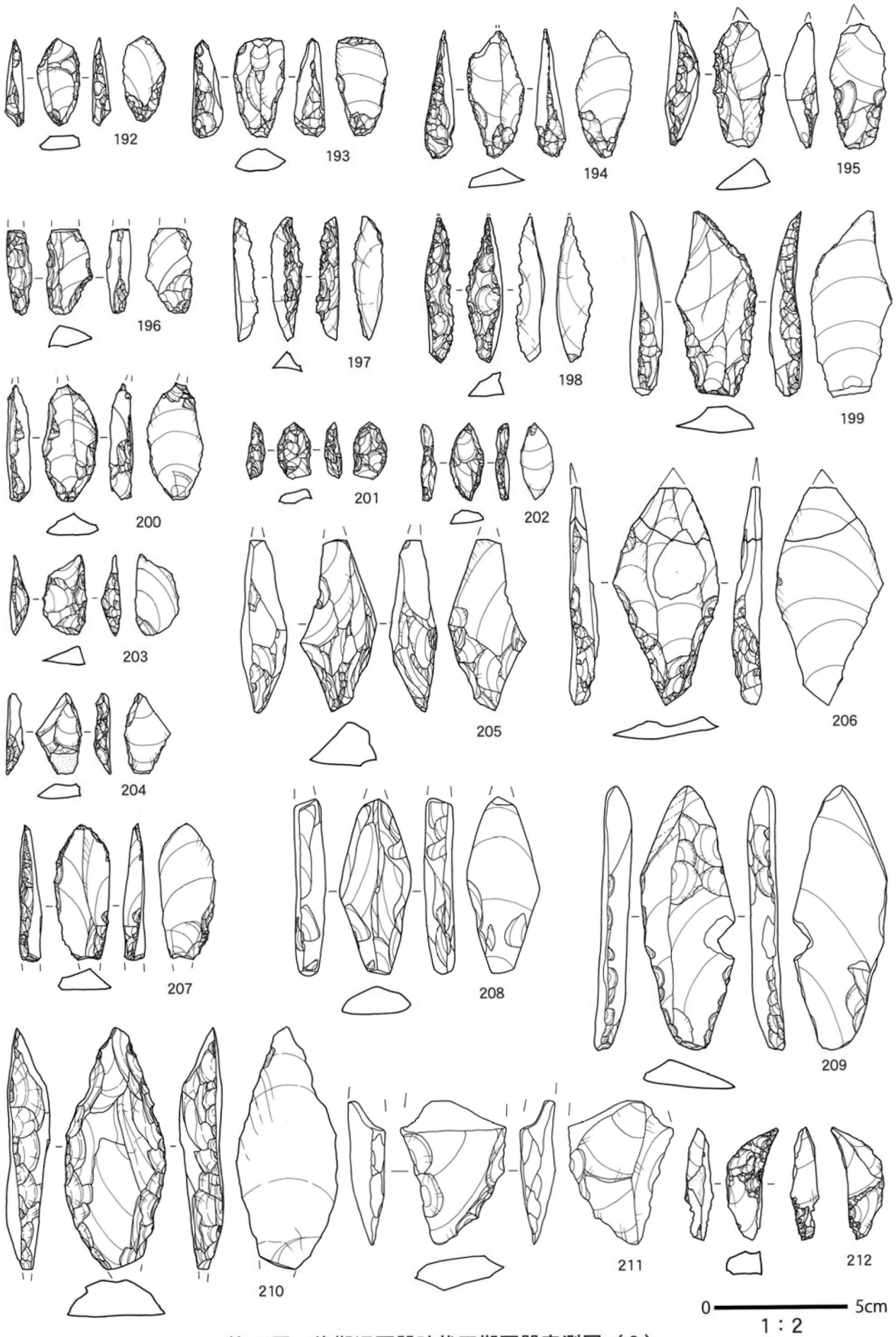
第36図　ブロックF石器分布図（石材）



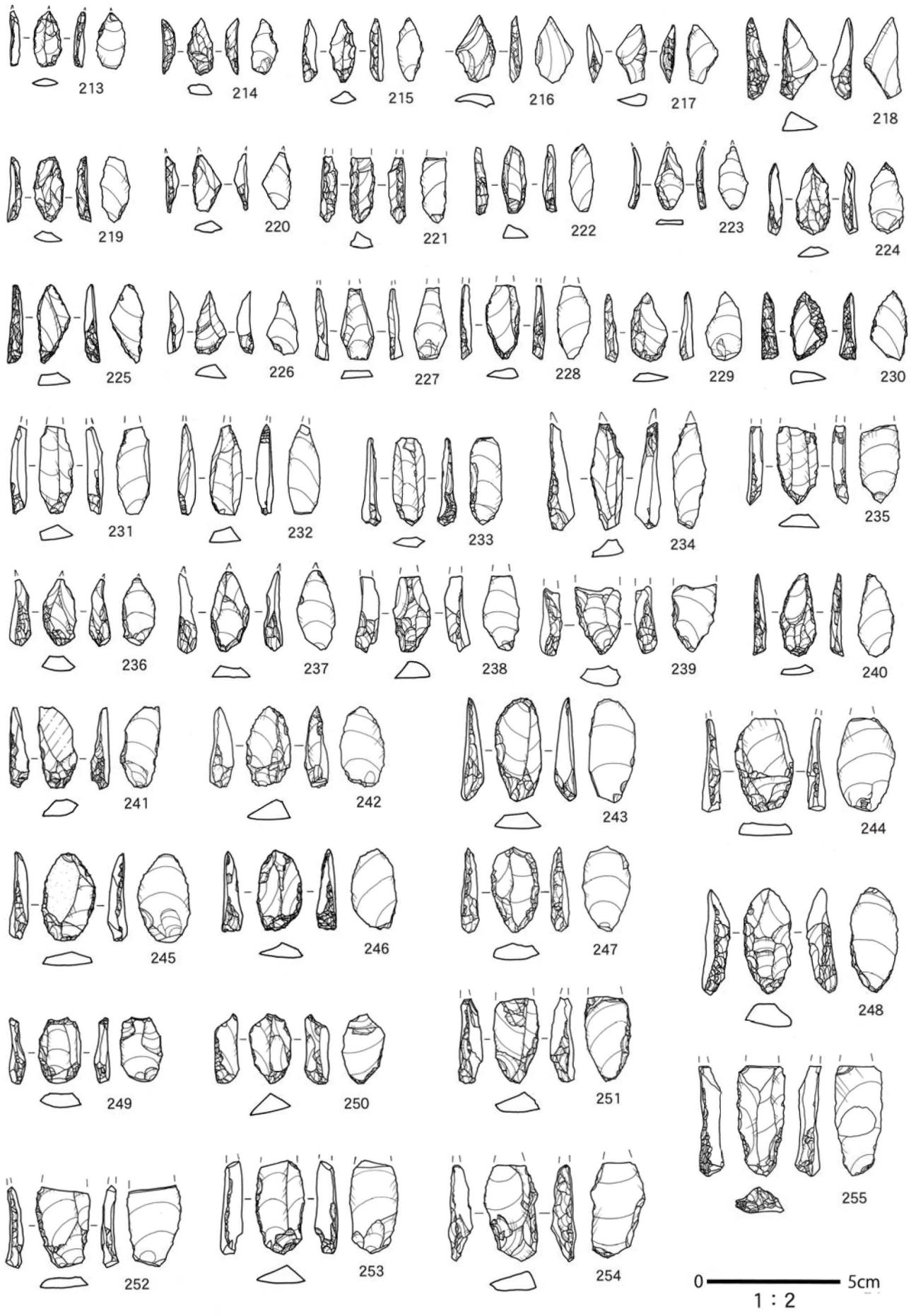
第37図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（1）



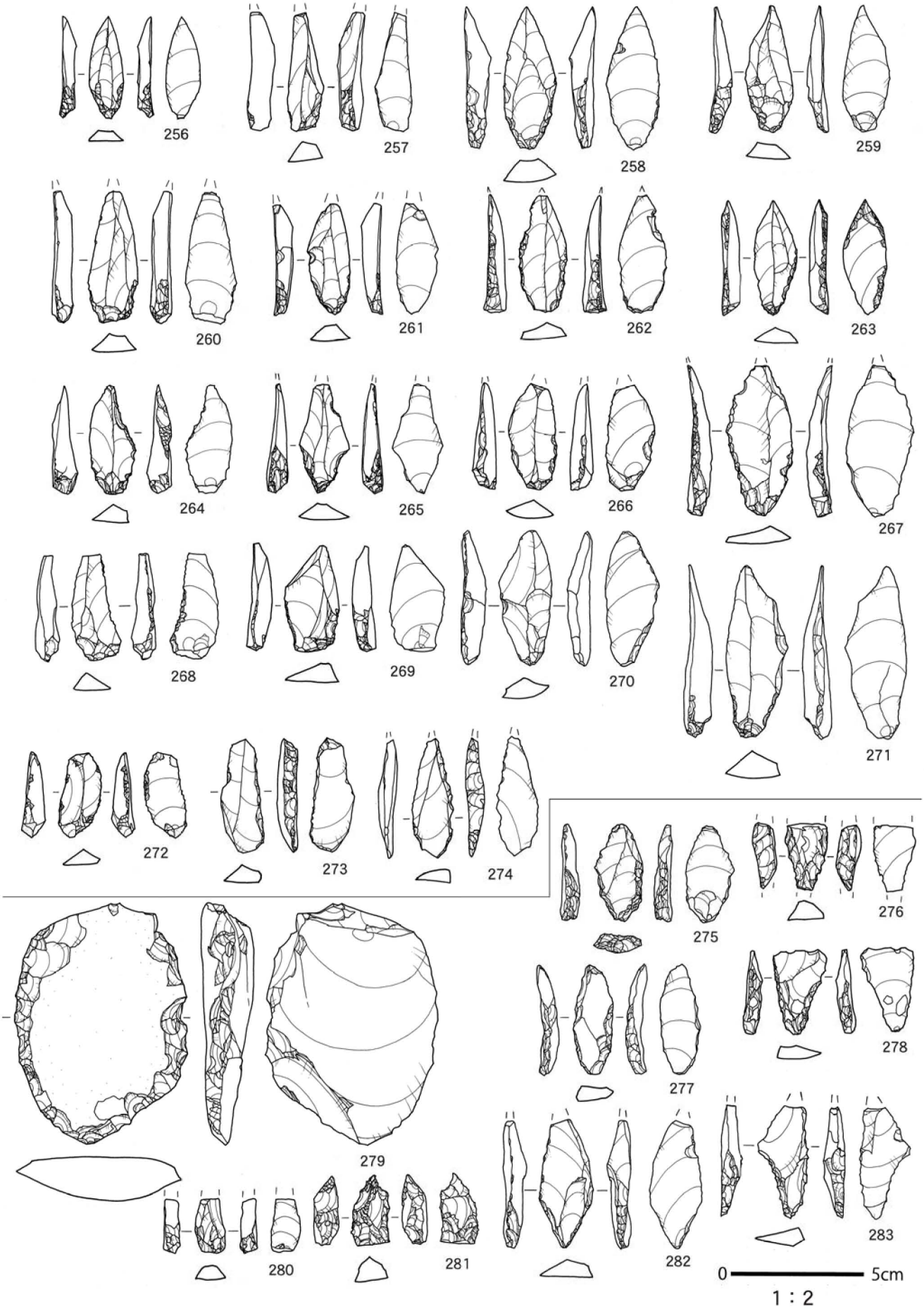
第38図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（2）



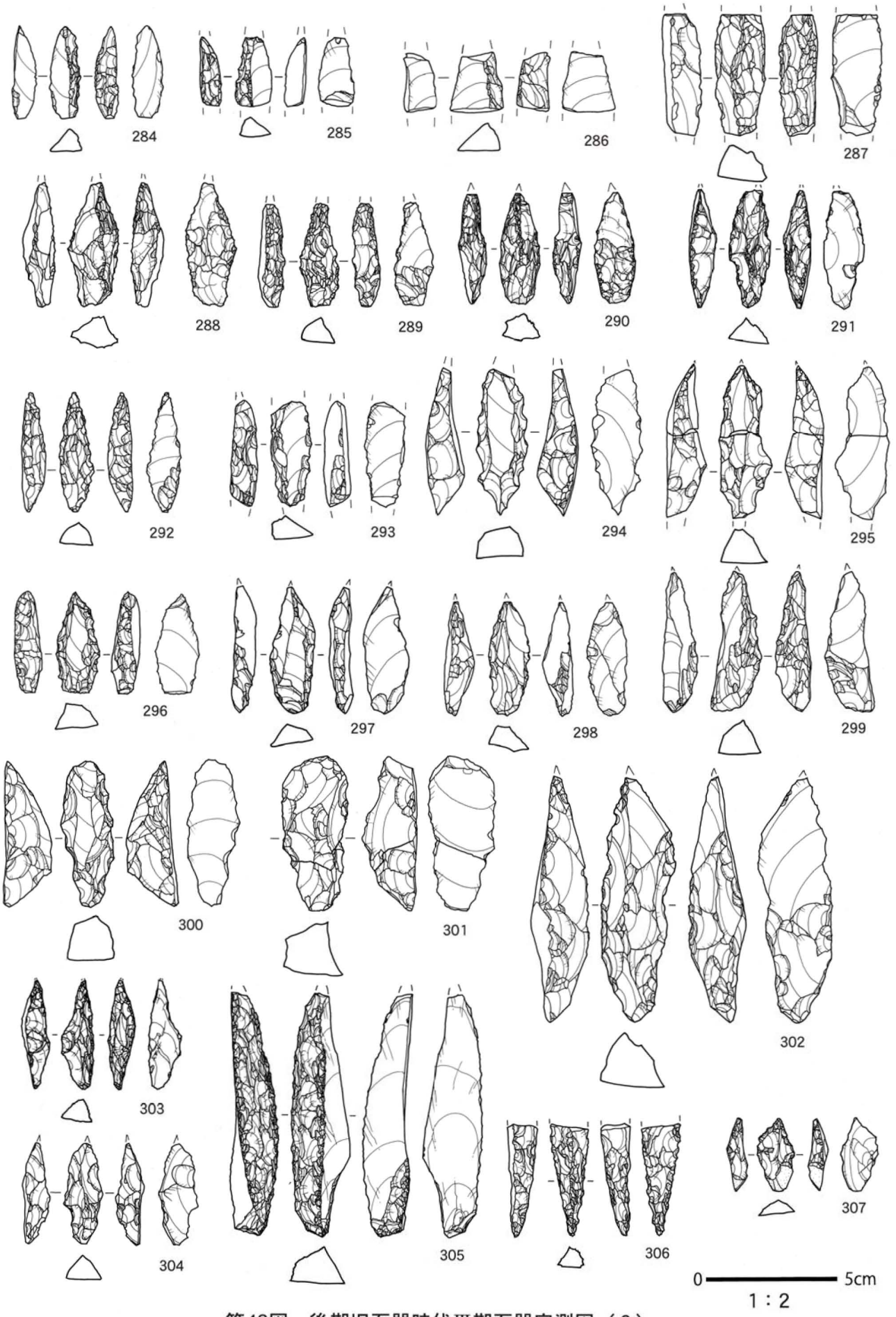
第39図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（3）



第40図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（4）



第41図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（5）



第42図　後期旧石器時代Ⅲ期石器実測図（6）